

浜松城下町遺跡 2

Hamamatsu Castle Town Site

2020年3月

浜松市教育委員会

Hamamatsu Municipal Board of Education, March, 2020



浜松城下町遺跡 2

Hamamatsu Castle Town Site

The 11th excavation report

Hamamatsu Municipal Board of Education

2020

浜松市教育委員会

例　言

- 1 本書は浜松城下町遺跡（11次調査）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は国道257号の道路改良工事に先立ち実施した。発掘調査は浜松市（南土木整備事務所）の依頼により、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財が補助執行）が行い、実務は浜松市から委託を受けた株式会社アコードが担当した。調査にかかる費用は、浜松市が負担した。
- 3 発掘調査にかかる面積と期間は、以下の通りである。

調査面積	380.7 m ²
委託期間	令和元年（2019）5月23日～令和2年（2020）3月19日 (うち現地調査期間 令和元年7月2日～11月7日)
- 4 調査は、鈴木京太郎（浜松市市民部文化財課）、和田達也（同）指示のもと、西村匡広（株式会社アコード）が担当した。
- 5 調査で作成した図面の編集、出土遺物の整理作業や記録作業は、西村の指示のもと田村和久、田畠徹也、今田明子、吉井啓二（株式会社アコード）が行った。
- 6 本書の執筆は、第1章1～3、第3章を鈴木が、第2章1を和田が担当し、ほかを西村が行った。現地における写真撮影及び遺物写真撮影は、西村が行った。本書の編集は、西村が行った。
- 7 調査にかかる諸記録及び出土遺物は、浜松市地域遺産センターで保管している。
- 8 現地調査及び報告書作成にあたり、下記の方々や機関から様々なご指導、ご助言、ご支援を賜った。記して感謝申し上げます（順不同・敬称略）。

藤澤良祐　堀内秀樹　笠原　隆

凡　例

- 1 本書に記載された測量成果については、世界測地系に基づく。図中のX・Y座標は国土座標第VII系によるものであり、m単位で表記している。また平面図の方位（北）は座標北を示している。
- 2 標高は東京湾平均海面水（T.P.）に基づいている。
- 3 本調査の調査区名はこれまでの調査に従い、ローマ数字を用いた呼称を採用した。
- 4 本遺跡の土層・構造埋土及び遺物胎土の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』2015版（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。
- 5 遺構番号については調査区ごとに01から開始し、二桁で表示した。
- 6 本書における遺構略記号は、以下のとおりである。

溝（SD）、井戸（SE）、土坑（SK）、小穴（SP）、柱列（SA）、自然流路（SR）、その他遺構（SX）
--
- 7 本書における挿図の縮尺は各図中に明示したが、遺構図は1/40を基本とした。遺物については1/4を基本とし、金属など小型品を1/2、1/1で掲載した。
- 8 遺物の断面の網掛けの使用例は、以下の通りである。

須恵器	■■■ (K=100%)	土師器・土師質土器	□□□	陶器	■■■ (K=40%)
磁器	■■■ (K=20%)	貿易陶磁器	■■■ (K=60%)		

浜松城下町遺跡 2

目 次

例言・凡例

第1章 序 論	1
1 調査に至る経緯	1
2 遺跡周辺の環境	2
(1) 地理的環境	2
(2) 歴史的環境	2
3 浜松城下町遺跡の調査履歴	3
4 調査の方法と経過	5
第2章 調査成果	9
1 確認調査の成果	9
(1) 確認調査の概要	9
(2) 基本層序と遺構検出面	9
(3) 検出遺構と出土遺物	11
(4) 小 結	16
2 基本層序と遺構検出面	19
(1) 基本層序	19
(2) 遺構検出面	21
3 I 区の調査	22
(1) 概 要	22
(2) 遺 構	22
(3) 遺 物	29
(4) 小 結	33
4 II 区の調査	34
(1) 概 要	34
(2) 遺 構	34
(3) 遺 物	59
(4) 小 結	66
5 III区の調査	68
(1) 概 要	68
(2) 遺 構	68
(3) 遺 物	69
(4) 小 結	70
6 IV区の調査	71

(1) 概 要	71
(2) 遺 構	74
(3) 遺 物	75
(4) 小 結	77
遺構一覧表	78
出土遺物観察表	88
第3章 総 括	94
1 発掘調査の成果	94
2 今後の課題と展望	95

図 版

挿図目次

Fig.1 浜松城下町遺跡の位置	1
Fig.2 近世城下町の構造と浜松城下町遺跡の調査履歴	4
Fig.3 調査区配置図	6
Fig.4 調査地区割模式図	7
Fig.5 現地作業風景	8
Fig.6 整理作業風景	8
Fig.7 確認調査の調査区配置	10
Fig.8 7次調査詳細	12
Fig.9 8次調査詳細	13
Fig.10 7次調査出土遺物（1）	14
Fig.11 7次調査出土遺物（2）	15
Fig.12 8次調査出土遺物	16
Fig.13 調査区堆積状況模式図	19
Fig.14 II a 区地割境の状況	20
Fig.15 II a 区東壁地割境の状況	20
Fig.16 II a 区西壁地割境の状況	20
Fig.17 II a 区西壁地割境の状況	20
Fig.18 I 区遺構全体図	22
Fig.19 I 区壁面図	23
Fig.20 I 区遺構図（1）	24
Fig.21 I 区 SE01 遺構図	25
Fig.22 I 区 SE02 遺構図	25
Fig.23 I 区 SK02 遺物出土状況図	26
Fig.24 I 区遺構図（2）	27
Fig.25 I 区遺構図（3）	28
Fig.26 I 区 SA01 遺構図	29
Fig.27 I 区出土遺物	30
Fig.28 I 区 SE02 上・中層出土遺物	31
Fig.29 I 区 SE02 下層出土遺物	32
Fig.30 II a・II b 区遺構全体図	35

Fig.31 II a・II b 区壁面図（1）	36
Fig.32 II a・II b 区壁面図（2）	37
Fig.33 II c 区遺構全体図	38
Fig.34 II c 区北部壁面図	39
Fig.35 II c 区南部西壁面図	40
Fig.36 II c 区南部南壁面図	41
Fig.37 II d・II e 区遺構全体図	42
Fig.38 II d 区壁面図	43
Fig.39 II e 区壁面図	44
Fig.40 II b 区 SD01 遺構図	45
Fig.41 II c 区南部遺構図（1）	46
Fig.42 II c 区南部西壁断面 地割境界	47
Fig.43 II c 区南部東壁断面 地割境界	47
Fig.44 II c 区北部 SE01 遺構図	47
Fig.45 II c 区南部 SE02 遺構図	48
Fig.46 II c 区北部 SE03 遺構図	49
Fig.47 II b 区 SK09 遺構図	50
Fig.48 II b 区 SK09 遺物出土状況図	50
Fig.49 II c 区北部遺構図（1）	50
Fig.50 II a・II b 区遺構図（1）	52
Fig.51 II c 区南部遺構図（2）	53
Fig.52 II c 区南部遺構図（3）	54
Fig.53 II e 区遺構図	55
Fig.54 II d 区 SX02 遺構図	56
Fig.55 II d 区 SX03 遺構図	57
Fig.56 II a 区 SA01 遺構図	58
Fig.57 II c 区南部 SA02 遺構図	59
Fig.58 II a・II b 区出土遺物	60
Fig.59 II c 区北部出土遺物	61
Fig.60 II c 区南部出土遺物（1）	62
Fig.61 II c 区南部出土遺物（2）	64
Fig.62 II d 区出土遺物	65
Fig.63 II e 区出土遺物（1）	65
Fig.64 II e 区出土遺物（2）	65
Fig.65 III区遺構全体図	68
Fig.66 III区壁面図	69
Fig.67 III区遺構図	70
Fig.68 III区出土遺物	70
Fig.69 IV区遺構全体図	71
Fig.70 IV区西壁面図	72
Fig.71 IV区北壁面図	73
Fig.72 IV区 SD02・SK02・SK05 遺構図	74
Fig.73 IV区 SK03・SK04 遺構図	74
Fig.74 IV区 SR01 遺構図	75
Fig.75 IV区出土遺物	76

表 目 次

Tab.1	確認調査出土遺物観察表（1）	17
Tab.2	確認調査出土遺物観察表（2）	18
Tab.3	I 区遺構一覧表（1）	78
Tab.4	I 区遺構一覧表（2）	79
Tab.5	III区遺構一覧表	79
Tab.6	II 区遺構一覧表（1）	80
Tab.7	II 区遺構一覧表（2）	81
Tab.8	II 区遺構一覧表（3）	82
Tab.9	II 区遺構一覧表（4）	83
Tab.10	II 区遺構一覧表（5）	84
Tab.11	II 区遺構一覧表（6）	85
Tab.12	II 区遺構一覧表（7）	86
Tab.13	IV区遺構一覧表	87
Tab.14	遺物観察表（1）	88
Tab.15	遺物観察表（2）	89
Tab.16	遺物観察表（3）	90
Tab.17	遺物観察表（4）	91
Tab.18	遺物観察表（5）	92
Tab.19	遺物観察表（6）	93
Tab.20	大窯段階における陶器の時期別組成	95

図 版

PL.1	1	II a 区完掘全景（南西から）	2	II a 区東壁断面（北西から）
PL.2	1	I 区完掘全景（東から）	PL.10	1 II a 区V層上面高杯出土状況（東から）
	2	I 区完掘全景（南から）		2 II a 区SP08 鉄滓出土状況（南から）
PL.3	1	I 区西壁断面（東から）		3 II a 区SP39 根石出土状況（西から）
	2	I 区北壁断面（南から）		4 II a 区SP47 断面（西から）
	3	I 区 SE01 断面（東から）		5 II a 区SP13・SP39 断面（東から）
PL.4	1	I 区 SE02 断面（北から）		6 II a 区SP48 断面（西から）
	2	I 区 SE02 中層遺物出土状況（北から）		7 II a 区SP55 断面（西から）
PL.5	1	I 区 SE02 完掘状況（北から）		8 II a 区SP45 断面（西から）
	2	I 区 SD01 完掘状況（西から）	PL.11	1 II b 区完掘全景（北東から）
PL.6	1	I 区 SK02 遺物出土状況（北から）		2 II b 区南壁断面（北から）
	2	I 区 SP15 根石出土状況（南から）	PL.12	1 II b 区SK09 検出状況（東から）
	3	I 区 SP09 断面（南から）		2 II b 区SK09 遺物出土状況（東から）
	4	I 区 SP20 断面（南から）	PL.13	1 II b 区SK09 断面（南西から）
	5	I 区 SP07 断面（南から）		2 II b 区SK112 遺物出土状況（東から）
PL.7	1	II a 区完掘全景（南から）		3 II b 区SP112 遺物出土状況（東から）
	2	II a 区完掘全景（北から）		4 II b 区SD01 断面（北から）
PL.8	1	II a 区完掘全景（北東から）		5 II b 区SP126 断面（西から）
	2	II a 区柱列 SA01（南から）	PL.14	1 II c 区北部完掘全景（南から）
PL.9	1	II a 区西壁断面（北東から）		2 II c 区北部東壁断面（西から）

	3	II c 区北部西壁断面（東から）	3	II d 区 SP105 断面（北から）
PL.15	1	II c 区北部 SE03 2 層上面遺物出土状況 (西から)	4	II d 区 SP106 断面（西から）
	2	II c 区北部 SE03 5 層上面礫層検出状況 (北から)	5	II d 区 SP102・SP109 断面（東から）
PL.16	1	II c 区北部 SE01 完掘状況（南から）	PL.26	1 II e 区完掘全景（東から）
	2	II c 区北部 SE01 断面（南から）		2 II e 区南壁断面（北東から）
	3	II c 区北部 SE01 底面遺物出土状況 (西から)	PL.27	1 III区完掘全景（東から）
	4	II c 区北部 SE03 上層断面（北から）		2 III区東壁断面（西から）
	5	II c 区北部 SE03 下層断面（北から）		3 III区南壁断面（北から）
PL.17	1	II c 区南部完掘全景（北から）	PL.28	1 IV区完掘全景（西から）
	2	II c 区南部完掘全景（北西から）		2 IV区西壁断面（東から）
PL.18	1	II c 区南部完掘全景（南から）	PL.29	1 IV区III-4 層遺物出土状況（東から）
	2	II c 区南部南壁断面（北から）		2 IV区 SK03・SK04 完掘状況（東から）
	3	II c 区南部西壁断面（北東から）		3 IV区 SK03・SK04 断面（東から）
PL.19	1	II c 区南部 SD04・SD07・SD08 完掘状況 (西から)		4 IV区 SR01 完掘状況（東から）
	2	II c 区南部 SD02 完掘状況（西から）		5 IV区 SR01 断面（西から）
PL.20	1	II c 区南部 SD04A・SD04B・SD07 断面 (西から)	PL.30	1 城下町形成期の出土遺物
	2	II c 区南部 SD02 断面（西から）		2 近世城下町の出土遺物
	3	II c 区南部 SE02 完掘状況（北から）	PL.31	I 区出土遺物（1）
PL.21	1	II c 区南部 SE02 上層断面（南から）	PL.32	I 区出土遺物（2）
	2	II c 区南部 SE02 下層断面（北から）	PL.33	I 区出土遺物（3）
	3	II c 区南部 SE02 底面遺物出土状況 (北から)	PL.34	1 II a 区出土遺物
	4	II c 区南部 SP157 遺物出土状況（東から）		2 II b 区出土遺物
	5	II c 区南部 SP157 遺物出土状況（北東から）	PL.35	II c 区北部出土遺物（1）
PL.22	1	II c 区南部 SP137 遺物出土状況（南から）	PL.36	1 II c 区北部出土遺物（2）
	2	II c 区南部 SP136 遺物出土状況（南から）		2 II c 区南部出土遺物（1）
	3	II c 区南部 SP153 根石出土状況（北西から）	PL.37	II c 区南部出土遺物（2）
	4	II c 区南部 SP180 根石出土状況（東から）	PL.38	II c 区南部出土遺物（3）・II d 区出土遺物
	5	II c 区南部 SP158 根石出土状況（北から）	PL.39	II e 区出土遺物
	6	II c 区南部 SP159 断面（東から）	PL.40	1 III区出土遺物
	7	II c 区南部 SP188 断面（南から）		2 IV区出土遺物（1）
	8	II c 区南部 SP181 断面（南から）	PL.41	IV区出土遺物（2）
PL.23	1	II d 区完掘全景（東から）		
	2	II d 区南壁断面（北西から）		
PL.24	1	II d 区 SX02 断面（南から）		
	2	II d 区 SX02 完掘状況（北から）		
PL.25	1	II d 区 SX03 断面（西から）		
	2	II d 区 SP98 断面（北から）		

第1章 序論

1 調査に至る経緯

浜松城下町遺跡は、浜松城の城下町及び東海道の宿場町の範囲を含む中近世の遺跡である。近年、当遺跡内における近世東海道の道筋である国道257号とその周辺道路について、交通集中に関わる課題が懸案となってきていた。そうした中、この課題解決に向けて道路拡幅を主とした道路改良工事が計画された。そのため工事を主管する浜松市（土木部南土木整備事務所）と浜松市教育委員会（浜松市民部文化財課が補助執行）が協議を行い、まずは道路拡幅部分について遺構・遺物の残存状況を把握するための確認調査を行うことになった。

確認調査は平成28（2016）年8月～9月と、平成29（2017）年4月・12月に実施した。調査対象地の多くは近現代の掘削が深く及んでいたが、近世以前の遺構・遺物を確認できた部分において記録保存を目的とした本発掘調査を行うこととなった。

本発掘調査は、浜松市教育委員会（浜松市民部文化財課）が調査主体となり、現地における実務は株式会社アコードに委託した。現地調査の期間は、令和元（2019）年7月2日～11月7日である。調査区は9区に分かれており、調査面積合計は380.7m²である。

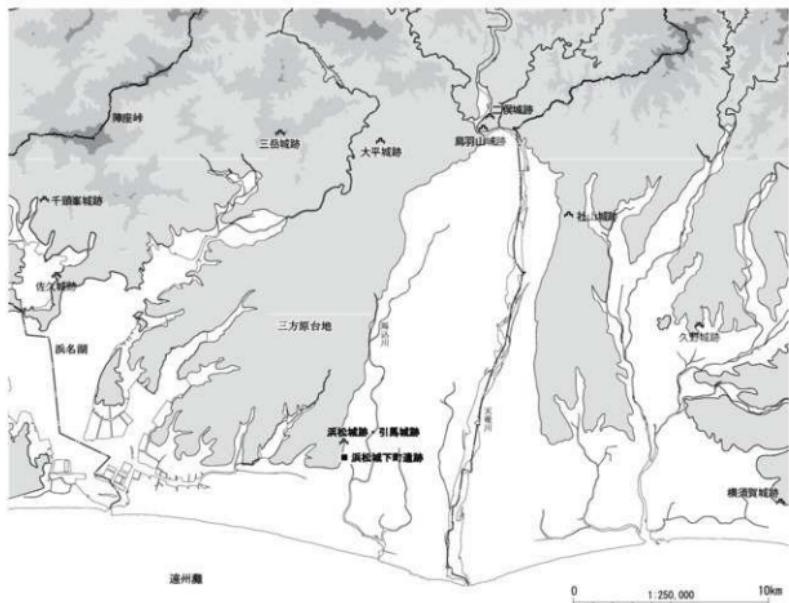


Fig.1 浜松城下町遺跡の位置

2 遺跡周辺の環境

(1) 地理的環境

浜松城下町遺跡は、浜松城跡を中心とした三方原台地東縁部の丘陵から平野にかけて広く展開しており、遺跡の範囲は東西 1.8 km、南北 1.5 km に及ぶ。市の中心部に位置することから、市街地化の進行によって遺跡の残存状況は良好とはいえない。城下町の景観もほとんど失われているが、地形や道筋、水路、地割等には近世城下町の絵図から変わらない部分も残されており、往時の様子を垣間見ることができる。

(2) 歴史的環境

原始・古代 浜松城跡及び浜松城下町遺跡周辺において、原始・古代の集落は確認できていないが、これまでの発掘調査で古墳時代後期～奈良時代の遺物が少量ながら出土していることから、小規模な集落が展開していた蓋然性は高い。また、当遺跡周辺の三方原台地縁辺部には、かつて後期古墳や横穴墓が展開していたことが知られており、浜松城内古墳（所在地不明）からは、馬具等が出土したとされる（静岡県 1930）ほか、作左山横穴では、須恵器・鉄器が出土している（向坂 1976）。

中世 鎌倉時代には、浜松城下町の原形ともいえる引馬宿が形成された。建治 3 (1277) 年の『十六夜日記』には「こよいはひくまのしゅくといふところにとゞまる、このところおほかたの名は、はま松とぞひし」とある。また、万里集九は文明 17 (1485) 年に『梅花無尽藏』で、「引馬、市富、屋千区」と繁栄していた様子を記している。引馬宿の具体的な位置は明らかではないが、江戸時代中期の『曳馬拾遺』には、野口村、八幡村、早馬、元黙など「元はま松」という所はかつて引馬の駅といった、とあり、当遺跡の北東部、現在の野口町や八幡町周辺に推定されている。これらの地域には、近世城下町の区画と異なる地割がみられる（太田 1996）。当遺跡での発掘調査においても、少量ながらも広範に山茶碗や陶器が出土しており、人々の暮らしが営まれていたことがわかる。

浜松城の前身である引馬城跡は、引馬宿推定地西側の小丘陵に立地する。16 世紀前葉成立の『宗長手記』によれば、吉良氏被官の巨見新左衛門尉によって築かれ、15 世紀代には整備されたと考えられる。永正 14 (1517) 年には、大河内氏から今川氏親が引馬城を奪い、飯尾氏を城主に任じた。引馬城周辺には「椿屋敷」「蛇屋敷」などの地名がみられ、家臣の屋敷地の存在が想定される。

なお、引馬城跡における表面採集や発掘調査で出土したかわらけ等の遺物も、15 世紀後半～16 世紀代に位置付けられ（和田 2016）、文献資料の年代を裏付けているが、引馬城跡以外の浜松城域においても同時期の遺構・遺物は確認されており、徳川家康による城域拡充の以前から、浜松城域も引馬城の一部として使われていた可能性が想定される（井口ほか 2016）。

元亀元 (1570) 年には、徳川家康が引馬城に入城して浜松城と改称したとされる。『家忠日記』には、天正年間に幾度も浜松城の普請を行ったことが記されており、武田方との攻防に備えて城の拡充を図った様子がうかがえる。また、天正年間には、城周辺の寺社が移転している記録が多く残されており、城下の再編が行われたことも想定される。

天正 18 (1590) 年には、豊臣方の堀尾吉晴が浜松城へ入城する。この段階で、高石垣や瓦葺建物等の整備が行われたとされ（加藤 1994）、城の姿は大きく変貌し、現在見られる浜松城の姿に近づいた。

近世 慶長 5 (1600) 年、堀尾吉晴が出雲へと移り、浜松城は徳川方の譜代大名が治めるようになると再び城の姿は大きく変貌する。それまでの東正面から南正面の城となり、二の丸、三の丸の

整備も進められた。城下町も、東海道の移設に伴い大きく改変された（太田 1996）。17世紀前半以降の城下町の様相は、絵図等の史料からうかがい知ることができる。『遠江浜松城下絵図』からは、今回の調査対象地付近は、城下町の東海道筋の町人地にあたり、番所や本陣があったことがわかる。

近現代 明治 6（1873）年の廃城令によって、浜松城の建造物は解体され、土地は払い下げられた。城下町の景観は維持されたが、太平洋戦争時の空襲によりその多くが焼失した。戦後、街区の一部は残されているものの、大規模開発や区画整理等によって、往時の景観はほとんど失われている。

3 浜松城下町遺跡の調査履歴

調査の端緒 従来、浜松城下町遺跡は、「浜松宿」「旧引間宿推定地」という2つの遺跡として登録されており、いずれも市街地化により遺跡はほとんど残っていないと考えられてきた。そうした中で 2013 年以降、水道工事等への立会調査を行う中で、僅かながら遺物を包含する層が確認されるようになり、2015 年の 1 次調査へとつながった。その後 2016 年には 2 つの遺跡を統合・改称し、これまで範囲外だった部分も含めた「浜松城下町遺跡」として取り扱うこととなった。

1・2次調査 県道 68 号線（植松和地線）拡幅工事に伴う確認調査（1次・2015年）と本発掘調査（2次・2015年）である。戦国時代～江戸時代の遺構・遺物が確認されており、周辺に展開している「蛇屋敷」「椿屋敷」など武家の屋敷地に関わる可能性が指摘されている（井口 2018）。

3・5次調査 国道 257 号線拡幅工事に伴う確認調査（3次・2015年）と本発掘調査（5次・2016年）である。城下町の南端部における調査で、近世城下町に伴う遺構・遺物とともに 16世紀後半の遺構・遺物も認められ、城下町の形成期を示す可能性があるものとして重要である。また、奈良時代・鎌倉時代の遺物も一定量確認されていることも注目される（和田ほか 2017）。

4次調査 県道 68 号線（植松和地線）拡幅工事に伴う確認調査（2016年）である。鎌倉時代と江戸時代の遺物が少量出土したが、湿地状の土層堆積であり、遺構は確認されなかった。

6次調査 集合住宅建設に先立つ確認調査（2016年）である。近現代の掘削が地下 2 m 以上に及んでおり、遺構・遺物は確認されなかった。

7・8・11次調査 国道 257 号線拡幅工事に伴う確認調査（7次・2016年、8次・2017年）と本発掘調査（11次・2019年=今回報告）である。いずれも詳細は次章にて報告する。

9次調査 下水道工事に先立つ確認調査（2018年）である。遺跡範囲の北東端に位置しており、遺構・遺物は確認されなかった。

10次調査 県道 68 号線（植松和地線）拡幅工事に伴う確認調査（2019年）である。一部で鎌倉時代と戦国時代を主体とする遺構・遺物を確認しており、今後本発掘調査を実施予定である。

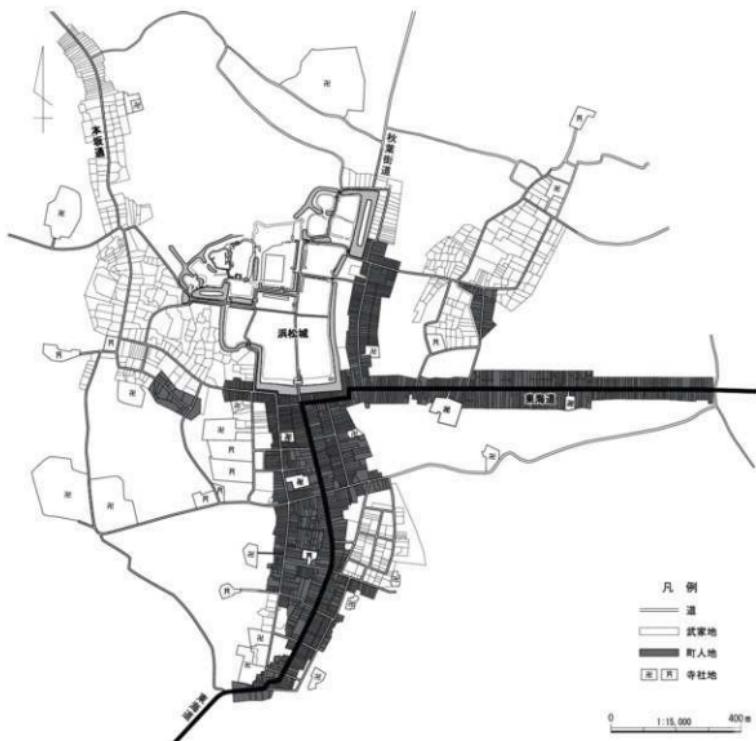


Fig.2 近世城下町の構造と浜松城下町遺跡の調査履歴

4 調査の方法と経過

調査はまず表土及び盛土、擾乱層などをバックホウを用いて取り除き、その後は人力で掘り下げて基盤層上で遺構検出を行った。調査区の設定に関しては、既設の水道管やガス管などが調査範囲内に走っており、事前にその位置を確認できたものについては、破損することのないようあらかじめ調査範囲から除外した。一方掘削中に新たにみつかった管については撤去可能かどうか確認をとった上で対応した。調査範囲が道路あるいは住宅に隣接するため、必要に応じて控えをとり安全確保に努めた。

遺構の調査は先述のとおり基盤層上で遺構検出を行い、遺構配置図を作成した。遺構の掘削は小穴（ピット）や土坑については、基本的に長軸に対し半截して断面写真や断面図をとった上で完掘作業をすすめた。完掘した遺構は完掘状況の写真撮影を行い、平面図を作成した。大型の土坑や不整形の遺構については十字ベルトを設定して調査を行ったものもある。溝については土層観察用のベルトを設定して掘削した。井戸など深さのある遺構については、可能な限り半截して断面写真撮影及び断面測量を行ったが、安全に掘削することが困難な深さに達したものについては、埋め戻しの際に人力やバックホウを用いて遺構周辺を掘削して安全を確保できた状態で調査を実施した。

遺物の取り上げは層ごとに行なった。遺構から出土した遺物は、遺構名ならびに層名を記載して取り上げた。遺存状況の良好なものについては、出土状況写真撮影及び出土状況図を作成したのちに、取り上げ番号を付与して取り上げた。

図面の作成はトータルステーションと電子平板を用いたデジタル測量を基本とし、デジタルカメラと編集ソフトを用いた写真測量も併用した。

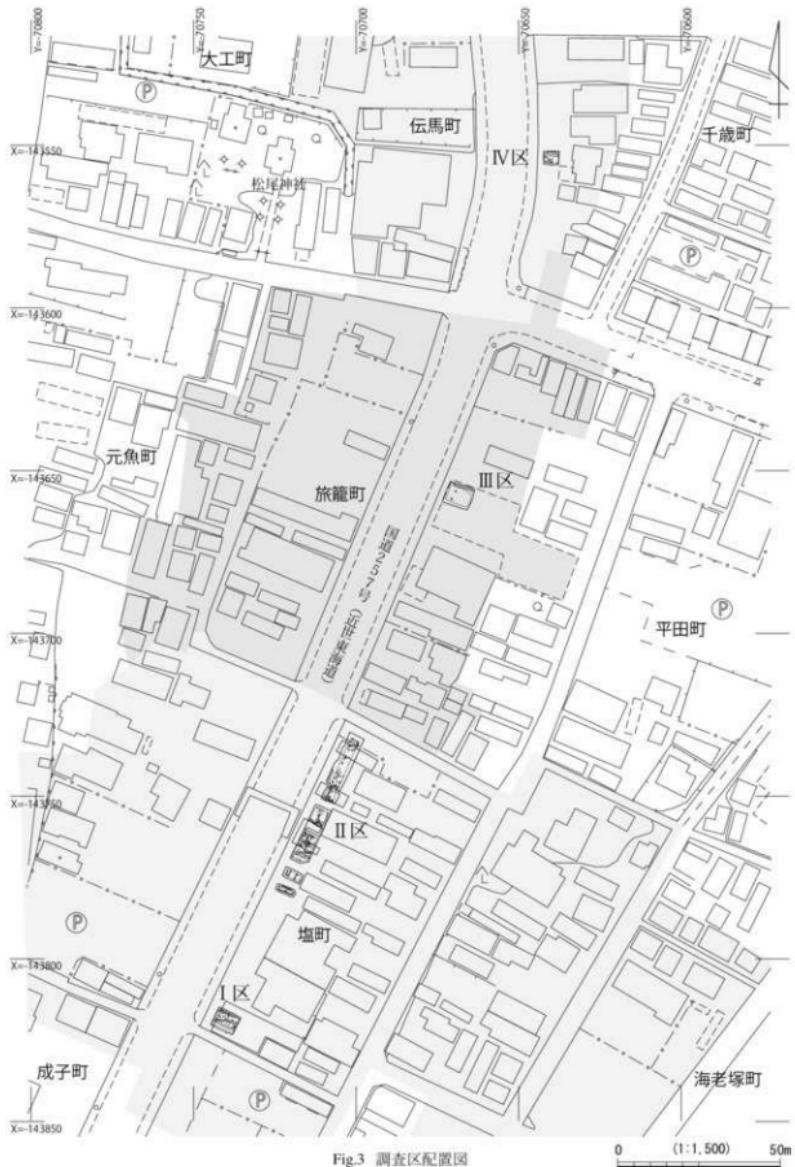
写真撮影は 6×7 判カメラ（リバーサルフィルム）と、35ミリカメラ（モノクロフィルム）、フルサイズデジタルカメラ（3635万画素）を使用した。リバーサルフィルムはスリープ現像、モノクロフィルムはペタ焼現像を行った。デジタルデータはJPEGデータを作成した。フィルム写真はアルバムに収納し、写真台帳を作成した。

浜松城下町遺跡はこれまで10次にわたる発掘調査が行われており、周知のとおり広範囲にわたることが確認されている。今回の調査にあたっては、遺跡及び遺構の位置や遺物の出土地点を厳密に把握するために地区割り（グリッド）の設定を行った。これまでの調査においては採用されていなかつたが、今後も継続的に調査されることを念頭に置き、活用されるよう配慮した。

遺跡の位置は平面直角座標の第VIII系（世界測地系）を使用して表示した。Fig.4に示すとおり、遺跡全体を網羅できるよう $1,000 \times 1,000$ mで区画される大グリッドを設定した。これにアラビア数字で1.2.3～6までの番号を付し、そのグリッドを10等分して南北方向に北からA.B.C～Jまで、東西方向は西からA.B.C～Jまでの記号を付し、中グリッドとした。さらにそれを20等分して 100×100 mで区画されるグリッドを設定した。これを小グリッドとし、これにも南北が北から南へ1.2.3～20まで付した。東西方向は西から東へのa.b.c～tまで付した。これにより最小単位 5×5 mのグリッドができる。

遺構の測量、遺物の取り上げはこのグリッド単位で行い、遺物の取り上げは北西角の調査杭を使用した。グリッド名の記載は「SHCp15」というように遺物カードおよび平面図に記載した。

調査は開始当初I～IV区の4ヶ所で実施する予定であった。しかしながら先述のとおり既設の水道管やガス管などが調査範囲内に走っていることが判明し、II区については6ヶ所に分割して調査することとなり、都合9地区に調査区が及んだことから、計画よりもやや遅延気味に進んだ。調査



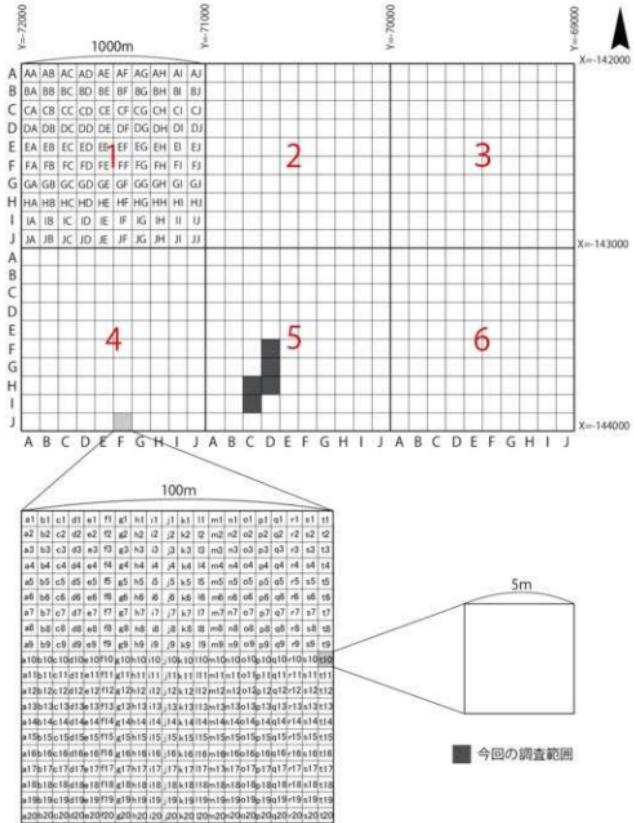


Fig.4 調査地区割模式図

の順序はIII区から着手し、引き続きII区の調査を行った。II区は北からa・b・c北部・c南部・d・eに分割したが、a→e→d→b→c 北部→c 南部という順に調査した。その後I区、最後にIV区を調査した。調査は7月2日から着手し、最終的に11月7日にすべての調査が完了した。調査と並行して遺物洗浄を行い、それ以降の作業は現場事務所撤収後に行った。

整理作業は出土遺物の登録台帳作成から着手した。遺物注記は、登録台帳に基づいて登録ナンバーを注記マシーンと面相筆を用いて行った。復元は残存状態の良い遺物を抽出して行い、素材は石膏を用いた。実測は手測りで行い、デジタル実測も併用した。実測図のトレースはデジタルトレースを行った。遺物写真撮影はデジタルカメラを使用してスタジオで撮影した。集合写真はデジタルカメラに加え、6×7判フィルムカメラによる撮影も行った。遺構・遺物図面の編集はデジタル編集を行い、報告書作成もデジタル編集で行った。その後報告書の執筆作業を行い、令和2年3月10日に報告書を刊行するに至った。3月16日に成果品の納品及び検査を行い本業務を完了させた。



Fig.5 現地作業風景



Fig.6 整理作業風景

第2章 調査成果

1 確認調査の成果

(1) 確認調査の概要

浜松城下町遺跡 11 次調査に先立つ確認調査は、平成 28 年から平成 29 年にかけて、調査対象地の環境が整った地点から着手し、断続的に 4 度に分けて実施した。7 次調査は、平成 28 年 8 月 29 日から 9 月 1 日にかけてと、平成 29 年 2 月 8 日に実施した確認調査である。8 次調査は、平成 29 年 4 月 10 日と 12 月 13 日に実施した確認調査である。調査溝の番号は 7 次調査の調査溝は北から南へと連番を付し（調査溝 1～25）、8 次調査の調査溝は 7 次調査からの連番とし、北から南へと付した（調査溝 26～29）。7 次調査の対象面積は約 1,800 m²あり、このうち調査面積は約 68 m²、8 次調査の対象面積は約 410 m²あり、このうち調査面積は約 16 m²である。

(2) 基本層序と遺構検出面

基本層序の概要 確認調査では、29 箇所の調査溝を設定し調査を行った結果、土層の堆積状況の傾向を明らかにすことができた。土層の堆積時期や特徴に基づき、大きく 5 つの層位に整理した。I 層：現地表面と II 層の間の土層および、現代の面から行われた攪乱、II 層：焼土層（昭和前期か）、III 層：近代の包含層、IV 層：近世～古代の包含層、V 層：基盤層（黄褐色粘土）である。以下、確認調査により明らかになった各層の特徴と課題について整理する。

I 層 I 層は、現地表面から近代の焼土層（戦災焼土層）上面の間で認識できる土層である。舗装や碎石敷きの地表面、II 層上面の三和土、整地土等である。なお、戦後から今回の調査前までに行われた建物の建築や解体工事の影響を受けていると判断できる縮まりのない濁色層は攪乱と表記した。

II 層 II 層は、太平洋戦争の空襲により形成された戦災焼土層である。焼土を主体としているが、炭化物や溶融したガラス、レンガ、生活雑貨類などを含む土層である。浜松城下町遺跡において広域に確認でき、層序から時期の推定を行う上で定点になる特徴的な土層といえる。II 層の検出高は、対象地の北側が標高約 6.0 m、南側では標高約 4.5 m である。II 層形成時には現在の地形と同様に北側が高く、南側が低い状況であったと捉えられる。

III 層 III 層は、近世から近代にかけて堆積・造成された土層である。単一土層もしくは 2 層に細分することができる部分が主体だが、調査溝 6 などのように、3・4 層に細分できる部分もある。褐色系の粘質土や粘土が主体だが、黄色砂礫や灰色系粘土もみられる。III 層中における近世の遺物出土量が多いことから、III 層のいずれかの段階で近世の生活面が存在する可能性がある。

IV 層 IV 層は、古代から近世にかけて形成された土層である。褐色系の粘土や粘質土を主体とするが、IV 層の中・上位において灰黄色粗砂（調査溝 26：IV-7 層）のように整地層と捉えられる土層が認識できる地点もあった。地点によっては IV 層中において生活面を認識できる可能性があり、注意を払う必要がある。

V 層 V 層は、基盤層である。上位基盤層は黄褐色粘土、下位基盤層は黄色礫土である。下位基盤層のうち、埋没河川の底部では、灰色に変色している。下位基盤層は、標高 3.8 m 以下の部分でみられる。基盤層の上面では、古代から近世にかけての時期と捉えられる遺構が検出できる。

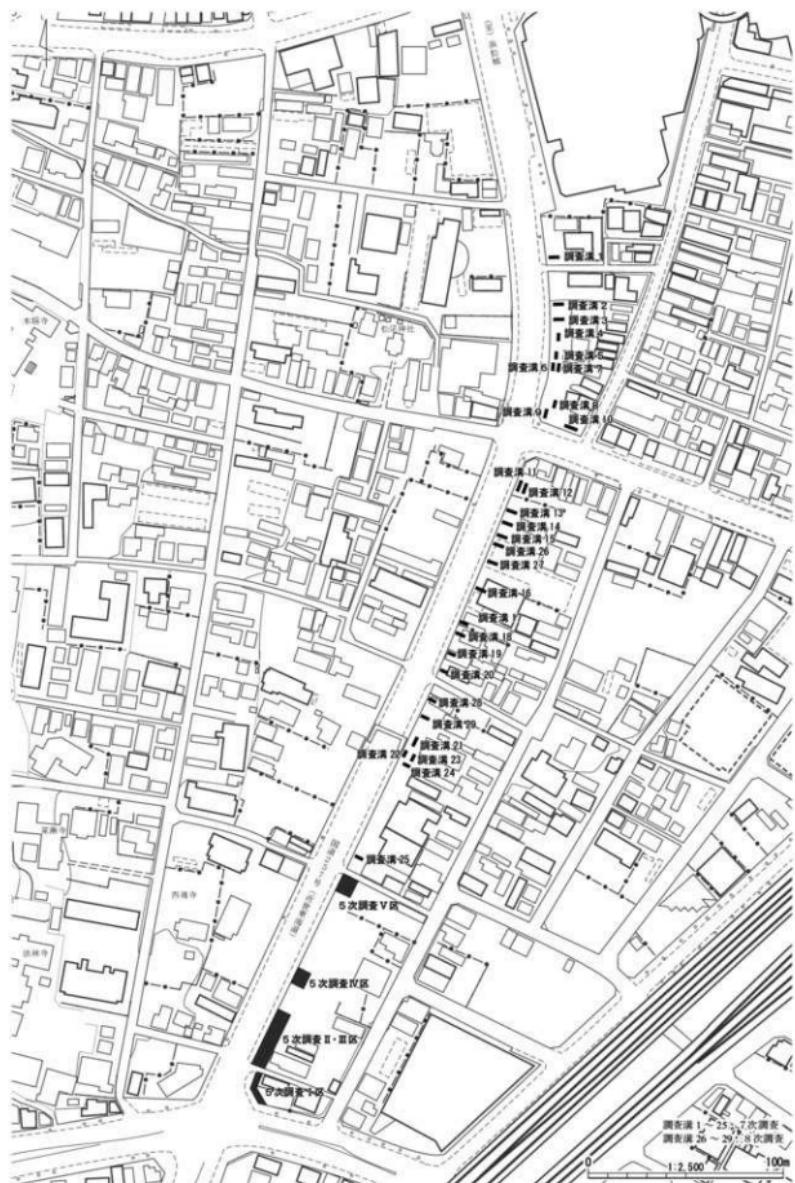


Fig.7 確認調査の調査区配置

(3) 検出遺構と出土遺物

調査溝毎に調査成果を記載する。ただし、調査溝が近接し、調査成果が類似するものについてはまとめて記載した。検出した遺構は、井戸や小穴、土坑、溝と捉えられるものである。遺構の調査は原則、平面検出に留めた。出土遺物は、城下町に関わる中世後半から近世にかけての時期の土師質土器や陶磁器が主体であるが、古代や中世前半の須恵器や土師器、山茶碗も一定量認められた。出土遺物の取り上げは出土層位を把握しながら行った。Ⅲ層やⅣ層、擾乱土中から出土したものが多い。図化は、出土層位が明らかなものを中心に行なったが、調査地点の特徴を示す遺物については擾乱中や表面採集の資料も図化した。なお、掲載遺物が出土した調査溝や層位、時期、寸法、産地等の詳細は、観察表に示した (Tab.1・2)。7次調査の出土遺物のうち陶磁器類について、藤澤良祐氏 (愛知学院大学) や堀内秀樹氏 (東京大学埋蔵文化財調査室) にご教示をいただいた。

調査溝1 調査溝1は、対象地の最も北側に設定した調査溝である。碎石の下層は、擾乱が現地表下2m以上において、基盤層が確認できなかった。また、出土遺物はみられなかった。

調査溝2・3 調査溝2・3において、遺構は確認できなかった。調査溝2・3とともにI層直下においてⅢ層が確認でき、少なくともII層以上の土層は現代に削平されたと捉えられる。出土遺物は、調査溝2のⅢ層から、17世紀前半のものと捉えられる陶器が出土した。また、調査溝3のⅢ層中から17世紀前半の天目茶碗(4)、IV層中から16世紀後葉の志戸呂産の擂鉢(5)が出土した。

調査溝4 調査溝4では、I層の直下でⅢ層を確認でき、調査溝2・3と同様に、少なくともII層以上の土層が現代に削平されたと捉えられる。基盤層上面では、小穴もしくは土坑とみられる2つの遺構を検出した。基盤層の上面には、近世の陶器や内耳鍋を含むIV層の堆積が確認できた。基盤層上面で検出した遺構は近世以前のものと捉えられる。なお、出土遺物はいずれも小片であったため図化できなかった。

調査溝5・6 調査溝5・6は対象地において最も北側でII層を検出した調査溝である。I層からV層まで安定した堆積が確認できたが、遺構は認められなかった。いっぽうで、遺物が比較的豊富に出土した。調査溝5のⅢ層中からは、ロクロかわらけ(6)や、18世紀後半から19世紀前半の陶器(7・8)、17世紀前半の擂鉢(9)が出土した。調査溝6のIV層中から山茶碗や中世陶器の片口鉢、16世紀前半の皿類が出土した。また、Ⅲ層中からは、18世紀後半から19世紀前半の陶器や肥前磁器が出土した。

調査溝7 調査溝7は、Ⅲ層上面まで擾乱がみられた。また、遺構は確認できず、遺物も出土しなかった。

調査溝8～10 調査溝8から調査溝10では、II層より下層の土層堆積状況が周辺の調査溝の土層堆積状況と大きく異なっていた。灰黄色砂(d層)や灰色砂と灰色粘土の互層(f層)が基盤層直上にみられることや、基盤層の検出標高が周辺の調査溝に比べ低いことから埋没河川の可能性が高い。近世の浜松城下を記録した絵図を参照すると松尾神社の南側から東西に河川が描かれており、調査溝8～10で検出した埋没河川が絵図に記された河川にあたると捉えられる。川底部の堆積と捉えられる調査溝9のd層中からは、8世紀の土師器(19)や須恵器(20)等が出土した。いっぽう、かつての河川の埋め立てに用いられた土砂と捉えられるb層やII層からは18世紀後半から19世紀の遺物が数多く出土した。近代の造成に伴い、出土地点に混入したと捉えられる。近代に、浜松市街地に展開した堀や河川の埋め立てが進められて市街地が整備されたことを示す事例として注目できる。

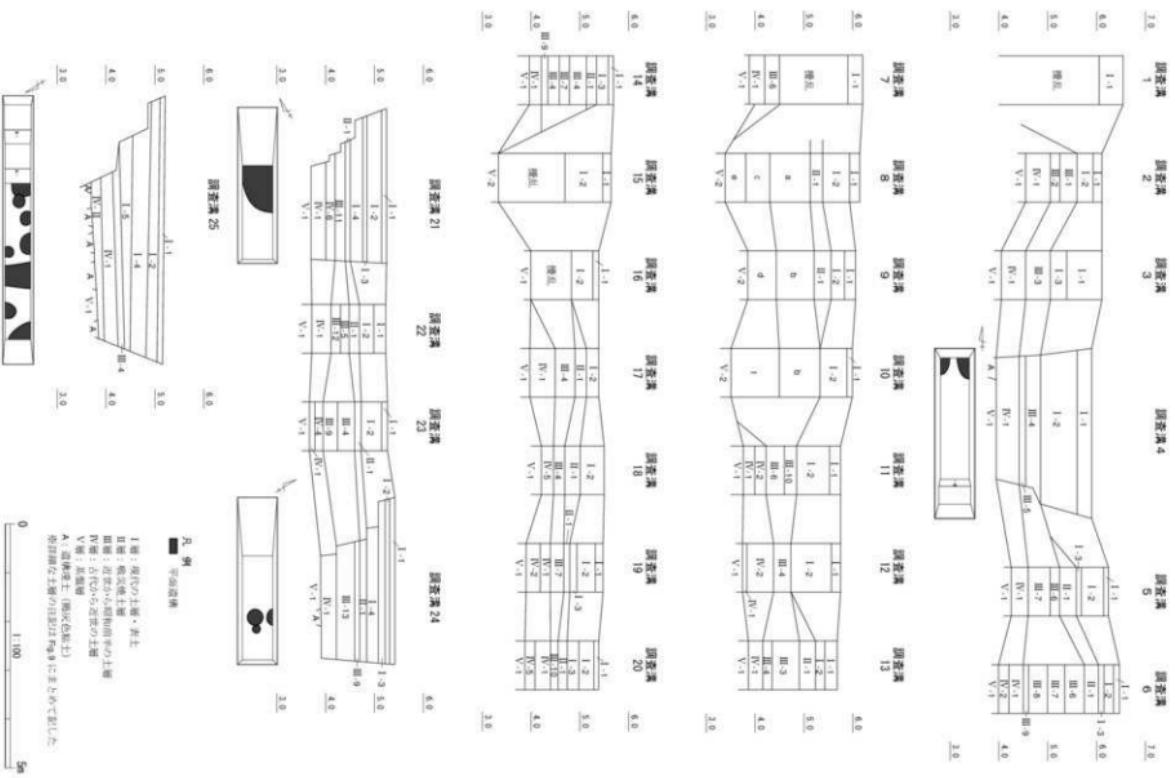


Fig. 8 7 次調査詳細

調査溝 11～14 調査溝 11～14 では遺構を検出できなかったが、いずれの調査溝のⅢ・Ⅳ層中からも近世前半を中心とした時期の遺物が出土した。調査溝 11・12 では掘削時に土層の色調の変化が認識しがたく、Ⅲ・Ⅳ層から出土した遺物をまとめて取り上げた。調査溝 14 のⅢ層中からは、陶器類が出土した。調査溝 11～14 において出土した遺物はいずれも 16 世紀後葉から 18 世紀を中心とした時期の遺物である。

調査溝 15・16 調査溝 15・16 では、基盤層の直上まで擾乱が及んでいる。調査溝 15 の擾乱土中からは、16 世紀後葉から 17 世紀前葉の景德鎮産の皿・碗や、17 世紀後半の瀬戸美濃産の水盤等が出土した。擾乱土中ではあるが貿易陶磁器や水盤といった他の調査地点では稀な遺物がまとまって出土した点が特筆できる。基盤層の検出遺構が周辺の調査溝に比べて低く、遺構が検出できなかつたことから、後世の擾乱により遺構が消滅した可能性がある。

調査溝 17 調査溝 17 では、遺構は確認できなかった。Ⅲ・Ⅳ層中からロクロかわらけ（50）や内耳鍋（51）、砥石（53）が出土した。地表面では山茶碗（49）や馬の目皿（52）した。

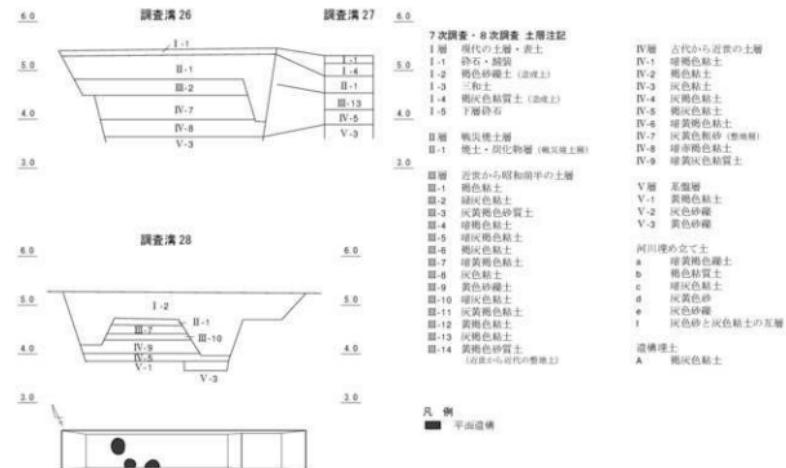


Fig.9 8次調査詳細

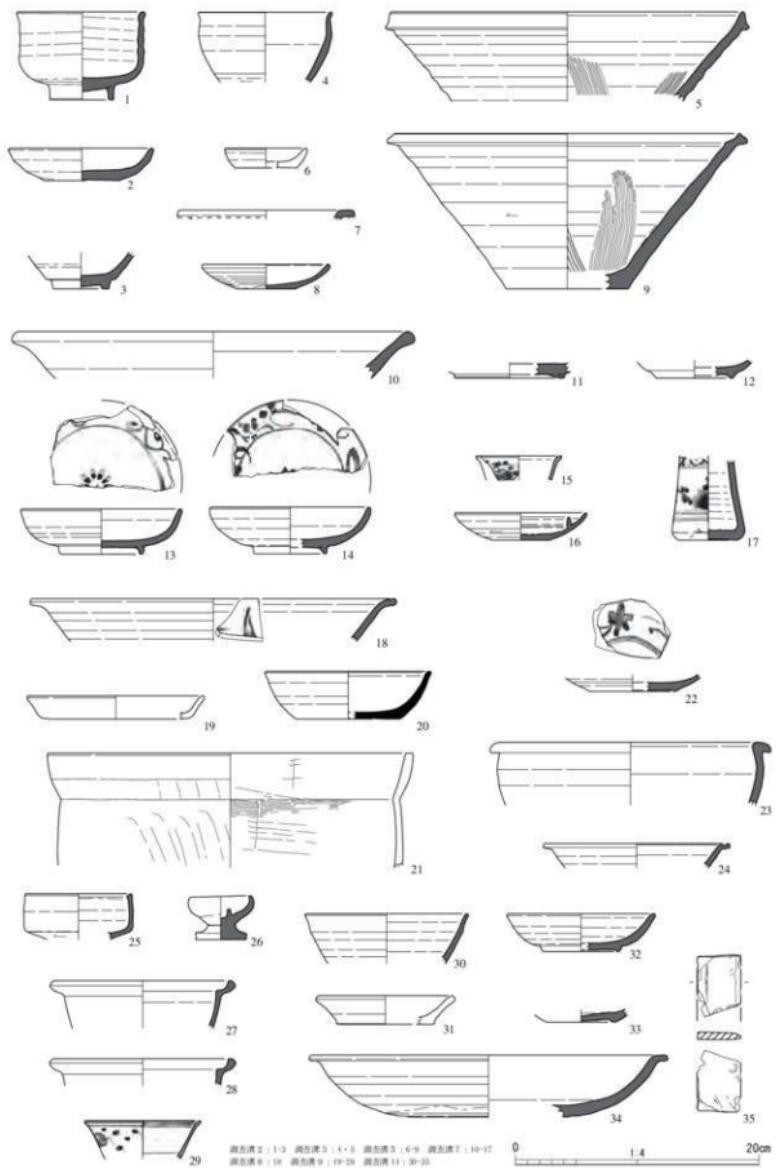


Fig.10 7次調査出土遺物（1）

調査溝 18～20 調査溝 18～20 では、遺構を検出できなかった。出土遺物は、調査溝 19 で内
禿皿 (54)、調査溝 20 で美濃産の灯明油皿 (55) が出土した。

調査溝 21～24 調査溝 20～23 では、遺構や遺物が確認できた。調査溝 21 では基盤層に直径
2 m ほどに復元できる大型遺構（井戸か）を検出した。調査溝 24 では小穴が 2 基確認できた。こ
れらの遺構は基盤層直上での検出であり、近世以前のもと捉えられる。調査溝 21 を中心として、
天目茶碗をはじめとした戦国時代から近世にかけての時期のものと捉えられる陶器やかわらけが豊
富に出土した。

調査溝 25 調査溝 25 は、5 次調査区の北端と道路を挟んで隣接する。基盤層上面において小穴
や土坑、溝を検出した。また、近世の陶磁器が III・IV 層中から出土した。

調査溝 26 調査溝 26 では、遺構は検出できなかったが、16 世紀後半以降の遺物を豊富に含む



Fig.11 7次調査出土遺物 (2)

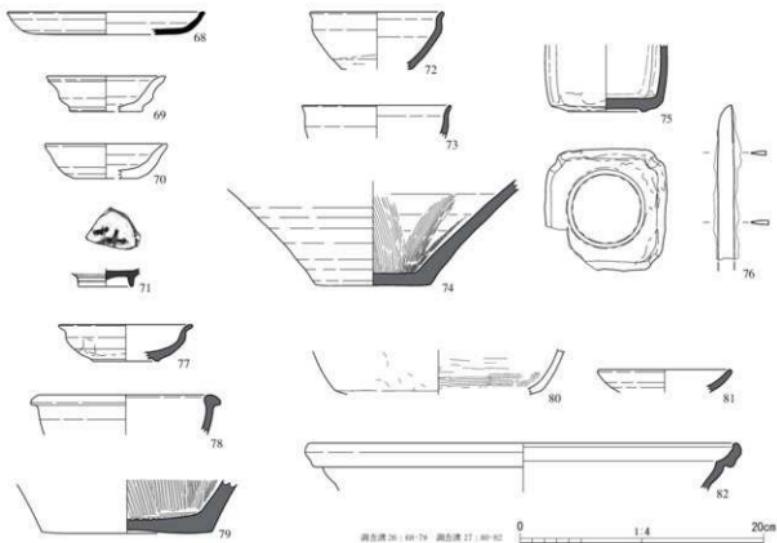


Fig.12 8次調査出土遺物

III層の直下で灰黄色砂粗砂(IV-7層)を検出した。灰黄色粗砂の上面は硬化しており、近世の生活面である可能性が高い。また、IV-7層の下層には古代の須恵器を含む有機質の暗赤褐色粘土がみられ、さらに下層で基盤層(黄褐色砂礫)を検出した。以上のことからIV-7層は、土砂の搬入を伴う整地が行われたことを示す土層と捉えられる。整地が行われた時期は、III・IV層の出土遺物から、16世紀後半以降と捉えられる。

調査溝27 調査溝27では、遺構は検出できなかったが、III・IV層から土師質土器の鍋(80)や初山産の皿(81)、瀬戸・美濃産の播鉢(82)が出土した。

調査溝28・29 調査溝28で3基、調査溝29で6基の小穴を検出した。いずれの小穴も、基盤層(黄褐色粘土)の上面で検出し、埋土は褐灰色粘土であった。このうち1基の小穴を調査した。この小穴からは、上面が平坦な長軸25cm程度の珪質石が据え置かれた状態で出土した。礫石の可能性がある。検出した珪質岩は、出土状況を記録したのち、出土時の状態を保ったまま埋め戻した。出土遺物は調査溝28のIV-5層中から内耳鍋の小片が出土したのみであった。小片のため図化できなかったが、中世の遺物と捉えられる。

(4) 小結

対象地には、古代・中世の遺跡と近世を中心とした城下町にかかる遺構が残存している部分があることが明らかになった。城下町の形成時期は出土遺物から16世紀代に遡る可能性が追認できた。また、調査溝26のように近世を中心とした時期に造成を伴う大規模な生活面の更新が行われた可能性がうかがえる調査地点も見られた。浜松城下町の整備から現在の浜松市の中心市街地の形成にいたるまでの変遷過程を示す情報が埋もれないと捉えられる。

Tab. I 確認調査出土遺物観察表（1）

Fig.	番号	調査区	層位等	種別	細別	産地等	保存	瓦輪・合成	口径・幅 (cm)	器高・ 長さ (cm)	底径・ 厚さ (cm)	断面色調	備考
15	1	2	Ⅲ層	陶器	腰折柄	瀬戸美濃	90	反	10.2	7.2	5.2	灰白	豊窯1
15	2	2	Ⅲ層	陶器	志野丸	瀬戸美濃	60	11.6	2.6	6.1	にふい黄	豊窯1	
15	3	2	Ⅲ層	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	30	反		4.6	淡黄	豊窯2	
15	4	3	Ⅲ層	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	10	反・合	10.7		灰白	豊窯2	
15	5	3	IV層	陶器	縦縫	志戸呂	10	反	28.6		灰	大窯4	
15	6	5	Ⅲ層	土師質土器	かわらけ		50	反	6.6	1.6	5.1	浅黄褐	ロクロ成形
15	7	5	Ⅲ層	陶器	植木鉢	瀬戸	10	反	14.5		灰白	豊窯8	
15	8	5	Ⅲ層	陶器	灯明油壺	瀬戸美濃	60	反	10.2	20.0	4.8	浅黄褐	豊窯9・10
15	9	5	Ⅲ層	陶器	植林	瀬戸	20	反	28.2	12.7	10.0	灰白	豊窯2
15	10	6	IV層	山茶碗	片口鉢	尾張	10	反	32.0		灰	尾張6	
15	11	6	IV層	山茶碗	右台筒	瀬戸御美	10	反			8.6	灰	
15	12	6	IV層	陶器	豆類	瀬戸美濃	10	反			6.1	にふい黄褐	大窯1・2 丸皿・繩反皿
15	13	6	Ⅲ層	陶器	染付皿	瀬戸美濃	30	反	13.0	3.7	6.6	灰白	豊窯9
15	14	6	Ⅲ層	陶器	染付皿	瀬戸美濃	40	反	12.9	3.8	5.8	灰白	豊窯9
15	15	6	Ⅲ層	陶器	小环	肥前	10	反	6.8		灰白	18世紀後半	
15	16	6	Ⅲ層	陶器	灯明油壺	瀬戸美濃	30	反	10.6	2.2	4.8	灰	豊窯10
15	17	6	Ⅲ層	陶器	灰落口し	瀬戸	40				4.8	灰白	豊窯9
15	18	8	a-e層	陶器	鉛釉皿	美濃	10	反	30.0			灰黄	豊窯5・6
15	19	9	d層	土師器	直		10	反	14.6	1.9	11.0	にぬい垂 内・外面赤彩	
15	20	9	d層	煮器類	無台筒	瀬戸	50	反	13.4	3.9	8.0	灰	8世紀後葉
15	21	9	d層	土師質土器	内耳通		10	反	30.0			灰白	
15	22	9	b層	陶器	鉛釉皿	瀬戸美濃	10	反				浅黄褐	豊窯1
15	23	9	b層	陶器	縫跡	瀬戸	10	反	22.8			灰白	豊窯8
15	24	9	II層	陶器	折縫皿	瀬戸美濃	10	反	15.0			灰白	大窯4・5半
15	25	9	II層	陶器	筒形香がい	美濃	20	反	8.6			灰白	豊窯7
15	26	9	II層	陶器	ひょうそく	瀬戸	90	5.0	3.6	4.2		浅黄褐	豊窯9
15	27	9	II層	陶器	誠	伊賀/信楽	10	反	14.0			灰白	19世紀
15	28	9	II層	陶器	誠	伊賀/信楽	10	反	14.0			灰白	19世紀
15	29	9	II層	磁器	繩反碗	瀬戸	10	反	9.4			灰白	豊窯10
15	30	11	IV層	陶器	丸網	志戸呂	10	反	13.0			黒褐	17世紀
15	31	11	III・IV層	土師質土器	かわらけ		20	瓦	10.8	2.3	8.0	浅黄褐	
15	32	11	III・IV層	陶器	志野丸皿	瀬戸	40	反	12.2	3.1	6.2	灰白	豊窯3
15	33	11	III・IV層	陶器	内丸皿	瀬戸	20	反			5.6	灰白	大窯3・4半
15	34	11	III・IV層	陶器	大皿	志戸呂	20	反	29.4			にぬい赤脚	
15	35	11	III・IV層	石製品	砥石		50		3.6		0.6	灰黄	17g
16	36	12	III・IV層	土師質土器	かわらけ		20	反	11.4	2.4	7.0	灰白	手づくね成形
16	37	12	III・IV層	土師質土器	かわらけ		90		6.8	1.6	4.4	浅黄褐	ロクロ成形
16	38	13	II層	瓦質土器	大鉢		20	反	14.4	6.1	15.0	オリーブ黒	
16	39	13	III・4層	陶器	縫跡	瀬戸	10	反			14.0	浅黄褐	豊窯3・7
16	40	14	III層	土師質土器	かわらけ		20	反	11.0	2.8	7.6	灰白	ロクロ成形
16	41	14	III層	陶器	内丸皿	瀬戸	30	反	10.0	1.9	6.0	淡黄	大窯3・4半
16	42	14	III層	陶器	繩反皿	瀬戸	20	反	12.6			灰白	豊窯3・4
16	43	14	III層	陶器	天目茶碗	瀬戸	20	反	11.4			淡黄	豊窯3・4
16	44	15	漫乱	磁器	直	景徳鎮	20	反			5.8	灰白	16世紀後葉
16	45	15	漫乱	磁器	直	景德鎮	20				4.1	灰白	17世紀前葉
16	46	15	漫乱	陶器	志野丸皿	瀬戸	30	反	10.6	1.8	6.8	淡黄	豊窯3・4
16	47	15	漫乱	磁器	直	肥前	10	反	12.0		6.0	灰白	18世紀末～19世紀前葉
16	48	15	漫乱	陶器	水盤	瀬戸美濃	20	反			24.4	灰白	豊窯3・4
16	49	17	表面採集	山茶碗	右台筒	瀬戸御美	20	反			6.0	淡黄	
16	50	17	III・IV層	土師質土器	かわらけ		20	反	11.6	2.7	6.8	にぬい黄褐	ロクロ成形

Tab.2 確認調査出土遺物観察表(2)

Fig.	番号	調査層	層位等	種別	細別	埋地等	残存	灰化・合成	口径・幅(cm)	器高・長さ(cm)	底径・厚さ(cm)	断面色調	備考
16	51	17	Ⅲ・Ⅳ層	土師質土器	内耳罐		20					灰黄	
16	52	17	表面探集	陶器	馬口皿	瀬戸美濃	10	反	23.4			にぶい黄緑	豊安5・11
16	53	17	Ⅲ・Ⅳ層	石製品	砥石		90		4.2	7.9	1.3	灰黄	75kg
16	54	19	Ⅲ・Ⅳ層	陶器	内壳皿	瀬戸美濃	20	反		5.6		淡黄	大室3後半
16	55	20	Ⅲ・Ⅳ層	陶器	灯明皿	美濃	20	反	10.2	2.1	4.8	灰黄	豊安9・10
16	56	21	Ⅳ層	土師質土器	かわらけ		20	反	10.8	2.5	7.8	淡黄	ロクロ成形
16	57	21	Ⅳ層	土師質土器	かわらけ		10	反	10.6	3.1	6.8	にぶい緑	ロクロ成形
16	58	21	Ⅳ層	陶器	天目茶碗	瀬戸	30	反	10.4			灰黄	豊安3
16	59	21	Ⅳ層	陶器	丸皿/内壳皿	初山	10	反	9.2			灰	大室3後半
16	60	21	Ⅲ・Ⅳ層	陶器	天目茶碗	志戸呂	30	反	9.8			青褐	16世紀末～17世紀前葉
16	61	21	Ⅲ・Ⅳ層	陶器	天目茶碗	初山	30	反	9.8			灰	大室3後半
16	62	22	Ⅳ層	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	10	反	11.6			淡黄	豊安2
16	63	25	Ⅲ・Ⅳ層	磁器	瀬戸反碗	瀬戸	30	反	9.8			灰白	豊安11
16	64	25	Ⅲ・Ⅳ層	磁器	碗	肥前	30	反		4.0		灰白	
16	65	25	Ⅲ・Ⅳ層	磁器	皿	瀬戸	20	反		4.8		白	近代か
16	66	25	Ⅲ・Ⅳ層	磁器	碗	肥前	20	反		9.4		灰白	19世紀
16	67	25	Ⅲ・Ⅳ層	陶器	手水鉢	瀬戸	20	反		15.2		灰黄	豊安10・11
17	68	26	Ⅳ層	須恵器	皿	瀬戸	10	反	16.0	1.9	11.9	黄灰	8世紀
17	69	26	Ⅳ層	土師質土器	かわらけ		20	反	9.4	2.9	6.0	浅黄相	ロクロ成形
17	70	26	Ⅳ層	土師質土器	かわらけ		30	反	9.8	2.8	5.2	浅黄相	ロクロ成形
17	71	26	Ⅲ層	磁器	碗	長崎	10	反		4.6		白	16世紀後葉
17	72	26	Ⅲ層	陶器	天目茶碗	初山	30	反	10.6			褐灰	大室3後半
17	73	26	Ⅲ層	陶器	天目茶碗	瀬戸	10	反	12.0			灰白	豊安1・2
17	74	26	Ⅲ層	陶器	抹棒	志戸呂	10	反		9.6		緑	16世紀後葉～17世紀前葉
17	75	26	Ⅲ層	陶器	向付	瀬戸	60	合	10.0	6.3		灰白	
17	76	26	Ⅲ層	鉄製品	刀子		70		1.2	12.6	0.3		
17	77	26	Ⅱ層	陶器	瀬戸反皿	初山	20	反	10.6	3.0	5.5	褐灰	大室3後半～大室4
17	78	26	Ⅱ層	陶器	抹棒	瀬戸美濃	20	反	13.8			灰白	豊安8・9
17	79	26	Ⅱ層	陶器	抹棒	不明	10	反		14.0		灰白	
17	80	27	Ⅲ・Ⅳ層	土師質土器	内耳罐		10	反				浅黄相	
17	81	27	Ⅲ・Ⅳ層	陶器	皿類	初山	10	反	10.6			褐灰	大室3後半・丸皿・内壳皿
17	82	27	Ⅲ・Ⅳ層	陶器	抹棒	瀬戸美濃	10	反	35.0			にぶい黄緑	豊安5・6

凡例

「現存」：全体における残存している割合を%（10%きざみ）で示す。

「反」：反転して固化したもの

「合」：合成して固化したもの

「色調」：『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠している

「備考」：瀬戸美濃陶磁器の福井は、

福井 县社2007「総論」「歴史紹介編 豊業2 中・近世瀬戸系」に従った
なお、段階等の名稱は以下のよう略して表記した

大室第2段階 → 大室□

豊安者□小期 → 豊安□

2 基本層序と遺構検出面

(1) 基本層序

調査地は市街化が進んでおり旧地形をほとんど留めていない。調査地の西側に近世東海道を踏襲した国道257号が走っており、住宅が道路に面して密集する。近代以降に市街化が進み、造成が繰り返されてきた。このため近世以前の堆積については残存状況が悪く、これまでの調査でも層序の年代については判然としなかった。このようなことから層序の年代把握が今回の調査の主眼の一つとして挙げられ、ひいては城下町形成期及び近世城下町の層位的な把握についても議論できる成果を提示できるよう努めた。

基本層序としてはそれぞれの調査区で細部においては異なるものの、基本的な堆積はほぼ共通している。以下にFig.13の模式図を示しながら基本層序を説明することとする。

まず表土としては碎石層が布設されており、その直下に近現代の盛土・造成土（I層）が認められる。この層には瓦やレンガ、コンクリートなど既設建物の建築部材として使用されたものや、使用を停止した水道管などもこの層に含まれる。これらの盛土層を掘り込む擾乱が各所で認められ、深いものは基盤層よりも深く掘り込まれたものもあった。これらの擾乱には瓦やレンガ、コンクリートなどのほか、焼土や炭化物を多量に含むものもあり、後述する昭和の浜松空襲による焼土層に起因するものと考えられる。

盛土以下の堆積は細部においては異なるものの、厚さ5～10cm程度の層が何層かにわたって認められた。この層にはこぶし大の礫を含む層や、焼土や炭化物を多く含む層も認められた。また近代の陶磁器類や瓦なども多量に含まれていた。この焼土層は昭和19・20年に米軍により行われた浜松空襲によるものとみられ、各調査区で認められた。I層から以下に述べるIII層までの層をII層とする。Fig.13ではI・II層を一括して図示している。

この層の下には、基盤層に含まれる礫を多量に含む層（黄褐色礫混細粒砂層）を使用した整地土（III層）が認められた。この層は各調査区で確認できるものの、全域にわたって存在する調査区（II b区・II c区・II d区・II e区）もあるが、部分的に認められる調査区（I区・II a区・III区）もあり、整地が全域ではなく、細かな区割りごとにされた可能性を示唆するものである。なお、II c区南部ではこの整地土に被熱層があり、それぞれに高低差が認められることから、整地された時期が一時期ではない可能性も考えられる。このIII層の上面にはII層が直接認められ、本来は生活面が存在していたものとみられるが、削平を受けているため認められなかった。

III層は先述のような特徴を持つ層であるが、層の厚さは10～20cmで、この下には同じような礫を含む層や、基盤層である黄褐色土を含む灰色シルト層などが認められた。これらの層を薄く重ねたところも認められたが、これは人為的な堆積と理解でき、一連の整地土の可能性が高く、III層の

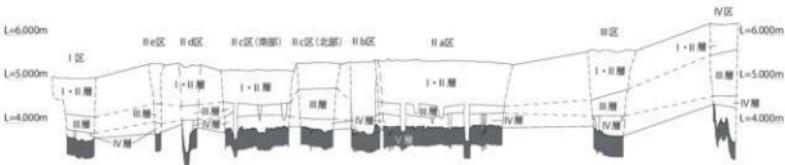


Fig.13 調査区堆積状況模式図

一部であると考えられる。以上のことから、III層の性格としては細部においては異なるものの、整地土である可能性が高いと考えられる。

III層は、遺構・遺物が全体的に希薄であることにより重機で掘削を行ったため、層毎の掘り下げを行っておらず、出土遺物を詳細に確認することができなかつたが、近世の陶磁器類を若干含むため、近世以降の年代を想定しておきたい。II層とIII層を明確に区別するには困難で、ここでは先述の黄褐色疊混細粒砂層を用いた層の有無を指標として区別しているが、II層とIII層の識別と詳細な年代については今後の調査において検証が必要と考えられる。

IV層はやや粘性を帯びた褐色からくびい黄褐色を呈するシルト層で、調査区によって層の厚さは削平により一定ではないが、10～40cmと比較的厚く堆積する。各調査区の壁面から出土した遺物を詳細に検討すると、近世以降の遺物を含まず、13世紀代の山茶碗や湖西・渥美産の陶器など古相を



Fig.14 II a 区地割境の状況



Fig.15 II a 区東壁地割境の状況



Fig.16 II a 区西壁地割境の状況



Fig.17 II a 区西壁地割境の状況

示す遺物も含まれるが、瀬戸美濃産や初山、志戸呂産の陶器類などが主体をなすため、大窯期に形成された自然堆積層であると考えられる。調査において検出できた遺構は、IV層の上面から掘り込まれる遺構群と、IV層の直下すなわち基盤層上で検出できる遺構群に大別できる。前者については城下町形成期あるいは近世城下町にかかる大窯期から登窯期、後者については13世紀代を中心とした鎌倉時代の年代を想定できる。

調査地の現地表面はIV区が6.2mと最も高位置にあり、最南端のI区が5.1mで、比高差が1.1mをはかる。I区とIV区の距離が約300mで、IV区からI区に向けてゆるやかに下降している。

調査地の基盤層（V層）は基本的に疊を含む黄褐色～明黄褐色を呈する粘土質シルト層で、I区からII区においては共通する基盤層が認められた。今回調査した範囲のうち最北部に位置するIV区は、河川堆積に起因するとみられる同色の極細粒砂を基盤とする。III区においても基盤層にやや疊

を多く含むことが明らかで、北へいくにつれ礫の含有量が増加するようである。基盤層の標高はⅠ区で3.65 m、そこからⅢ区までは3.7～3.9 mとほぼ平坦である。これに対してⅣ区では4.25 mとなり、北から南へ下降するようで、かつて成子坂と呼ばれた地形を反映しているものと考えられる。調査できた遺構の中には基盤層上面からの深さが2 m以上に及ぶ井戸もみられたが、基本的に湧水は認められなかった。調査中も降雨による滯水は認められたが、水はけがよく比較的安定した地盤であると考えられる。

堆積状況を観察する中で、興味深い様相を示す状況が認められた。Fig.14～17に示すように、Ⅱa区の中央部において、ある掘り込みを境としてこれの南北で堆積が異なることが判明した。この掘り込みの南側には基盤層と類似する黄褐色礫混細粒砂層を用いた整地土が認められたが、北側には存在しない。この掘り込みを境として堆積状況が変化することから、町割りを行うにあたり地割境界を示すものと考えられ興味深い。この地割境界はⅡ層中の堆積であり、近代のものと考えられるが、これが近世にまで遡るかどうかは不明であるものの、地割の踏襲がなされた事例として提示しておく。なお、この地割境界の位置には現在、土地の境界を示すフェンスが設置されている。

同様の地割の踏襲は後述するⅡc区南部でも認められた。本章で詳しく述べるが、Ⅱc区南部では同じく地割境界を示す堆積と、基盤層と類似する黄褐色礫混細粒砂層を用いた整地土がやはり認められ、Ⅱa区と同様のあり方が認められた。さらにこの位置の直下の基盤層上で鎌倉時代まで遡る溝状の遺構が東西方向に存在しており、この地域の土地利用の中で、早い段階で地割境界が意識されていたことを示すものと考えられる。

(2) 遺構検出面

前項でも説明したとおり、層位的には遺構面としては複数認められるが、各層特にⅢ層における遺構・遺物が全体的に希薄であるため、今回の調査においては基盤層上で遺構検出作業を行った。このため、異なる層から掘り込まれた遺構が混在することになるが、調査の中で検出した遺構の掘り込み面が鍵層であるⅣ層の上面からか、あるいはその直下からかということが、調査時における課題であった。

調査の中で井戸や土坑など遺物が多く出土した遺構もあるが、検出できた遺構のうち多くを占めるのが小穴であり、小穴からは年代の判明する遺物が出土したものはほとんどなかった。このため検出できた小穴については、出土遺物から年代を明らかにすることは困難であった。一方、調査区壁面でⅣ層を掘り込む遺構が存在し、その遺構埋土の特徴を認識した上で、ほかの遺構との比較し、Ⅳ層上面から掘り込まれる遺構か、あるいはⅣ層下面から掘り込まれる遺構かの識別ができるよう努めたが、必ずしも全ての遺構で達成できたわけではない。今後周辺を調査する際は、Ⅳ層上面が遺構検出面の一つとなりうる可能性が考えられ、検証する必要がある。

3 I 区の調査

(1) 概 要

今回の調査範囲の最南端で、5次調査V区の北側に位置する。調査当初、調査区の中央部やや南に下水道管が横断しており、それを挟んで調査区が分断されると考えていた。ところが表土掘削を進める中で、確認していた下水道管より南側に別の水道管が横断することが発覚した。このため下水道管よりも南側を調査することが困難となり、この南側の調査を断念することとなった。この結果、最終的に調査区は東西約7.4m、南北約6.0m、面積45.1m²を測る。

他の調査区と同じようにIII層まで重機を用いて掘削し、その後人力で調査を行い、基盤層上で遺構検出を行った。検出した遺構は、小穴が最も多く39基、土坑3基、溝2条、井戸2基、柱列1条、その他3基となった。

(2) 遺 構

i) 溝

SD01 (Fig. 20) 調査区中央部から東に検出した東西方向の溝で、西側は徐々に浅くなり消滅する。調査区内東西に4.2m検出でき、幅が西端で0.25m、溝の東側は後述するSE01に切られるが0.87mをはかる。溝の深さは0.06mを測り、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は均一な堆積で、基盤層の黄褐色粘土質シルト層を若干含む。この遺構の北2mの位置にSD02が平行して認められるが、遺構の幅や断面形など様相は異なる。出土遺物は少ないものの、ともに湖西・渥美産とみられる甕(3)が出土している。登窯期に属するSE01に切られることから少なくとも江戸時代以前の遺構であり、大窯3段階の井戸SE02と近接するが、立地的にみて同時期に存在する可能性が高いことからすると、

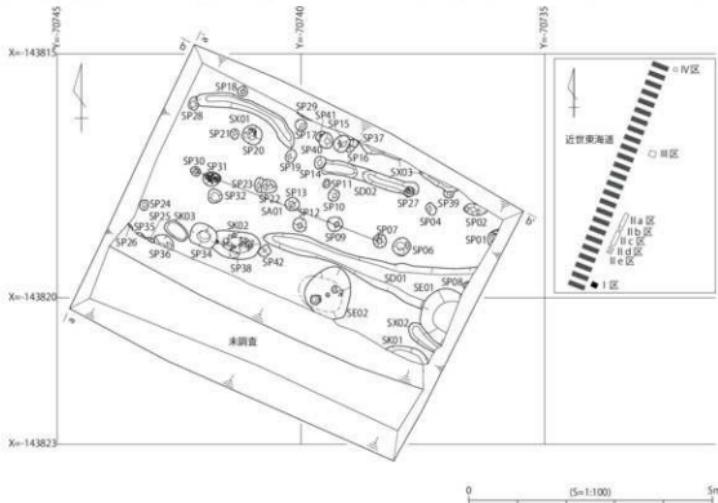
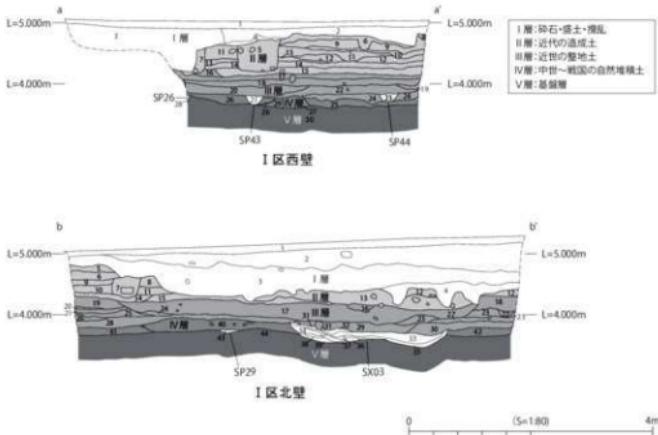


Fig.18 I 区 遺構全体図



- 1~4 砂石・堆積・塊状(1層)
 5 黄褐色細粒砂(ø 10cm以下の礫を多量含む。Ⅳ層)
 6 从黄色細粒砂(ø 10cm以下の礫を多量含む。Ⅲ層)
 7 黄褐色細粒砂(ø 5cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 8 从黄色細粒土(黄褐色細粒土質シルトを含む。Ⅲ層)
 9 从黄色細粒土質シルト(風化物を多量含む。Ⅱ層)
 10 にぶい黃褐色細粒土質シルト(黄褐色細粒土の混合ø 2cm以下の礫を少量含む。Ⅱ層)
 11 黄褐色細粒シルト(黄褐色細粒土質シルトを含む。Ⅱ層)
 12 にぶい黄褐色細粒土質シルトと黄褐色細粒土質シルトの混合(±Ⅲ層)
 13 棕褐色土質シルト(風化物・鉱物を少量含む。Ⅱ層)
 14 从黄色細粒土質シルト(黄褐色細粒土質シルトを含む。Ⅲ層)
 15 黄褐色細粒土質シルト(ø 10cm以下の礫を多量含む。Ⅲ層)
 16 黄褐色細粒土質シルト(ø 2cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 17 从黄色細粒土質シルト(黃褐色細粒土質シルトを含む。Ⅲ層)
 18 从黄色細粒土質シルト(ø 10cm以下の礫を多量含む。Ⅲ層)
 19 从黄色細粒土質シルト(ø 2cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 20 にぶい黃褐色細粒土質シルト(Ⅲ層)
 21 黄褐色細粒土質シルト(ø 10cm以下の礫を多量含む。SP43)
 22 棕褐色細粒土質シルト(ø 5cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 23 にぶい黃褐色細粒土質シルト(SP44)
 24 にぶい黃褐色細粒土質シルト(黄褐色細粒土を含む。Ⅲ層)
 25 从黄色細粒土質シルト(黃褐色細粒土質シルトを含む。ø 10cm以下の礫を多量含む。Ⅲ層)
 26 从黄色細粒土質シルト(ø 10cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 27 にぶい黃褐色細粒土質シルト(ø 10cm以下の礫を含む。Ⅲ層)
 28 从黄色細粒土質シルト(SP26)
 29 从黄色細粒土質シルト(ø 10cm以下の礫を含む。Ⅲ層)
 30 黄褐色細粒土質シルト(易崩解。Ⅴ層)

- 1~4 砂石・堆積・塊状(1層)
 5 从黄色細粒土質シルト(黃褐色細粒土質シルトを含む。風化物を多量含む。Ⅲ層)
 6 从黄色細粒土質シルト(風化物を多量含む。Ⅲ層)
 7 にぶい黃褐色細粒土質シルト(ø 10cm以下の礫を多量含む。コクシードコロナを含む。Ⅲ層)
 8 にぶい黃褐色細粒土質シルト(ø 2cm以下の礫を少量含む。風化物を少量含む。Ⅲ層)
 9 にぶい黃褐色細粒土質シルト(ø 2cm以下の礫を少量含む。ø 10cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 10 にぶい黃褐色細粒土質シルト(ø 2cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 11 にぶい黃褐色細粒土質シルト(ø 2cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 12 にぶい黃褐色細粒土質シルト(ø 2cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 13 从黄色細粒土質シルト(ø 2cm以下の礫を多量含む。風化物を多量含む。Ⅲ層)
 14 从黄色細粒土質シルト(ø 2cm以下の礫を含む。風化物を多量含む。風化物が弱くなる。Ⅲ層)
 15 にぶい黃褐色細粒土質シルト(ø 2cm以下の礫を少量含む。ø 2cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 16 从黄色細粒土質シルト(ø 2cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 17 にぶい黃褐色細粒土質シルト(ø 2cm以下の礫を含む。ø 5cm以下の礫を少量含む。風化物を多量含む。Ⅲ層)
 18 从黄色細粒土質シルト(ø 2cm以下の礫を多量含む。風化物を多量含む。Ⅲ層)
 19 从黄色細粒土質シルト(ø 2cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 20 从黄色細粒土質シルト(ø 2cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 21 黄褐色細粒土質シルト(ø 10cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 22 从黄色細粒土質シルト(ø 2cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 23 にぶい黃褐色細粒土質シルト(Ⅲ層)
 24 从黄色細粒土質シルト(ø 10cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 25 从黄色細粒土質シルト(ø 10cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 26 にぶい黃褐色細粒土質シルト(Ⅲ層)
 27 黄褐色細粒土質シルト(ø 10cm以下の礫を含む。風化物を少量含む。Ⅲ層)
 28 にぶい黃褐色細粒土質シルト(ø 10cm以下の礫を含む。Ⅲ層)
 29 にぶい黃褐色細粒土質シルト(ø 3cm以下の礫を少量含む。ø 15cm以下の礫を1個含む。風化物を少量含む。Ⅲ層)
 30 黄褐色細粒土質シルト(ø 10cm以下の礫を含む。風化物を少量含む。Ⅲ層)
 31 にぶい黃褐色細粒土質シルト(ø 10cm以下の礫を含む。Ⅲ層)
 32 从黄色細粒土質シルト(SX03)
 33 从黄色細粒土質シルト(ø 10cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 34~36 从黄色細粒土質シルト(SX03)
 37~39 从黄色細粒土質シルト(SX03)
 40 にぶい黃褐色細粒土質シルト(ø 10cm以下の礫を含む。ø 10cm以下の礫を少量含む。風化物を多量含む。Ⅲ層)
 41 从黄色細粒土質シルト(ø 10cm以下の礫を含む。ø 10cm以下の礫を多量含む。風化物を多量含む。Ⅲ層)
 42 にぶい黃褐色細粒土質シルト(ø 10cm以下の礫を含む。風化物を少量含む。Ⅲ層)
 43 にぶい黃褐色細粒土質シルト(ø 10cm以下の礫を含む。Ⅲ層)
 44 黄褐色細粒土質シルト(易崩解。Ⅴ層)

I-X 北壁土層記

Fig.19 I 区 壁面図

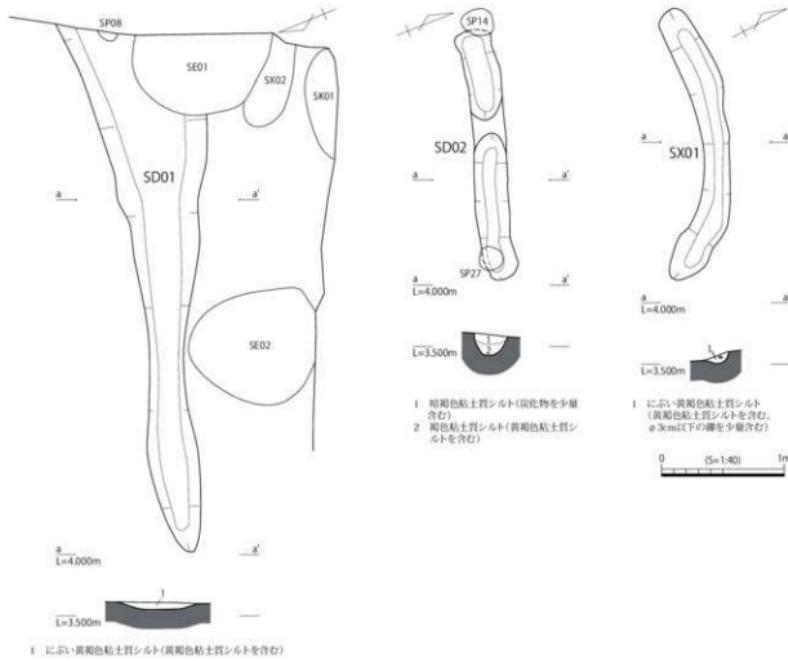


Fig.20 I区 遺構図(1)

13世紀代にまで遡る可能性も考えられよう。

SD02 (Fig. 20) SD01の北2mの位置に平行する溝状の遺構であるが、長さが2.05mと短く遺構の底面は西側が高く、東側が低くなり約15cmの段差をもつ。幅は0.26mで、深さは西側で0.03m、東側で0.18mを測る。遺構の断面形は西側が浅い皿状、東側はU字形を呈し、複数の遺構を同一遺構として調査した可能性も考えられる。一方、遺構の西端と東端に小穴が認められ、溝が切られているがこれらが有機的な関係をもつとすれば、布掘り建物の掘り方である可能性も考えられる。出土遺物はSD01と同様少ないものの、湖西・渥美産とみられる甕(4)が出土している。

ii) 井戸

SE01 (Fig. 21) 調査区東壁際中央部で検出した井戸である。遺構のおよそ半分が調査区外にあり、遺構底面までの調査ができなかった。遺構は平面形が円形あるいは楕円形を呈するものと考えられ、南北1.12m、東西は0.66m以上を測る。SD01とSX02を切る。遺構は素掘りで、検出面から1.5mまで掘り下がったが、壁際ということもあり調査できる範囲も非常に狭いことから、安全を考慮しそれ以下の掘削を断念した。断面図に示すとおり、上層には基盤層に起因する黄褐色シルトブロックを含む灰色シルト層が堆積し、中層以下は灰色粘土～粘土質シルトが堆積する。機能時あるいは使用停止直後の状況は不明ながら、中層の状況からは徐々に埋没していく、最終的には人為的に埋め戻されたものと考えられる。上層から瀬戸美濃産の火鉢(1)や、図示していないが染付など江戸時

代後期にまで降る遺物が出土している。井戸の機能していた時期は不明であるが、埋没は江戸時代後期と考えられる。

SE02 (Fig. 22) 調査区中央部南壁際、SD01の南に位置する井戸である。遺構の平面形は不整円形を呈し、南北 1.30 m、東西 0.94 m を測る。素掘りの井戸で、検出面から 1.65 m まで掘り下がったが、掘り下げるに従い狭くなり、人力で掘削することが困難になった。また重機が進入することもできなかったため、安全を考慮し底面までの掘削は断念した。遺構の断面形はやや内側にすぼまるようになるが、検出面から 0.75 m の位置で、遺構の西側がオーバーハングすることが明らかとなった。井戸掘削時は垂直に掘削されたものと考えられるが、ある段階で基盤層が浸食された結果このような状況になったと推測される。

堆積状況は断面図に示すとおりで、基本的にはレンズ状の堆積が認められ、上層から中層、下層にいくに従い包含する礫が次第に大きくなる。下層に含まれる礫は直径 15 cm 程の大きな礫が多量に認められた。なお、掘削可能な深さまで掘り下げるを行ったが、湧水は認められなかった。

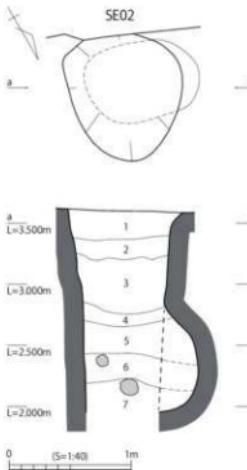


Fig.22 I 区 SE02 遺構図

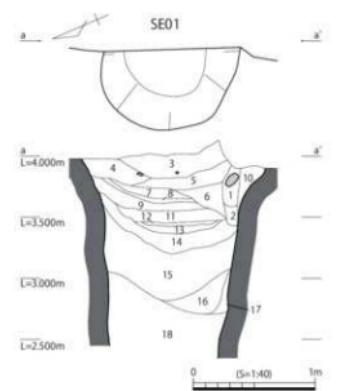
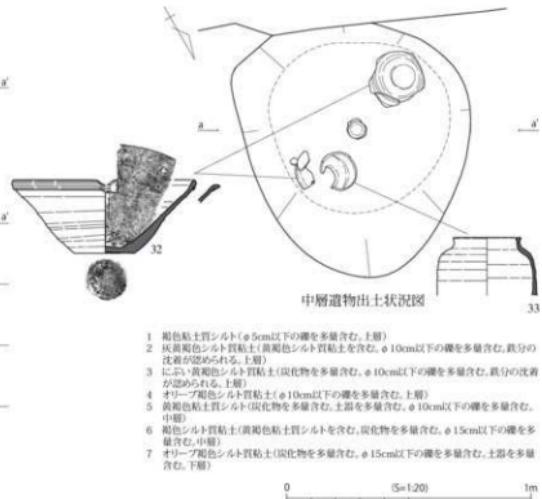


Fig.21 I 区 SE01 遺構図



33

34

25

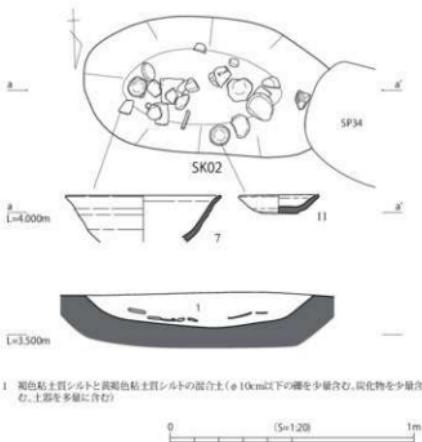


Fig.23 I区 SK02 遺物出土状況図

各層から多くの遺物が出土したが、なかでも検出面から 1.15 m 下げた中層で Fig.22 に示すように瀬戸美濃産や初山産の擂鉢や、初山産の壺などがまとまって出土した。出土遺物は瀬戸美濃産の擂鉢、瀬戸美濃産の天目碗・折縁皿、初山あるいは志戸呂産の皿類・擂鉢・壺など、常滑産の甕、山茶碗の碗、土師器のかわらけや内耳鍋が認められる。上層からは陶器類が目立ち、下層からはかわらけや内耳鍋が多く出土した。常滑産の甕や山茶碗の碗は混入とみられる。出土状況からは破損したものを廃棄したものと考えられ、井戸としての機能停止後は廃棄土坑として利用された可能性が高い。出土遺物は大窓 3 ~ 4 期に属するものが大半を占める。なお遺構の周囲には小穴などは認められず、伴う遺構は不明である。

iii) 土坑

SK02 (Fig. 23) 調査区南部 SD01 の西側で検出した土坑である。遺構の西側は SP34 に切られる。遺構は平面形が楕円形を呈し、東西 1.00 m、南北 0.55 m、遺構の底面は平坦で断面形が浅い皿状を呈し、検出面からの深さ 0.14 m を測る。遺構埋土は、褐色粘土質シルトと基盤層に起因する黄褐色粘土質シルトが斑状に認められ、こぶし大礫とともに破片化した遺物がまとまって出土した。遺物の出土状況からは、破損した遺物を疊とともに廃棄した状況を示している。

出土遺物は戦国時代から江戸時代の遺物を含まず、山茶碗や湖西・渥美産の甕など、13世紀代に属するものが認められたため、遺構の年代は 7 型式の山茶碗から 13 世紀中葉と考えられる。

iv) 小穴

SP06 (Fig. 24) 調査区東部中央で検出した円形の小穴で、SD01 の北 0.2 m に位置する。小穴の中央部に柱痕跡と考えられる層が認められた。断面観察によると底面では小穴中央に位置するが、検出面では遺構の南壁に傾斜する。当初から傾斜をもつものかどうかは不明である。土圧により傾いた可能性も考えられる。柱痕跡は基底部で計測し、直径 8cm を測る。遺構の底面は平坦で、断面形は箱形を呈する。遺構から遺物は出土しなかったため、遺構の詳細な年代は不明である。

SP09 (Fig. 24) 調査区中央に位置する円形の小穴で、SD01 の北 0.3 m に位置する。小穴の中央に直径 8cm の柱痕跡が認められる。遺構の底面は平坦で、断面形は U 字形を呈する。遺構から少量の遺物が出土したが、年代の判明する遺物は認められなかったため、遺構の詳細な年代は不明である。

SP12 (Fig. 24) 調査区中央に位置する円形の小穴で、SD01 の北に近接する。小穴の中央に柱痕跡が認められるが、遺構底面から 20cm ほど置土してから柱を据えている可能性がある。柱痕跡は直径 6cm を測る。遺構の底面は平坦で、断面形は U 字形を呈する。遺構から遺物が出土しなかったため、遺構の詳細な年代は不明である。

SP15 (Fig. 25) 調査区中央北壁際で検出した楕円形小穴で、SD02 の北 0.2 m に位置する。SP16・SP37 を切る。小穴の東寄りに柱痕跡が認められるが、小穴検出時には確認できなかった。このため



Fig. 24 I区 遺構図 (2)

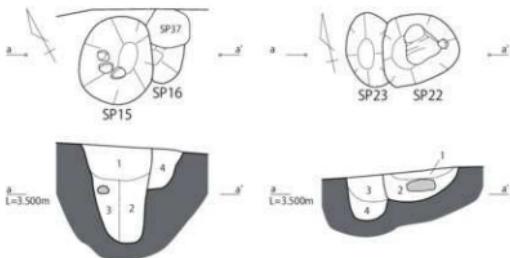
柱の直径は不明であるが、柱痕跡の南西部に周囲を取り巻くように、根固めとみられるこぶし大礫が3個認められた。その内径から計測すると柱の直径は10cmを測る。遺構から少量の遺物が出土したが、年代の判明する遺物は認められなかったため、遺構の詳細な年代は不明である。

SP18 (Fig. 24) 調査区北西部で検出した小穴で、SX01の北に近接する。小穴の中央に直径7cmの柱痕跡が認められる。遺構の底面は平坦で、断面形はU字形を呈する。遺構から少量の遺物が出土したが、年代の判明する遺物は認められず、遺構の詳細な年代は不明である。

SP20 (Fig. 24) 調査区北西部のSX01の南0.1mに位置する円形の小穴である。小穴の西寄りに柱痕跡が認められる。柱の直径は13cmとやや大きく、柱痕跡の北辺に沿って周囲を取り巻くように直径2cmの大の小礫が認められた。遺構から少量の遺物が出土したが、年代の判明する遺物は認められなかつたため、遺構の詳細な年代は不明である。

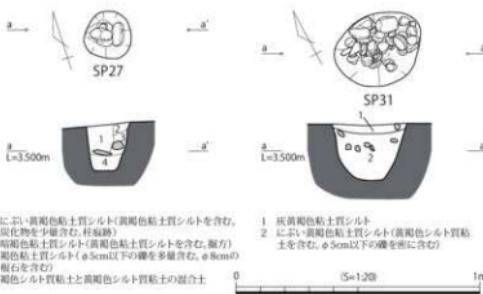
SP22・SP23 (Fig. 25) 調査区中央西寄りで検出した小穴で、SP22がSP23を切る。SP22は不整形形を呈し、遺構底面で遺構の北寄りに隅丸三角形の石を据える。礫の上面が平坦であり、根石の可能性が高い。SP23は楕円形を呈し、南北方向に長軸をもつ。SP23からは遺物が出土しなかつた、SP22からは少量の遺物が出土したが、年代の判明する遺物は認められず、遺構の詳細な年代は不明である。

SP27 (Fig. 25) 調査区北東部で検出した小穴でSD02の東端に位置し、SD02を切る。平面形は円



- 1 にぶく黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土(SP15)
- 2 黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトを含む、φ 3cm以下の礫を多量含む。柱痕跡(SP15)
- 3 にぶく黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土(φ 10cm以下)の礫を多量含む、φ 5cm の粗石を含む。柱穴(SP15)
- 4 黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土(SP16)

- 1 枝葉根色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土(φ 2cm以下)の礫を多量含む。SP22
- 2 開孔ルート質粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトを含む、φ 20cm の粗石を含む。柱痕跡(SP22)
- 3 にぶく黄褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。SP23)
- 4 黄褐色粘土質シルト(SP23)



- 1 にぶく黄褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。炭化木を少許含む。柱痕跡)
- 2 黄褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。粗石)
- 3 黄褐色粘土質シルト(φ 5cm 以下の礫を多量含む。φ 8cm の粗石を含む。柱痕跡)
- 4 黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土

Fig.25 I 区 遺構図 (3)

穴の中央に柱痕跡が認められた。柱の直径は 14cm を測り、ほかの小穴で検出した柱の直径とくらべ大きい。遺構の平面形が隅丸長方形を呈し、規模も大きいことからほかの小穴とは様相を異なる。これと同様な小穴は調査区内では認められず、組み合う遺構も不明である。遺構から少量の遺物が出土したが、年代の判明する遺物は認められなかったため、遺構の詳細な年代は不明である。

v) その他の遺構

SX01 (Fig. 20) 調査区北西部で検出した遺構で、平面形が弧状を呈する。先述の SD02 の西側 0.5m に位置する。遺構は東西に長軸をもち、中央部で北側へ弓なりになる。遺構の西端で SP28 を切る。遺構の断面形は U 字形を呈し、遺構の底面はほぼ平坦である。堅穴建物の周壁溝のような形状である。遺構から遺物が出土していないため、遺構の詳細な年代は不明である。埋土の特徴からは先述した SD01 の埋土と類似するため、同時期の遺構である可能性も考えられる。

SA01 (Fig. 26) 調査区中央部で検出した柱列である。東西方向に 2 間 (SP07・SP13・SP30) 認められた。柱列は SD01・SD02 にほぼ主軸を揃え、W-21°-N となる。構成する 3 基の小穴は円形を呈し、中央にいざれも柱痕跡が認められる。遺構の規模は遺構一覧表に示すとおりで、柱痕跡から柱の直径はいざれも 8cm をはかる。柱間寸法は SP30 - SP13 間は 2.04 m, SP13 - SP07 間が 1.98 m を測り、およそ 2 m 等間となる。小穴の底面高は不揃いである。これと組み合う遺構が、調査区内でみつか

形を呈し、断面形は箱形を呈する。遺構底面は平坦で、10cm ほど置土した上に根石を配する。断面で柱痕跡が認められ、その周囲に根固めと考えられる礫が認められた。埋土から遺物が出土しているが、小片のため年代は不明である。

SP31 (Fig. 25) 調査区西部で検出した小穴で、平面形が東西に長軸をもつ梢円形を呈する。遺構からはこぶし大礫が密に含まれる。遺構の断面形は U 字形を呈する。遺構の上部が削平されている可能性があるため詳細は不明であるが、礫は柱の下部構造の根固めの可能性が考えられる。遺構から少量の遺物が出土したが、年代の判明する遺物は認められず、遺構の詳細な年代は不明である。

SP34 (Fig. 24) SK02 の東側で検出したやや大型の小穴で、SK02 を切る。遺構は隅丸長方形を呈し東西に長軸をもつ。小

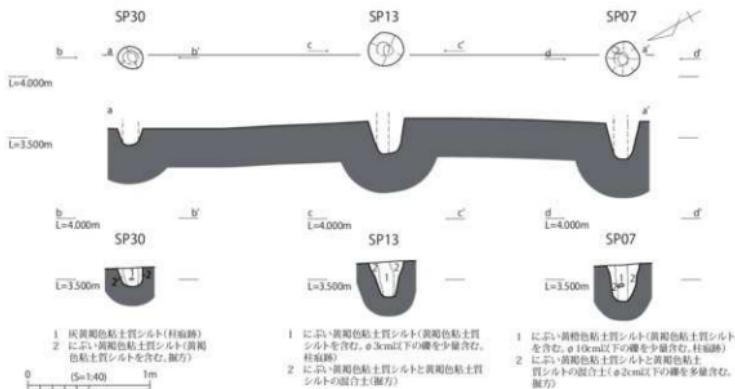


Fig.26 I区 SA01遺構図

らなかつたため、建物かどうかは不明である。それぞれの小穴から遺物が出土しているが、年代の判明する遺物は認められなかつたため、遺構の年代は不明である。

(3) 遺物 (Fig. 27 ~ 29)

1・2はSE01出土遺物である。1は瀬戸美濃産の火鉢で江戸後期に属する。2は瀬戸美濃産の插鉢体部で、大窓2~3段階の所産。

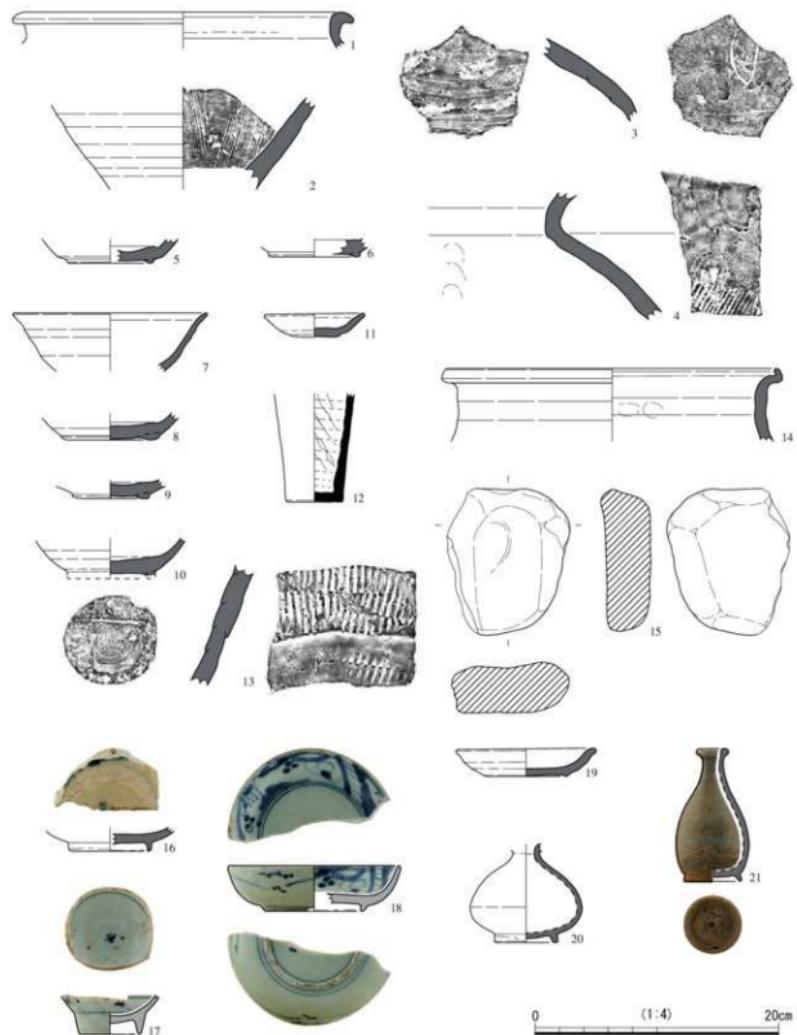
3はSD01出土の渥美産甕肩部の破片である。器壁が厚いことから大型の甕であると考えられる。外面に「U」字状の線刻が認められる。13世紀代の年代が考えられる。

4はSD02出土の渥美産甕の破片である。頸部は「く」の字状に外反する。外面に縦位の平行タタキが認められる。器壁が厚いことから大型の甕であると考えられる。13世紀代の年代が考えられる。

5・6はSP31出土の山茶碗の碗底部である。小片であるが肉厚の底部に低い高台を貼り付ける。7型式13世紀中葉に属するものと考えられる。

7~15はSK02出土遺物である。7~11は山茶碗である。7は碗の口縁部から体部の破片。8~10は碗底部で、肉厚の底部に低い高台を貼り付ける。10は高台が剥離するが、底部裏面に線刻が認められる。11は完形の小皿である。口径8.0cmを測る。口縁部内外面に自然釉がかかる。底部外面と見込部は摩耗のため平滑である。7型式13世紀中葉に属するものと考えられる。12は須恵器壺Gの底部から体部である。9世紀代の所産。13は渥美産の大型甕体部の破片で、外面に縦位の平行タタキが顕著である。14は常滑産の壺口縁部で、直立気味の頸部から口縁部は外反し、端部を上方へつまみ上げる。4型式13世紀初頭の所産。15は砂岩製の砥石である。

16~21はII層出土遺物である。16は江戸後期に属する瀬戸美濃産の陶器皿である。見込部に五弁花印判と圈線が認められる。17は肥前産磁器の広東碗である。見込部に手書きの文様、圈線が認められる。外面には草花文が認められる。18は19世紀代の肥前産磁器皿である。内外面に草花文が認められる。19は瀬戸美濃産の志野丸皿である。完形で内面に煤が付着し、灯明皿として使用されたものと考えられる。口径11.2cm。大窓2段階後半に属する。20は产地不明陶器の小瓶である。頸



1~2 : SE01, 3 : SD01, 4 : SD02, 5~6 : SP31, 7~15 : SK02, 16~21 : II層

Fig.27 I区 出土遺物

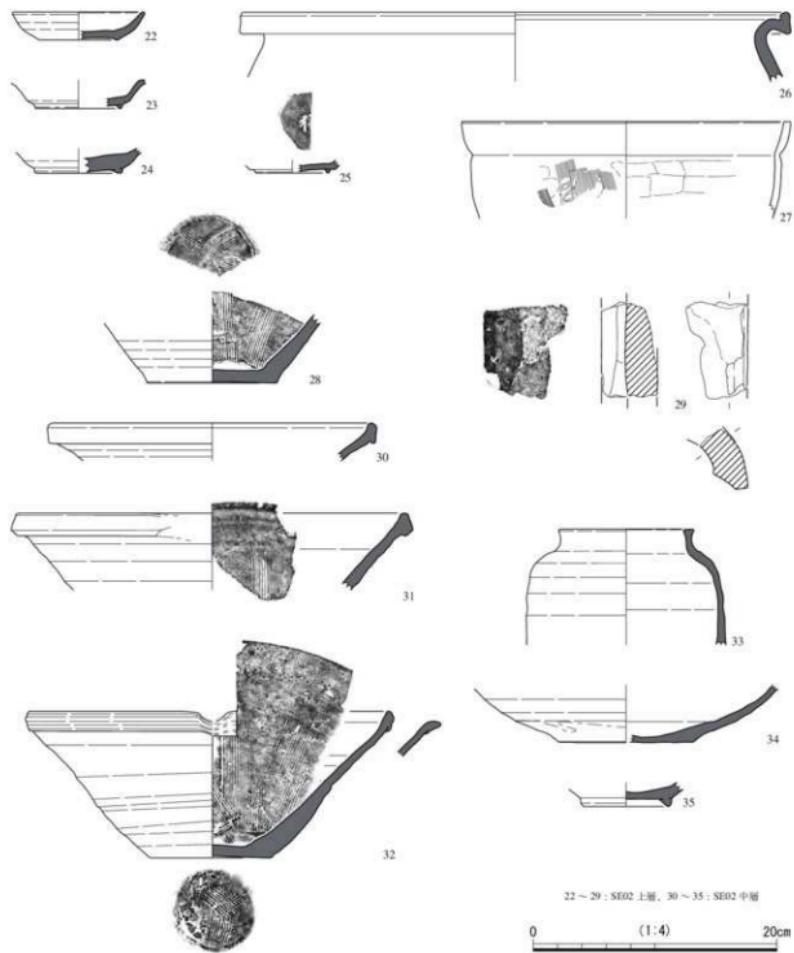


Fig.28 I 区 SE02 上・中層出土遺物

部から底部まで完存する。21は瀬戸美濃産陶器の小瓶で、底部裏面に墨痕が認められる。墨書の可能性があるが判読できない。20・21ともに江戸後期の所産。

22～29はSE02上層、30～35はSE02中層、36～50はSE02下層出土である。22は初山産の内秀皿で、胎土が褐色を呈する。口径10.6cm。大窯3段階後半に属する。23・25は小片で、瀬戸美濃産の折縁皿である。23は口縁部を欠くが、断面三角形の低い高台を貼り付ける。25は平坦な見込部に「福」と判読できる線刻が認められる。大窯4段階前半に属する。24は山茶碗の碗底部である。

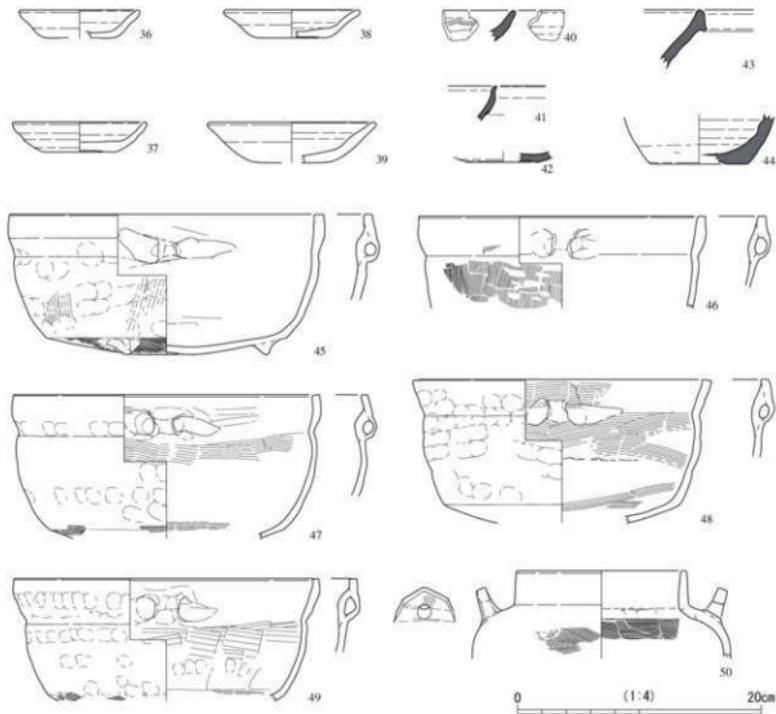


Fig.29 I 区 SE02 下層出土遺物

7型式13世紀中葉に属するものと考えられる。26は常滑産の甕で、復元口径44.6cmを測る。4型式13世紀初頭と考えられる。27は土師器の内耳鍋である。内輪形内耳鍋B2類で、16世紀後半に属する。28は初山産の擂鉢底部で、胎土は灰色を呈する。底径10.4cmを測る。大窯3段階の所産。29は丸瓦の小片である。四面に布目が残る。30～32は擂鉢で、30が初山産、31・32が瀬戸美濃産である。30は大窯3段階、31は大窯4段階後半、32は残りが良い資料で片口が残存する。大窯2段階に属する。33は初山あるいは志戸呂産の壺である。なで肩の体部から短い口縁部が垂直に立ち上がり、口縁端部を内外に拡張する。内外面に暗赤灰色の釉がかかる。江戸前期まで降る可能性がある。34は志戸呂産の大皿と考えられる。胎土は灰褐色を呈し、底径11.0cmを測る。大窯4段階に属する。35は山茶碗の碗で底部は完存する。湖西・渥美産と考えられ、5型式13世紀初頭の所産と考えられる。36～39は土師器かわらけである。36～38は小皿で口径9.6～10.8cm。39は中皿で口径13.4cmを測る。ロクロ成形で底部に回転糸切痕を残す。16世紀後半～17世紀前半の年代が考えられる。40は瀬戸美濃産陶器の黄瀬戸碗の小片である。にぶい黄色の釉調を示す。大窯4段階の所産。41は瀬戸美濃産の小天目碗の小片。大窯3段階の所産。42は初山産の皿の小片である。胎土は灰褐色を呈する。43は瀬戸美濃産擂鉢口縁部の小片で、大窯3段階に属する。44は瀬戸美濃産徳利の底部である。

底部は幅広の蛇の目高台で、江戸前期の所産。45～49は土師器の内耳鍋である。いずれも内彎形内耳鍋B2類で、半球形の体部から内湾する口縁部が立ち上がり、口縁部上端はやくぼむ。体部外面はユビオサエあるいはハケメ調整。体部内面はハケメ調整あるいは板ナデ調整。内耳は両方が残存するものはないが、口縁部下に半球形の粘土塊を縦位に貼り付け、棒状工具を用いて孔を貫通させている。45は底部まで残存する。底部には断面三角形の短い脚部を貼り付ける。2ヶ所残存するが、貼り付け位置からみて3足であると考えられる。体部と底部境の稜は明瞭で、外面は細かなハケメが認められる。48は口縁部が「く」の字状に外反する。45は口径23.3cm、48は25.6cmを測る。50は土師器の茶釜である。口縁部から肩部までの破片で、口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部はややすぼまる。肩部には板状粘土を横位に貼り付け外耳とし、口縁部に直交する位置に円孔を貫通させる。外耳は斜上方に貼り付け、五角形を呈する。体部下半は不明であるが、羽は付属しないものと推定される。

(4) 小 結

I区は今回の調査範囲の最南端で、5次調査V区の北5mの位置にあたる。遺構は大別して鎌倉時代に属する遺構と、戦国時代から江戸時代にかけての遺構が認められた。鎌倉時代の遺構としてはSK02と、埋土の特徴や切り合い関係などからSD01・SD02、SA01などが挙げられる。SA01は年代の判明する遺物が認められないが、SD01・SD02と主軸を揃えることから同時期の遺構である可能性を考えている。SK02は浅い土坑で、廐棄土坑としての性格が考えられる。SA01もこれに伴うとすれば、I区は鎌倉時代の居住空間の一画を占めているものと考えられる。

戦国時代から江戸時代の遺構としては、SE02や多くの小穴群が認められた。小穴に関しては出土遺物が少ないため、厳密な年代は不明であるが、埋土で識別すると当該期の遺構が多くを占めるものと推定している。小穴の特徴としては、柱痕跡が認められ根石などを伴う小穴が多いということが挙げられる。組み合わせが判明しないが、おそらく建物を構成する柱穴である可能性が高い。

SE02は素掘りの井戸で、埋土から多量の遺物が出土しており、当該期の良好な一括資料を得ることができた。調査範囲が狭く、井戸底面までの調査を断念したため、井戸が機能した詳細な年代は確認できなかったが、井戸の埋没時に相当する時期の遺物が多量に出土した。出土遺物は大窓3～4段階に属する瀬戸美濃産や初山・志戸呂産の陶器類や、かわらけ、内耳鍋が多くを占めており、城下町形成期の居住空間として土地利用がなされたことが再認識できた。この井戸に伴なうほかの遺構の年代については調査では明らかにすることはできなかつたが、先述したように多くの小穴はこの井戸と同時期の遺構である可能性が高い。

4 II区の調査

(1) 概要

II区は第1章でも述べたとおり6地区に分割して調査することとなり、呼称をアルファベット小文字を用いてIIa区、IIb区、IIc区北部、IId区、IIe区とした。IIc区は調査範囲の中央を分断するかたちで水道管やガス管などが横断しており、それを挟んで同時に調査を行うこととなったため、北側をIIc区北部、南側をIIc区南部と呼称した。

II区は今回の調査範囲のほぼ中央に位置し、未調査範囲も含めると長さ54m、幅5m、面積240.4m²に及ぶ。以下にII区の調査成果を述べるが、遺構平面図は細分した調査区ごとに示す。遺構の説明については遺構の種別毎に行うため、個別の遺構図は種別毎に示すこととする。なお本文では主要遺構のみ記述し、ほかの遺構については文末の遺構一覧表に示したので参照されたい。

検出した遺構は、小穴が最も多く204基、土坑25基、溝8条、井戸3基、柱列2条、その他7基となつた。出土遺物もほかの地区にくらべて豊富に出土した。遺構の帰属年代が判明するものもみられたが、小穴からは年代の判明する遺物がほとんど出土していないため、遺構の詳細な年代については判明しないもののが多かった。遺構の年代の根拠として、埋土の相違により識別できるものもあり、これらを考慮し年代を推定した。具体的には他の地区と同様、基盤層直上にあるIV層とした自然堆積層を切る遺構かどうかが、年代を推しはかる一つの指標となつた。

IIa区で検出できた遺構は重複するものが少なく、遺構の密度も非常に薄いことが挙げられる。調査区北端部と、IIb区に接する南端部付近に遺構が認められたが、調査区中央部はほとんど遺構が認められなかつた。みつかった遺構もほとんどが小穴であった。出土遺物も広範囲に調査できたわりに少なく、図示できたのはFig.58に示したとおりであった。

IIb区はIIa区の南に連続する調査区である。IIa区南端部で、井戸と想定できる深度のある遺構の存在が明らかとなつたため、この付近の遺構はIIa区の遺構としては調査せず、IIa区埋め戻し後にIIb区の調査範囲として調査を行つた。

IIc区はIIb区の南に位置する調査区で、中央部に未調査範囲をはさんで北側のIIc区北部と、南側のIIc区南部に区分して調査した。このうちIIc区南部は今回の調査範囲のなかで最も遺構密度が高く、多数の遺構が認められた。

IId・IIe区はIIc区南部の南に位置する調査区で、東側に隣接する宅地との関係から限定的な範囲の調査となつた。

(2) 遺構

i) 溝

SD01 (Fig. 30・33・40) IIb区とIIa区の境から南に延びる直線溝で、IV層下面から掘り込まれる遺構である。この延長がIIc区北部、さらにIIc区南部にまで連続するものとみられる。IIb区からIIc区北部の南端までは直線的に延びるが、IIc区南部ではこれをそのまま延長させるとやや西にずれるため、別遺構である可能性もあるものの、遺構の幅や深さ、断面形など共通する要素が認められたため、ここでは同一遺構として扱うこととする。仮に別遺構とした場合は長さがおよそ12mとなる。同一遺構とした場合は南にあるSD02の手前で浅くなり、ここまで長さが19mをはかる。IIb区ではSK09を切るが、その北側は調査範囲が狭まる位置になるため詳細は不明であるが、この位置で収束するかあるいは西側へ折れ曲がる可能性が考えられる。遺構は浅い皿状断面を呈し、幅が

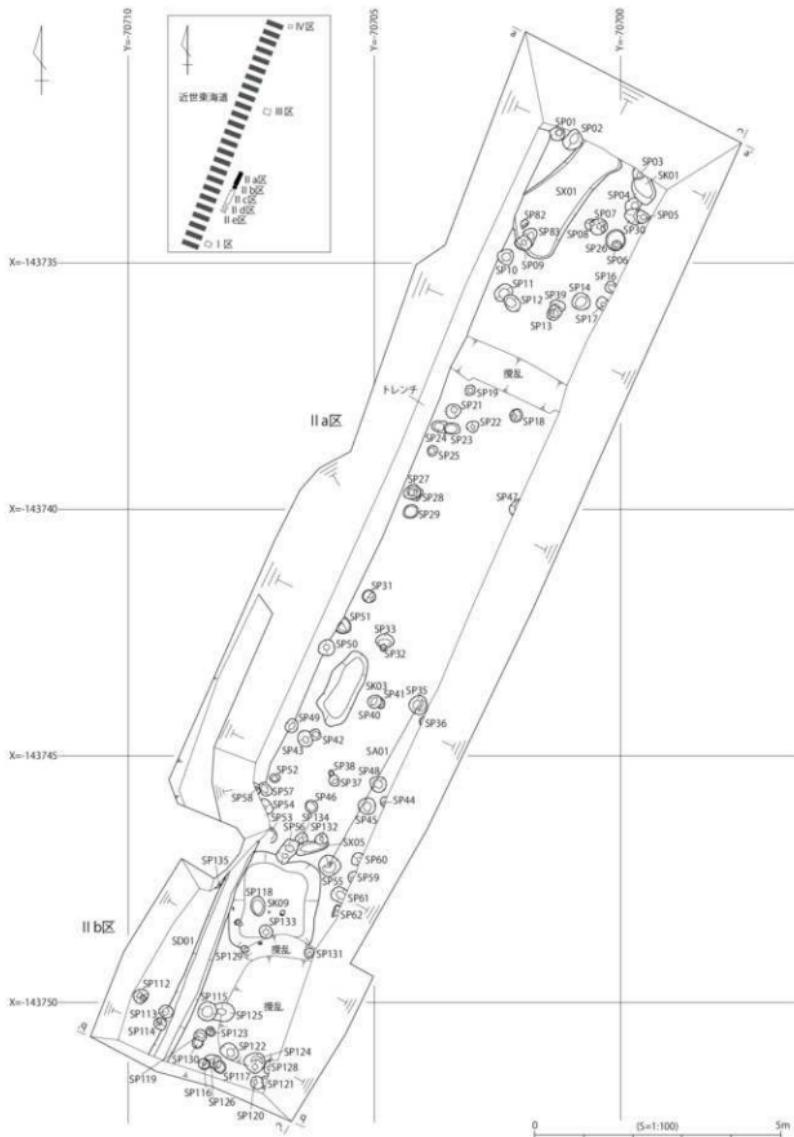


Fig.30 IIa・IIb区 遺構全体図

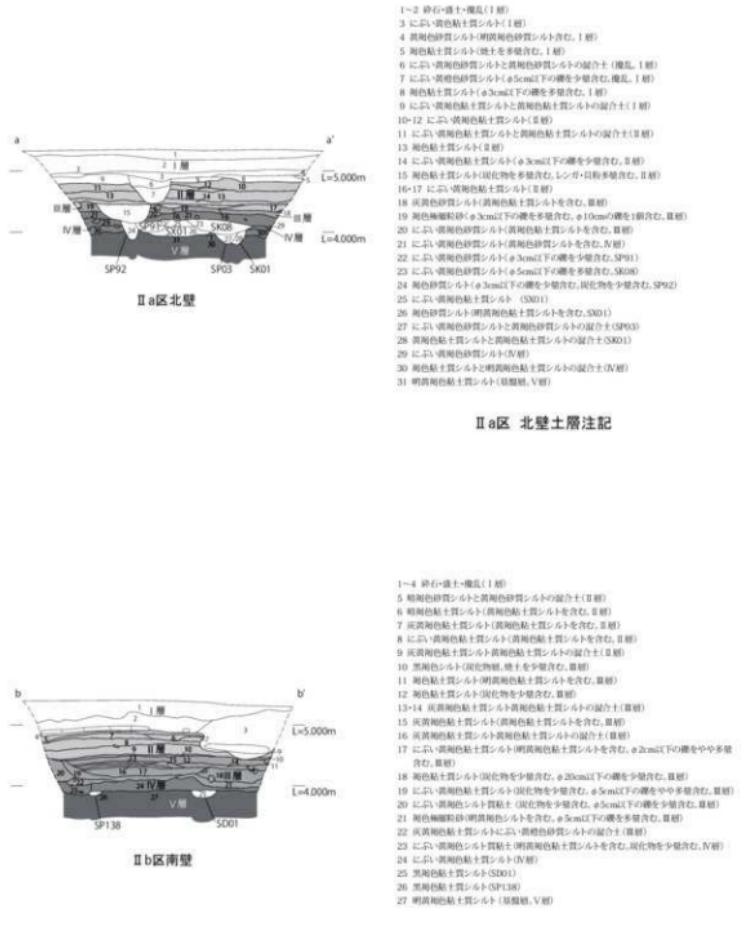


Fig.31 II a + II b 区 壁面図 (1)

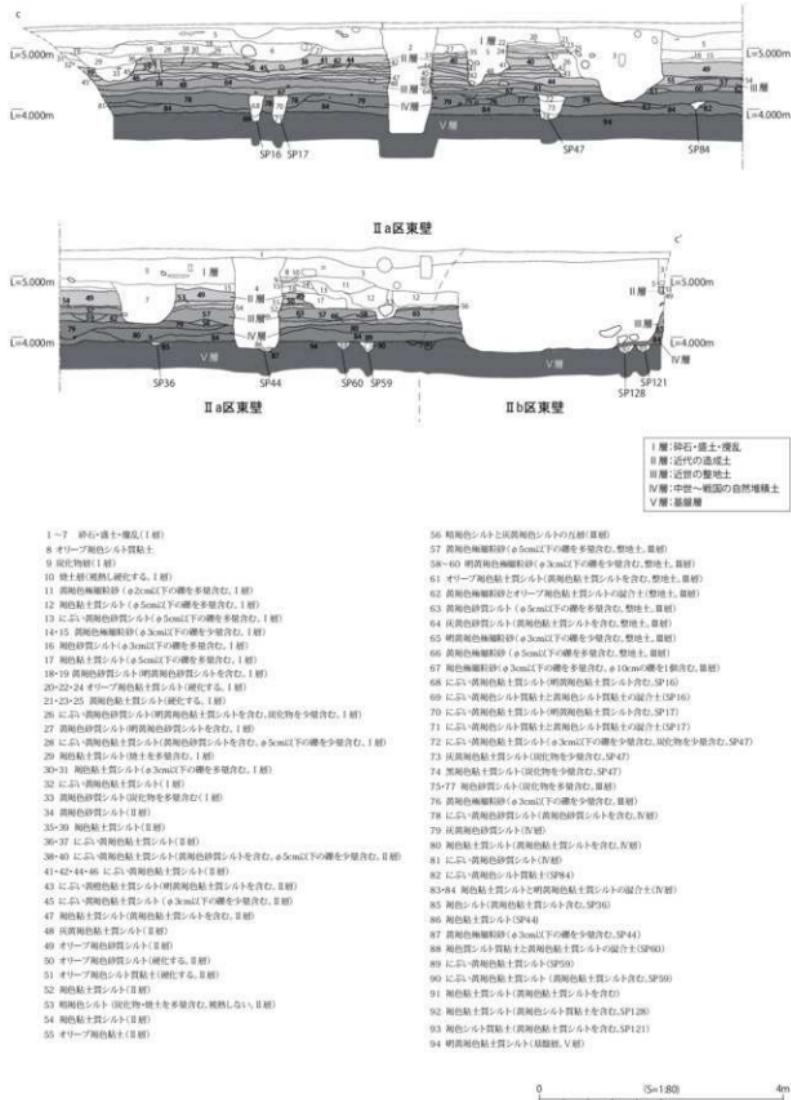


Fig.32 II-a・II-b 区 壁面図（2）

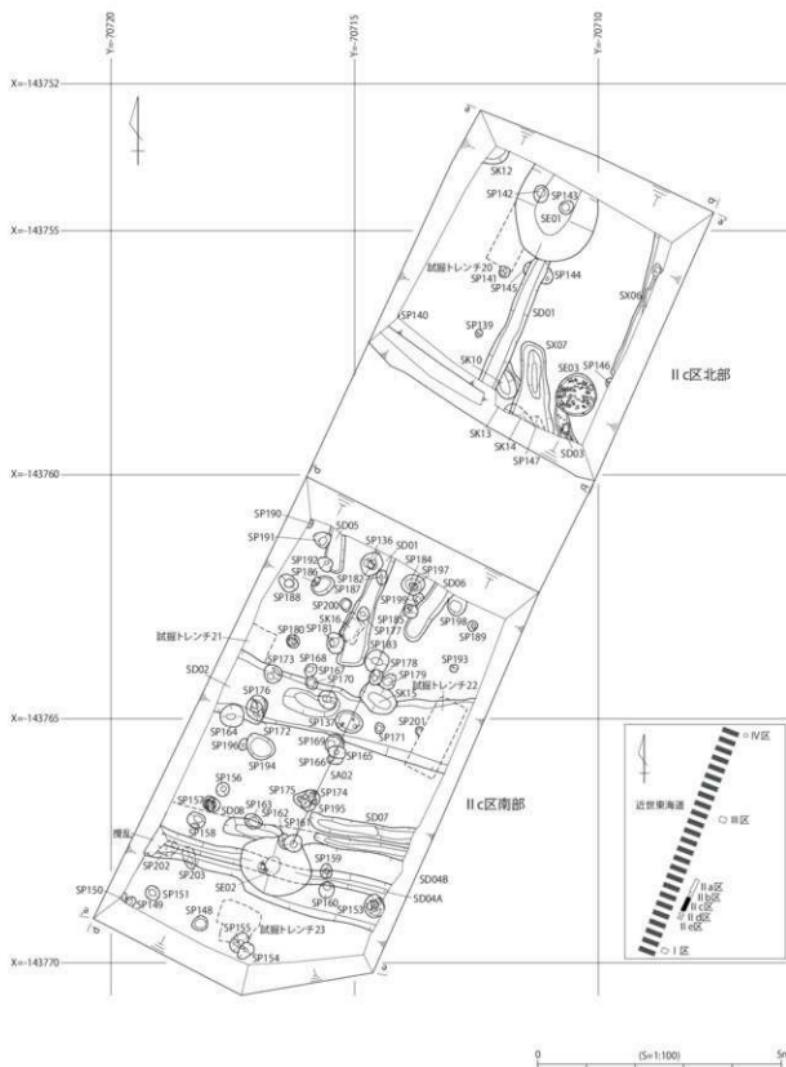
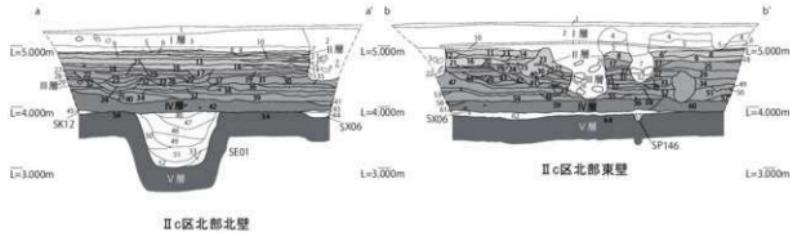


Fig.33 IIc 区 遺構全体図



IIc 北部北壁
IIc 北部東壁

- 1～3 砂心・漂砾・漂砾(Ⅰ層)
4 水質褐色砂質シルトと褐褐色色砂質シルトの混合土(硬くしまる, Ⅲ層)
5 塩化物岩(Ⅳ層)
6 黄褐色砂質シルト(硬さを多量含む, Ⅴ層)
7 草原褐色砂質シルト(硬)
- 8 黄褐色色砂質シルト(硬さを多量含む, Ⅱ層)
9 黄褐色砂質シルト(硬さを多量含む, Ⅲ層)
10～12 从生褐色色土質シルト(硬)
- 11 明黄色褐色土質シルト(硬色地質土質シルトを含む, Ⅱ層)
13 浅黄色土質シルト(硬)
- 14 黄褐色粘土質シルト(硬地質土質シルトを含む, Ⅲ層)
15 黄褐色砂質シルト(硬)
- 16 に～(黄褐色) 黄褐色シルト(褐色地質土質シルトを含む, Ⅱ層)
17 に～(黄褐色砂質シルト) φ 5cm(以下)の隙間に少量含む, 略層)
18～29 41 に～(黄褐色粘土質シルト(硬))
- 19 黄褐色粘土質シルト(硬地質土質シルトを含む, 略層)
20 黄褐色砂質シルトと黄褐色色砂質シルトの混合(Ⅱ層)
21 明黄色褐色シルト(硬さを多量含む, 略層)
22 に～(黄褐色色砂質シルトと黄褐色色砂質シルトの混合土(硬層))
23 硬化粘土質土(略層)
24 黄褐色粘土質シルト(硬地質土質を含む, 略層)
25 黄褐色砂質シルト(硬地質土質を含む, 略層)
26 黄褐色粘土質シルト(硬地質土質を含む, 略層)
27 黄褐色砂質シルト(Ⅰ層)
28 黄褐色粘土質シルト(黄褐色色砂質シルトを含む, 略層)
29 黄褐色砂質シルト(Ⅰ層)
30 黄褐色粘土質シルト(黄褐色色砂質シルトを含む, 略層)
31 黄褐色色砂質シルト(Ⅰ層)
32～36 黄褐色粘土質シルト(φ 2cm以下)の隙間に少量含む, 略層)
37 明黄色褐色砂質シルト(硬)
- 38 黄褐色砂質シルト(硬地質土質シルトを含む, Ⅲ層)
39 黄褐色砂質シルト(φ 2cm以下)の隙間に少量含む, 略層)
40 に～(黄褐色) 黄褐色粘土質シルト(硬地質土質を含む, φ 5cm(以下)の隙間に少量含む, 略層)
41 に～(黄褐色色砂質シルト(硬地質土質を含む, φ 5cm(以下)の隙間に少量含む, 略層)
42 に～(黄褐色粘土質シルト(黄褐色色土質シルトを含む, SX06))
43 黄褐色粘土質シルト(SX06)
44 に～(黄褐色粘土質シルト(黄褐色色土質シルトを含む, SE01))
45 黄褐色粘土質シルト(SE01)
46～48 に～(黄褐色粘土質シルト(黄褐色色土質シルトを含む, φ 2cm以下)の隙間に少量含む, SE01)
49 黄褐色粘土質シルト(硬地質土質を含む, SE01)
50 黑褐色粘土質シルト(SE01)
51 黄褐色粘土質シルト(黄褐色色土質シルトを含む, SK12)
52 に～(黄褐色粘土質シルト(SE01))
53 黑褐色粘土質シルト(SE01)
54 黄褐色粘土質シルト(φ 5cm以下)の隙間に少量含む, 略層), V層)
- 3～3 砂心・漂砾・漂砾(Ⅰ層)
4 明黄色褐色土質シルト(Ⅰ層)
5 に～(黄褐色砂質シルトと黄褐色色砂質シルトの混合土(Ⅰ層))
6 灰褐色色土質シルトと黄褐色色砂質シルトの混合土(Ⅰ層)
7 粘土(φ 2cm以下)の隙間に少量含む, Ⅰ層)
8 明黄色褐色粘土質シルト(φ 3cm以下)の隙間に少量含む, Ⅱ層)
9 明黄色褐色シルト(φ 3cm以下)の隙間に少量含む, Ⅱ層)
10 从生褐色色砂質シルト(硬地質土質シルトを含む, 略くしまる, Ⅱ層)
11 黄褐色粘土質シルト(硬地質土質を含む, φ 2cm以下)の隙間に少量含む, Ⅱ層)
12 黄褐色砂質シルト(硬地質土質を含む, Ⅱ層)
13 黄褐色地質粘土(Ⅰ層)
14 黄褐色粘土質シルト(硬地質土質を含む, Ⅱ層)
15 黄褐色粘土質シルト(φ 3cm以下)の隙間に少量含む, Ⅱ層)
16 に～(黄褐色色土質シルト(硬地質土質を含む, φ 2cm以下)の隙間に少量含む, Ⅲ層)
17～18 黄褐色粘土質シルト(硬地質土質シルトを含む, 略層)
19 に～(黄褐色砂質シルト(硬地質土質を含む, Ⅲ層)
20 黄褐色地質粘土(Ⅰ層)
21～36 采掘褐色色土質シルト(Ⅰ層)
22～44 に～(黄褐色粘土質シルト(硬層))
23 亂層(Ⅰ層)地質土質を含む, φ 10cm以下)の隙間に少量含む, 略層)
24 黄褐色粘土質シルトと黄褐色色土質シルト(硬地質土質を含む, 略層)
25 采掘褐色色土質シルト(φ 5cm以下)の隙間に少量含む, 略層)
26 采掘褐色土質(Ⅰ層)
27 黄褐色粘土質シルト(φ 10cm以下)の隙間に少量含む, 略層)
28 黄褐色粘土質シルト(黄褐色色土質シルトを含む, 略層)
29～32 黄褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む, 略層)
33 地質粘土(Ⅰ層)
34 黄褐色粘土質シルト(φ 2cm以下)の隙間に少量含む, 略層)
35 に～(黄褐色色土質シルト(Ⅰ層)地質土質を含む, 略層)
36 に～(黄褐色色砂質シルト(φ 2cm以下)の隙間に少量含む, 略層)
37 地質粘土(Ⅰ層)
38 黄褐色粘土質シルト(硬地質土質を含む, 略層)
39～42 に～(黄褐色粘土質シルト(黄褐色色土質シルトを含む, 硬化物を多量含む, 略層)
43 黄褐色粘土質シルト(Ⅰ層)
44 地質粘土質シルト(黄褐色色土質シルトを含む, 硬化物を多量含む, 略層)
45 に～(黄褐色粘土質シルト(硬地質土質を含む, Ⅲ層)
46 地質粘土質シルト(黄褐色色土質シルトを含む, 略層)
47 黄褐色砂質シルト(Ⅰ層)
48 黄褐色粘土質シルト(φ 2cm以下)の隙間に少量含む, 略層)
49 黄褐色粘土質シルト(φ 2cm以下)の隙間に少量含む, 略層)
50 地質粘土質シルト(黄褐色色土質シルトを含む, 略層)
51 に～(黄褐色粘土質シルト(φ 10cm以下)の隙間に少量含む, 略層)
52 采掘褐色色土質シルト(φ 2cm以下)の隙間に少量含む, 略層)
53 に～(黄褐色粘土質シルト(Ⅰ層)地質土質を含む, φ 2cm以下)の隙間に少量含む, 略層)
54～56 黄褐色色土質シルト(φ 2cm以下)の隙間に少量含む, 略層)
55 采掘褐色色土質シルト(黄褐色色土質シルトを含む, 略くしまる, Ⅱ層)
56 地質粘土質シルト(φ 10cm以下)の隙間に少量含む, 略層)
57 地質粘土質シルト(φ 10cm以下)の隙間に少量含む, 略層)
58 に～(黄褐色粘土質シルト(Ⅰ層))
59 に～(黄褐色色土質シルト(硬地質土質を含む, φ 5cm以下)の隙間に少量含む, Ⅲ層)
60 地質粘土質シルト(硬地質土質を含む, φ 2cm以下)の隙間に少量含む, Ⅲ層)
61 黄褐色粘土質シルト(SX06)
62 に～(黄褐色粘土質シルト(黄褐色色土質シルトを含む, SX06))
63 明黄色褐色粘土質シルト(Ⅰ層)
64 黄褐色粘土質シルト(φ 5cm以下)の隙間に少量含む, 略層, V層)

IIc 区 北部北壁土層注記

I 層：鉢石・漂砾・漂泥
II 層：近代の造成土
III 层：近世の雑草地
IV 层：中世～戰国の自然堆積土
V 层：基盤層



Fig.34 IIc 区 北部北壁面図



Fig.35 IIc 区南部 西壁面図



I層：碎石・盛土・盛瓦
II層：近代の造成土
III層：近世の整地土
IV層：中世・戦国の自然堆積土
V層：基礎層

- 1-2 砂石・盛土・盛瓦 (I層)
3 明治時代以前の土質 ($\phi 5\text{cm}$ 以下の礫を多量含む。土壌をやや多量含む。Ⅰ層)
4 広葉樹色粘土質シルト (Ⅱ層)
5 にら・黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土 ($\phi 5\text{cm}$ 以下の礫を少量含む。Ⅰ層)
6 にら・黄褐色粘土質シルト (固形物を多量含む。土壌を少量含む。Ⅰ層)
7 にら・黄褐色粘土質シルト ($\phi 3\text{cm}$ 以下の礫を多量含む。炭化物をやや多量含む。Ⅰ層)
8 黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。 $\phi 5\text{cm}$ 以下の礫をやや多量含む。Ⅰ層)
9 広葉樹色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。Ⅰ層の下部に固形物が発達する。Ⅰ層)
10 黄褐色粘土質シルト ($\phi 3\text{cm}$ 以下の礫を少量含む。炭化物を少量含む。Ⅱ層)
11 黄褐色粘土質シルト ($\phi 2\text{cm}$ 以下の礫を多量含む。Ⅱ層)
12 オリーブ褐色粘土質シルト (Ⅱ層)
13 オリーブ褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトの混合土。 $\phi 10\text{cm}$ 以下の礫を2箇所含む。 $\phi 3\text{cm}$ 以下の礫を多量含む。Ⅱ層)
14 広葉樹色粘土質シルト (固形物を少量含む。Ⅱ層)
15 にら・黄褐色粘土質シルト ($\phi 3\text{cm}$ 以下の礫を少量含む。Ⅱ層)
16 黄褐色粘土質シルト ($\phi 2\text{cm}$ 以下の礫を多量含む。Ⅱ層)
17 にら・黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。 $\phi 5\text{cm}$ 以下の礫を少量含む。Ⅱ層)
18 和田船粘土質シルト ($\phi 10\text{cm}$ 以下の礫をやや多量含む。固形物を少量含む。Ⅱ層)
19 にら・黄褐色粘土質シルト ($\phi 3\text{cm}$ 以下の礫を少量含む。固形物を少量含む。Ⅱ層)
20 地下水位 (約 20cm 以下の礫を少量含む。且つ多量含む。Ⅱ層)
21 明治時代以前の土質と細粒土質シルトの混合土 (Ⅲ層)
22 にら・黄褐色粘土質シルト (Ⅳ層)
23 地下水位 (且つ多量含む。Ⅲ層)
24 広葉樹色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。 $\phi 10\text{cm}$ 以下の礫を少量含む。瓦を少量含む。Ⅲ層)
25 地下水位 (土を少量含む。 $\phi 10\text{cm}$ 以下の礫を1箇所含む。Ⅲ層)
26 地下水位 (土を少量含む。且つ $\phi 10\text{cm}$ の礫を1箇所含む。Ⅲ層)
27 にら・黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。 $\phi 5\text{cm}$ 以下の礫を少量含む。瓦を少量含む。Ⅲ層)
28 広葉樹色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土 (Ⅳ層)
29 にら・黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。Ⅳ層)

- 30 岩褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。 $\phi 5\text{cm}$ 以下の礫を少量含む。 $\phi 20\text{cm}$ 以下の礫を1箇所含む。炭化物を多量含む。Ⅴ層)
31 黄褐色粘土質シルト (明治時代以前の土質と黄褐色粘土質シルトの混合土 ($\phi 5\text{cm}$ 以下の礫を少量含む。Ⅴ層)
32 広葉樹色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土 ($\phi 5\text{cm}$ 以下の礫を少量含む。Ⅴ層)
33 黄褐色粘土質シルト ($\phi 3\text{cm}$ 以下の礫を少量含む。Ⅴ層)
34 明治時代以前の土質 ($\phi 5\text{cm}$ 以下の礫を多量含む。Ⅴ層)
35 黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。 $\phi 2\text{cm}$ 以下の礫を少量含む。Ⅴ層)
36 にら・黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。 $\phi 5\text{cm}$ 以下の礫を少量含む。SK21)
37 黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。 $\phi 1-3\text{cm}$ の礫を多量含む。SK21)
38 にら・黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。 $\phi 3\text{cm}$ 以下の礫を少量含む。Ⅴ層)
39 黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。Ⅴ層)
40 にら・黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。Ⅴ層)
41 にら・黄褐色粘土質シルト (Ⅴ層)
42 にら・黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。SP204)
43 にら・黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。Ⅴ層)
44 黄褐色粘土質シルト ($\phi 1\text{cm}$ 以下の礫を少量含む。炭化物を少量含む。Ⅴ層)
45 にら・黄褐色粘土質シルト ($\phi 2\text{cm}$ 以下の礫を多量含む。SK22)
46 にら・黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。 $\phi 5\text{cm}$ 以下の礫を少量含む。SK22)
47 にら・黄褐色粘土質シルト ($\phi 1\text{cm}$ 以下の礫を少量含む。炭化物を少量含む。Ⅴ層)
48 素材層
49 にら・黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。SP149)
50 広葉樹色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。SP150)
51 にら・黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。 $\phi 5\text{cm}$ 以下の礫を少量含む。Ⅴ層)
52 黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。 $\phi 3\text{cm}$ 以下の礫を多量含む。N層)
53 黄褐色粘土質シルト (基盤層。V層)

Fig.36 IIc 区南部 南壁面図

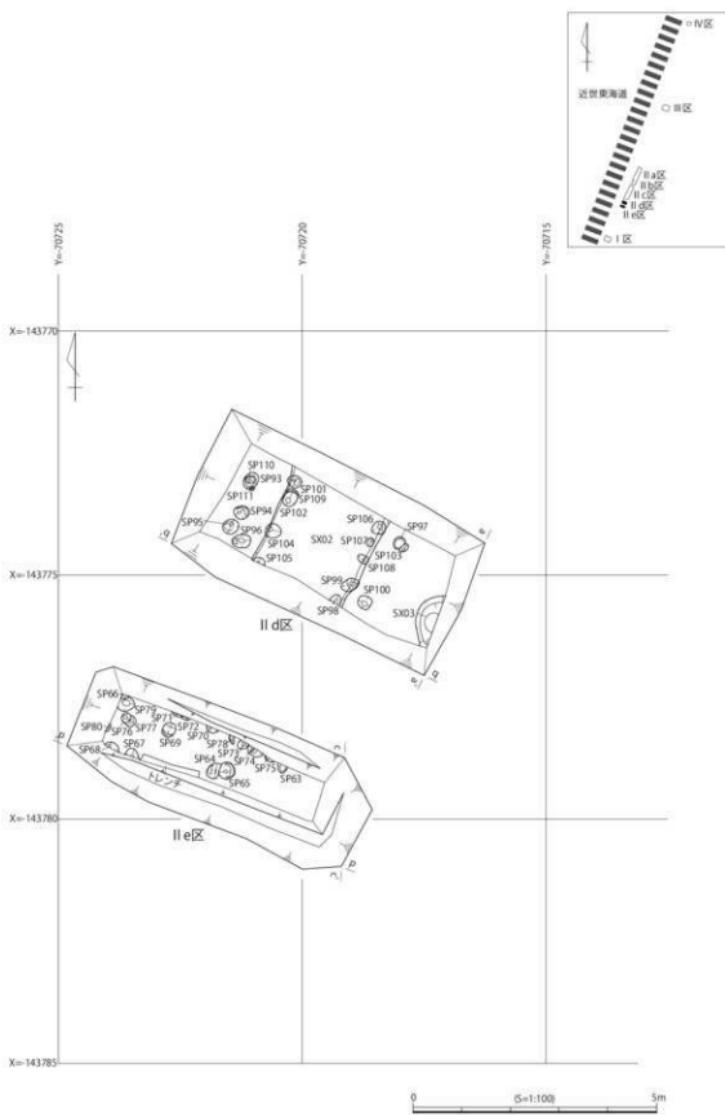
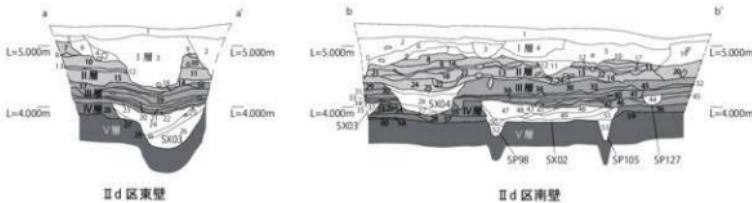


Fig.37 II d・II e 区 遺構全体図



II d 区 東壁

II d 区 南壁

- 1～3 砂石・盛土・礫層(Ⅰ層)
- 4 相似シルト(黒褐色シルトブロックを含む。φ20cm以下の礫を多量含む。Ⅰ層)
- 5 黒褐色細粒粘土質シルト(φ5cm以下の礫を多量含む。炭化物・塊土多量含む。Ⅰ層)
- 6 にら・黄褐色粘土質シルト(黒褐色シルトブロックを含む。φ5cm以下の礫を多量含む。Ⅰ層)
- 7 にら・黒褐色粘土質シルト(黒褐色シルトブロックを含む。φ2cm以下の礫を少量含む。Ⅱ層)
- 8 黑褐色シルト(黒褐色粘土質シルトを側面に含む。Ⅲ層)
- 9 黑褐色粘土シルト(黒褐色粘土質シルトを含む。Ⅳ層)
- 10 にら・黄褐色粘土質シルト(10cm以下下の礫を多量含む。Ⅴ層)
- 11 黑褐色粘土シルト(黒褐色粘土質シルトを側面に含む。φ2cm以下下の礫を少量含む。Ⅵ層)
- 12 にら・黄褐色粘土質シルト(炭化物・塊土を多量含む。黒褐鉄、Ⅶ層)
- 13 にら・黄褐色粘土質シルト(明黄色細粒粘土織維の柱状。Ⅷ層)
- 14 にら・黄褐色粘土質シルト(10cm以下下の礫を多量含む。南壁22柱状)(黒色が無い。Ⅸ層)
- 15 黑褐色シルト(5cm以下下の礫を多量含む。Ⅹ層)
- 16 にら・黄褐色粘土質シルト(黒褐色粘土質シルトを含む。φ5cm以下の礫を少量含む。Ⅺ層)
- 17 にら・黄褐色粘土質シルト(Ⅻ層)
- 18 黑褐色粘土シルト(黒褐色粘土質シルトを側面に含む。φ2cm以下下の礫を多量含む。Ⅼ層)
- 19 黑褐色粘土シルト(φ5cm以下下の礫を多量含む。Ⅽ層)
- 20 明黄色細粒粘土質シルト(φ15cm以下下の礫を多量含む。Ⅾ層)
- 21 黑褐色粘土シルト(黒褐色粘土質シルトを含む。Ⅿ層)
- 22 にら・黄褐色粘土質シルト(20cm以下下の礫を多量含む。ⅰ層)
- 23 オーリー粘土(5cm以下下の礫を少量含む。ⅱ層)
- 24 にら・黄褐色粘土質シルト(10cm以下下の礫を少量含む。ⅲ層)
- 25 黑褐色細粒粘土質シルト(10cm以下下の礫を多量含む。ⅳ層)
- 26 にら・黄褐色粘土質シルト(10cm以下下の礫を少量含む。ⅴ層)
- 27 にら・黄褐色粘土質シルト(SX03)
- 28 明黄色細粒粘土質シルト(SX03)
- 29 にら・黄褐色粘土質シルト(SX03)
- 30 にら・黄褐色粘土質シルト(SX03)
- 31 にら・黄褐色粘土質シルト(黒褐色粘土質シルトを含む。ⅶ層)
- 32・33 黑褐色シルト(黒褐色粘土質シルトの柱状・堅密土、ⅷ層)
- 34 明黄色細粒粘土質シルト(15cm以下下の礫を多量含む。堅密土、ⅸ層)
- 35 オーリー粘土質シルト(明黄色細粒粘土質シルトを含む。ⅹ層)
- 36 オーリー粘土質シルト(にら・明黄色細粒粘土の柱状・堅密土、ⅾ層)
- 37 明黄色細粒粘土質シルト(10cm以下下の礫を少量含む。SX03)
- 38 にら・黄褐色粘土質シルト(黒褐色粘土質シルトを含む。ⅿ層)
- 39 黑褐色粘土シルト(黒褐色粘土質シルトを側面に含む。ⅿ層)
- 40 黑褐色粘土シルト(黒褐色粘土質シルトを側面に含む。ⅿ層)
- 41 にら・黄褐色粘土質シルト(炭化物を少量含む。ⅿ層)
- 42 にら・黄褐色粘土質シルト(黒褐色粘土質シルトを含む。ⅿ層)
- 43 黑褐色粘土質シルト(ⅿ層)
- 44 地盤土質シルト(SP12?)
- 45 明黄色細粒粘土質シルト(5cm以下下の礫を少量含む。炭化物を少量含む。堅密土、ⅿ層)
- 46 黑褐色細粒粘土質シルト(5cm以下下の礫を少量含む。炭化物を少量含む。ⅿ層)
- 47 にら・黄褐色粘土質シルト(SX02)
- 48 にら・黄褐色粘土質シルト(黒褐色粘土質シルトを含む。SX02)
- 49 黑褐色細粒粘土質シルト(SX02)
- 50 にら・黄褐色粘土質シルト(SX02)
- 51 黑褐色細粒粘土質シルト(SX02)
- 52・53 にら・明黄色粘土質シルト(5cm以下下の礫を少量含む。SP9+10?)
- 54 にら・黄褐色粘土質シルト(5cm以下下の礫を少量含む。N層)
- 55 黑褐色粘土質シルト(ⅿ層)
- 56 にら・黄褐色粘土質シルト(5cm以下下の礫を少量含む。炭化物を少量含む。N層)
- 57 黑褐色細粒粘土質シルト(炭化物を少量含む。N層)
- 58 黄褐色粘土質シルト(N層)
- 59 黄褐色粘土質シルト(5cm以下下の礫を少量含む。堅密土、V層)
- 60 にら・黄褐色粘土質シルト(黒褐色粘土質シルトを含む。堅密土、V層)

II d 区 東壁土層附記

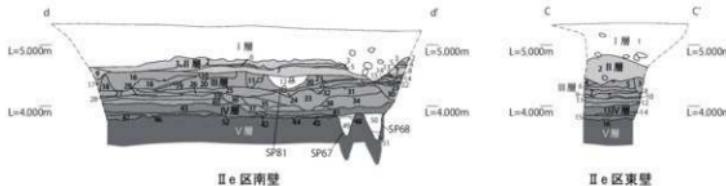
- I 層：碎石・盛土・礫層。
 II 層：近代の未成土。
 III 層：近世の堅密土。
 IV 層：中世～朝鮮の自然堆積土。
 V 層：基盤層



II d 区 南壁土層附記

- 1・2・19 砂石・盛土・礫層(Ⅰ層)
- 3 黃褐色細粒粘土質シルト(Ⅰ層)
- 4 黑褐色細粒粘土質シルト(5cm以下下の礫を少量含む。Ⅰ層)
- 5 黑褐色細粒粘土質シルト(φ5cm以下下の礫を少量含む。Ⅰ層)
- 6 にら・黃褐色粘土質シルト(5cm以下下の礫を少量含む。Ⅰ層)
- 7 黃褐色細粒粘土質シルト(10cm以下下の礫を少量含む。Ⅰ層)
- 8 黑褐色粘土質シルト(明黄色細粒粘土を側面に含む。φ5cm以下の礫を少量含む。Ⅱ層)
- 9 にら・黃褐色粘土質シルト(10cm以下下の礫を少量含む。Ⅱ層)
- 10 黃褐色細粒粘土質シルト(5cm以下下の礫を少量含む。Ⅱ層)
- 11 にら・黃褐色粘土質シルト(5cm以下下の礫を少量含む。Ⅱ層)
- 12 黃褐色細粒粘土質シルト(Ⅲ層)
- 13 黑褐色粘土質シルト(炭化物・塊土を多量含む。Ⅳ層)
- 14 にら・黃褐色粘土(炭化物・塊土を多量含む。Ⅴ層)
- 15 にら・黃褐色粘土(炭化物を多量含む。Ⅵ層)
- 16 黃褐色細粒粘土質シルト(5cm以下下の礫を少量含む。Ⅶ層)
- 17 オーリー粘土質シルト(Ⅷ層)
- 18 黑褐色粘土(Ⅸ層)
- 20 單カラーテープ(明黄色細粒粘土質シルトを含む。Ⅹ層)
- 21 黑褐色粘土シルト(黒褐色粘土質シルトを含む。SX04)
- 22 にら・黄褐色粘土質シルト(20cm以下下の礫を多量含む。Ⅺ層)
- 23 オーリー粘土(5cm以下下の礫を少量含む。Ⅻ層)
- 24 にら・黄褐色粘土質シルト(5cm以下下の礫を少量含む。Ⅼ層)
- 25 にら・黄褐色粘土質シルト(10cm以下下の礫を多量含む。SX04)
- 26 にら・黄褐色粘土質シルト(10cm以下下の礫を少量含む。SX04)
- 27 オーリー粘土(粗粒砂・粗砂・粗砂)
- 28 黑褐色粘土シルト(SX04)
- 29 にら・黄褐色粘土質シルト(黒褐色粘土質シルトを含む。φ5cm以下の礫を少量含む。ⅿ層)
- 30 黑褐色粘土シルト(5cm以下下の礫を少量含む。ⅿ層)
- 31 明黄色細粒粘土質シルト(5cm以下下の礫を多量含む。ⅿ層)
- 32・33 黑褐色シルト(黒褐色粘土質シルトの柱状・堅密土、ⅿ層)
- 34 明黄色細粒粘土質シルト(15cm以下下の礫を多量含む。堅密土、ⅿ層)
- 35 オーリー粘土質シルト(明黄色細粒粘土質シルトを含む。ⅿ層)
- 36 オーリー粘土質シルト(にら・明黄色細粒粘土の柱状・堅密土、ⅿ層)
- 37 明黄色細粒粘土質シルト(10cm以下下の礫を少量含む。SX03)
- 38 にら・黄褐色粘土質シルト(黒褐色粘土質シルトを含む。ⅿ層)
- 39 黑褐色粘土シルト(黒褐色粘土質シルトを側面に含む。ⅿ層)
- 40 黑褐色粘土シルト(黒褐色粘土質シルトを側面に含む。ⅿ層)
- 41 にら・黄褐色粘土質シルト(炭化物を少量含む。ⅿ層)
- 42 にら・黄褐色粘土質シルト(黒褐色粘土質シルトを含む。ⅿ層)
- 43 黑褐色粘土質シルト(ⅿ層)
- 44 地盤土質シルト(SP12?)
- 45 明黄色細粒粘土質シルト(5cm以下下の礫を少量含む。炭化物を少量含む。堅密土、ⅿ層)
- 46 黑褐色細粒粘土質シルト(5cm以下下の礫を少量含む。炭化物を少量含む。ⅿ層)
- 47 にら・黄褐色粘土質シルト(SX02)
- 48 にら・黄褐色粘土質シルト(黒褐色粘土質シルトを含む。SX02)
- 49 黑褐色細粒粘土質シルト(SX02)
- 50 にら・黄褐色粘土質シルト(SX02)
- 51 黑褐色細粒粘土質シルト(SX02)
- 52・53 にら・明黄色粘土質シルト(5cm以下下の礫を少量含む。SP9+10?)
- 54 にら・黄褐色粘土質シルト(5cm以下下の礫を少量含む。N層)
- 55 黑褐色粘土質シルト(ⅿ層)
- 56 にら・黄褐色粘土質シルト(5cm以下下の礫を少量含む。炭化物を少量含む。N層)
- 57 黑褐色細粒粘土質シルト(炭化物を少量含む。N層)
- 58 黄褐色粘土質シルト(N層)
- 59 黄褐色粘土質シルト(5cm以下下の礫を少量含む。堅密土、V層)
- 60 にら・黄褐色粘土質シルト(黒褐色粘土質シルトを含む。堅密土、V層)

Fig.38 II d 区 壁面図



IIe区南壁

- 1 砂岩・碎石・礫土(Ⅰ層)
- 2 に赤い黄褐色粘土質シルト(φ3cm以下)の縦を多量含む。硬化する。Ⅱ層)
- 3 に赤い黄褐色粘土質シルトで硬化する。Ⅲ層)
- 4 刺物粘土質シルトで硬化する。Ⅳ層)
- 5-6 黄褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。硬化する。Ⅴ層)
- 7 に赤い黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質レシルトの混合土(Ⅴ層)
- 8 黄褐色粘土質シルト(Ⅴ層)
- 9 黄褐色粘土質シルトで硬化する。Ⅵ層)
- 10-11 に赤い黄褐色粘土質シルト(Ⅵ層)
- 12 に赤い黄褐色粘土質シルト(Ⅶ層を多量含む。SP67)
- 13-22 赤色物質(Ⅷ層)
- 14 黄褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。他土を少額含む。硬化する。Ⅸ層)
- 15-23 黄褐色粘土質シルト(他土を少額)
- 16 に赤い黄褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。Ⅹ層)
- 17 黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土(φ3cm以下)の縦を多量含む。現在物・他土を少額含む。Ⅺ層)
- 18 黄褐色粘土質シルト(Ⅻ層)
- 19 に赤い黄褐色粘土質シルト(Ⅼ層)
- 20 黄褐色粘土質シルト(Ⅽ層)
- 21 黄褐色粘土質シルト(Ⅾ層)
- 22 黄褐色粘土質シルトと赤い粘土(φ3cm以下)の縦を多量含む。Ⅿ層)
- 23 黄褐色粘土質シルト(ⅰ層)
- 24 黄褐色粘土質シルトと赤い粘土(黄褐色粘土質シルトを含む。ⅱ層)
- 25 に赤い黄褐色粘土質シルト(φ3cm以下)の縦を多量含む。ⅲ層)
- 26-36 既往開削部粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土(ⅳ層)
- 27 黄褐色粘土質シルト(ⅴ層)
- 28 黄褐色粘土質シルト(φ5cm以下)の縦を多量含む。ⅶ層)
- 29 黄褐色粘土質シルト(ⅷ層)
- 30 に赤い黄褐色粘土質シルト(ⅸ層)
- 31-32 に赤い黄褐色粘土質シルト(ⅹ層)
- 32 に赤い黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土(ⅻ層)
- 33 黄褐色粘土質シルト(ⅼ層)
- 34 黄褐色粘土質シルト(ⅽ層)
- 35 黄褐色粘土質シルト(ⅾ層)
- 36 黄褐色粘土質シルト(ⅿ層)
- 37 黄褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。ⅿ層)
- 38 黄褐色粘土質シルト(ⅿ層)
- 39 に赤い黄褐色粘土質シルト(ⅿ層)
- 40 に赤い黄褐色粘土質シルト(ⅿ層)
- 41 黄褐色粘土質シルト(ⅿ層)
- 42 明瞭な黄褐色粘土質シルト(ⅿ層)
- 43 に赤い黄褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。ⅿ層)
- 44 砂分の過剰(ⅿ層)
- 45 に赤い黄褐色粘土質シルト(ⅿ層)
- 47 黄褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。ⅿ-2層)
- 48 に赤い黄褐色粘土質シルト(SP67)
- 49 既往開削部粘土質シルト(SP67)
- 50 に赤い黄褐色粘土質シルト(SP68)
- 51 既往開削部粘土質シルト(SP68)
- 52 黄褐色粘土質シルト(φ5cm以下)の縦をやや多量含む。基盤層。ⅿ層)

IIe区東壁土層注記

I層: 砂岩・礫土・塊状。
II層: 近代の造成土
III層: 近世の整地土
IV層: 中世～較古の自然堆積土
V層: 基盤層

IIe区南壁土層注記

0 (5=1-80) 4m

Fig.39 IIe区 壁面図

0.30～0.49 m、深さが0.02～0.09 mを測る。遺構底面の高さは最も北側で3.83 m、II b 区南端部で3.80 m、SE01と接する位置では3.79 m、II c 区北部の南端部で3.83 mとなる。おおむね平坦であるが、SE01付近がやや低くなる。遺構から年代の判明する出土していないため、詳細な遺構の年代は明らかではない。

SD01はいくつかの遺構と切り合い関係にあり、II b 区では後述する方形土坑SK09を切り、II c 区北部では井戸SE01に切られる。II c 区南部ではSP136に切られる。SK09は13世紀代の山茶碗が出土しており、遺構の上限は13世紀代と考えられる。またSP136からは江戸時代の常滑産の甕が出土しており、遺構の下限年代は江戸時代になる。一方井戸SE01との関係は、先述のとおりSE01に切られるが、同時に機能していた遺構である可能性も考えられる。

SD02 (Fig. 41) II c 区南部のほぼ中央部で検出した東西方向に走行をもつ溝である。IV層下面から掘り込まれる遺構で、調査区を東西に貫通し、主軸はW-15°Nでやや南に振れをもつ。遺構の中央部がややくびれるが、基本的には直線的になるとを考えられる。遺構の断面形は浅い皿状で、中央部付近が低くなるが全体に広がるというものではないため、このくぼみは先行する別遺構の可能性も考えられる。

遺構の規模は幅が1.38～1.67 m、深さが0.05～0.10 mを測る。遺構底面はおおむね平坦となり、中央部のくぼみを同一遺構とした場合の深さは0.13 mを測る。遺構は多くの小穴と切り合い関係にあり、江戸中期の瀬戸戸美濃の鉢が出土したSP137に切られる。溝からは年代の判明する遺物が出土しなかったため、詳細な年代は不明であるが、後述するSD04とはほぼ平行な位置関係にあることなどから13世紀代にまで遡る可能性も考えられる。

SD04・SD07・SD08 (Fig. 41) SD04はII c 区南部の南寄りで検出した溝で、IV層下面から掘り込まれる。調査の段階ではこれらの溝を同一遺構と認識していたが、再度検討を加えた結果、複数の溝が重複する可能性が高いものと考えられる。この溝に対して北に接するSD07・SD08は、SD04に伴うかあるいは前後関係にあると考えられる。SD04はSD02の南におよそ2 mの位置にほぼ平行しており、調査区を東西に貫通する。遺構は初期段階には断面U字形を呈する幅0.22～0.33 mの細い溝(SD04A)が存在しており、それらが埋没した後にSD04Aの溝を一部踏襲あるいは再掘削するかたちで、幅広の浅い溝SD04Bが掘削されたものと考えられる。SD04Bは北辺が一段浅くくぼんでおり、この部分はさらに別の溝の可能性もある。その北側に接続してSD07が位置するが、これは調査区中央部付近で途切れている。SD07は溝底に高低差が認められ、西端から東へ1.4 mの位置で段を有する。SD08はSD04B北辺を西に延長した位置にあり、同一遺構の深い部分だけを検出した可能性も考えられる。

遺構の規模は先行するSD04Aは幅が西側で0.31 m、東側で0.32 m、深さ0.14～0.16 m、SD04Bは幅が西側で0.67 m、東側で1.76 m、深さ0.15～0.20 mを測る。SD04Aの遺構底面は平坦である。

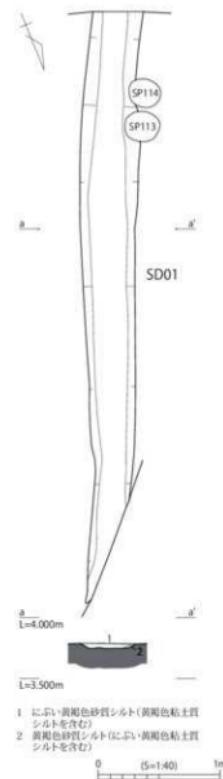


Fig.40 II b 区 SD01 遺構図

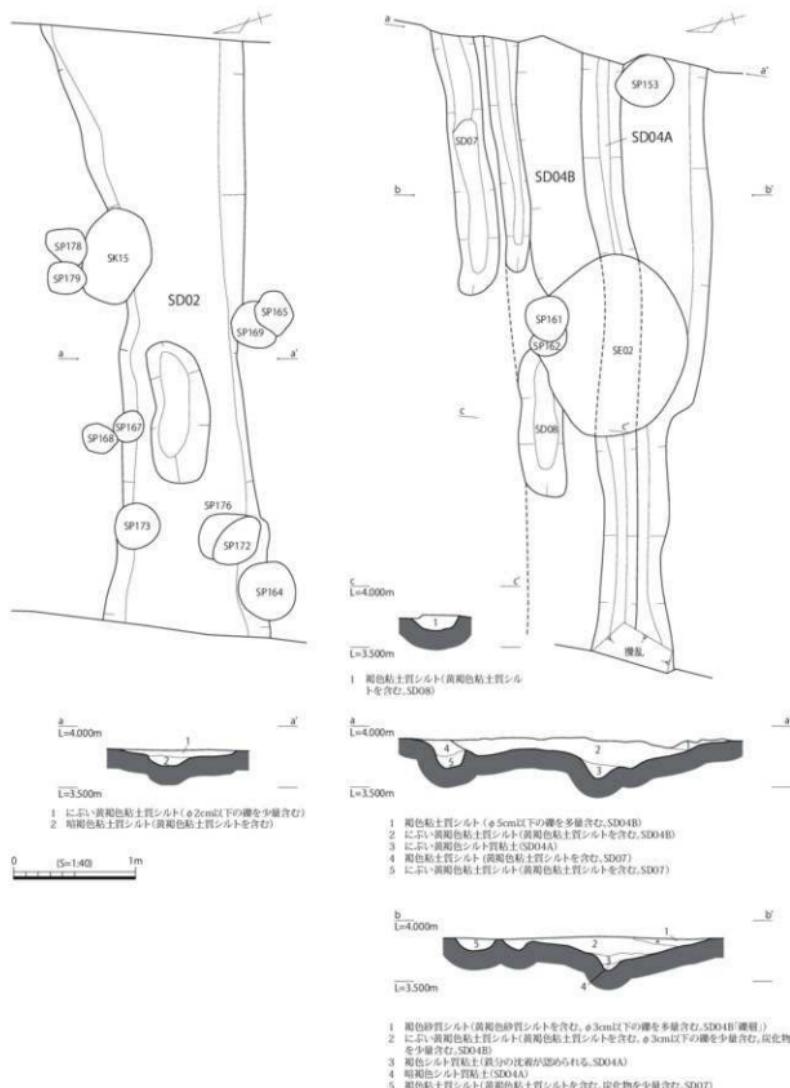


Fig.41 IIc 区南部 遺構図 (1)



Fig.42 IIc区南部西壁断面 地割境界



Fig.43 IIc区南部東壁断面 地割境界



Fig.44 IIc区北部 SE01 遺構図

SD04B の遺構底面は基本的に平坦であるが、北辺部分は細かな凹凸があり、これは溝の掘削の際に使用された工具痕の可能性が考えられる。SD04B は溝幅が東西で大きく異なるが、西側が浅いことから、上面が削平を受けているため狭くなっている可能性が考えられる。

遺構は同一位置に繰り返し掘削されており、当初は幅狭であった溝が後になり拡幅させていったものと推定される。遺構からは戦国時代から江戸時代の遺物が認められず、SD04B から少量ながら山茶碗や渥美産甕などが出土しており、13世紀代までに埋没したものと考えられる。

この遺構とは年代に大きな開きがあるため、直接的な関係は想定できないが、この位置においてもIIa区でみられたような地割境界を示す堆積が認められた。Fig.42・43の写真に示すように東西方向の溝状の掘り込みが認められ、IIa区の状況と同様、これを境として黄褐色疊混細粒砂層を用いた整地上と考えられる層が途切れる。このような現象がこの位置でみられたことは、13世紀代に繰り返し掘削された溝が、埋没後は絶続するものの、近代においても地割境界が意識されていた可能性が考えられ、地割が踏襲された事例として興味深い。

ii) 井戸

SE01 (Fig.44) IIc区北部の北壁際中央部で検出した素掘りの井戸である。IV層下面から掘り込まれる遺構で、遺構の平面形は南北に長い楕円形を呈するが、遺構の一部が北側調査区外に延びるため、厳密な形状や規模は不明である。遺構の断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。遺構の規模は東西 1.73 m、南北は 1.67 m 以上、深さは 0.83 m を測る。先述のとおり SD01 が南側に取り付く可能性もあり、その場合は SD01 が SE01 に対してやや傾斜することから、集水する機能を有していた可能性も考えられる。なお、遺構から湧水は認められなかった。

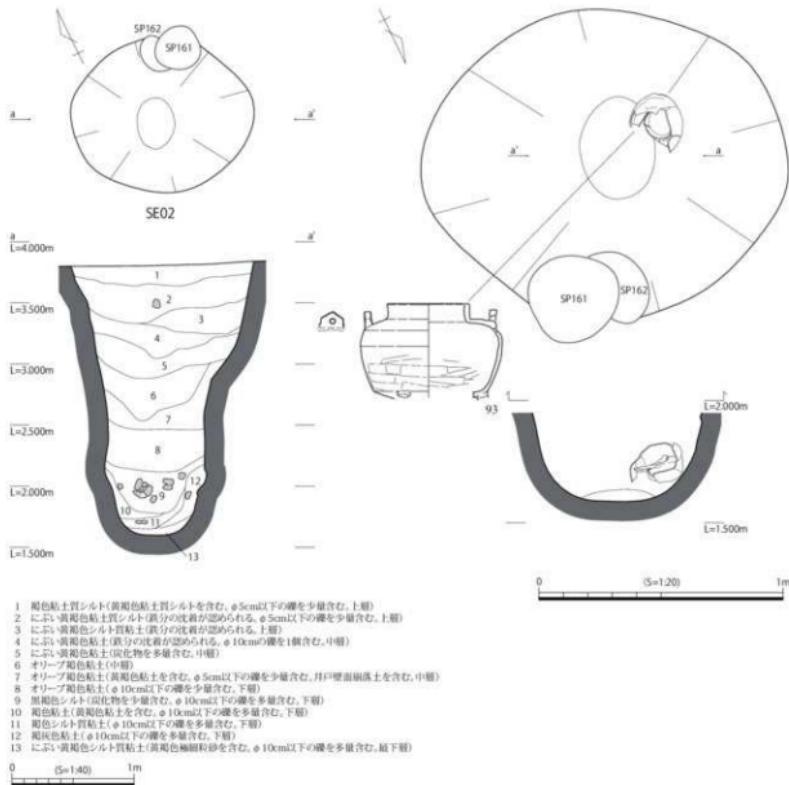


Fig.45 IIc 区南部 SE02 遺構図

遺構埋土下層は均一な堆積で、遺構の肩部から流入していった状況を示しているが、ある程度埋設した後の堆積である上層は、基盤層である黄褐色粘土質シルトをブロック状に多量に含む層で、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺構からは小片ながら山茶碗の碗や、涅美産甕、砥石などが各層から少量出土しており、これらの遺物から13世紀代までは埋没したものと考えられる。

SE02 (Fig. 45) IIc 区南部の南部中央で検出した素掘りの井戸である。IV層下面から掘り込まれる遺構で、遺構の一部を小穴などに切られるが、調査区内で遺構全体を調査することができた。先述のように SD04 を切る。遺構は東西 1.48 m、南北 1.26 m を測り、ほぼ円形を呈する。今回の調査を通じて唯一遺構底まで調査できた井戸で、深さは 2.22 m を測る。遺構は逆台形の断面形を呈し、底面はほぼ平坦である。

遺構埋土は上～最下層にまで分層が可能で、最下層（13 層）は井戸が機能していた段階の堆積である。下層（9～12 層）はこぶし大礫を多量に含む粘土層で、遺構底面から 0.5 m 上までこぶし大

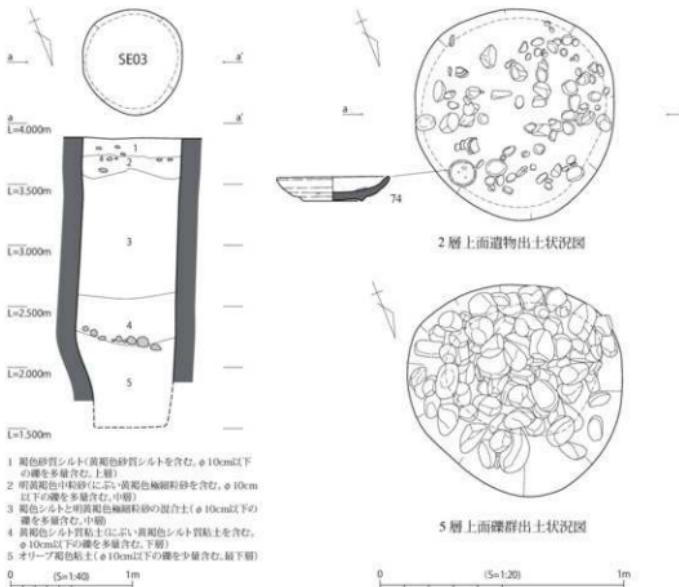


Fig. 46 IIc 区北部 SE03 遺構図

礫を充填するようである。その上部に堆積する層はやや小ぶりな礫を含む粘土層（8層）で、比較的均一な堆積が認められた。その上部の層は基盤層に起因する黄褐色粘土をやや含む粘土層（7層）のため、井戸壁面崩落土の可能性がある。その上に比較的均一な堆積が認められ（4～6層）、最終的には人為的に埋め戻された（1～3層）ものと考えられる。このように下層からこぶし大礫が多量に出土し、充填するような状況から、井戸の機能停止後に、礫を充填した可能性が考えられる。その後はある程度井戸として機能していた可能性、あるいは段階を分けて埋め戻している可能性も考えられる。さらに井戸壁面の一部が崩落しており、放置された後は粘土が厚く堆積することから、徐々に埋没していくものと推定される。埋土の上層は、黄褐色粘土質シルトがブロック状に含まれる層が認められるため、最終的には完全に埋め戻されたものと考えられる。

遺構からは各層より多くの遺物が出土している。図示したとおり、最下層からやや浮いた状態で17世紀前半と考えられる土師器の茶釜（93）が逆位置で出土した¹⁰⁾。また下層からは瀬戸美濃産の天目碗や初山産の大皿などが出土しており、これらの出土遺物は大窯3段階前半の年代が考えられ、16世紀後半から17世紀前半頃には井戸としての利用を終えたものと考えられる。

SE03 (Fig. 46) IIc 区北部の南東隅で検出した井戸である。調査当初は円形土坑であると想定して調査を行ったが、掘り込みが垂直になることや、深さが通常の土坑よりも深くなつたため、井戸であるという認識に至つた。遺構の規模は東西 1.73 m、南北 1.70 m でほぼ正円を呈する。断面形は箱形を呈し、ほぼ垂直になる。

遺構埋土は大別して上～最下層に区分され、上層からは図示したとおり、こぶし大までの礫と破

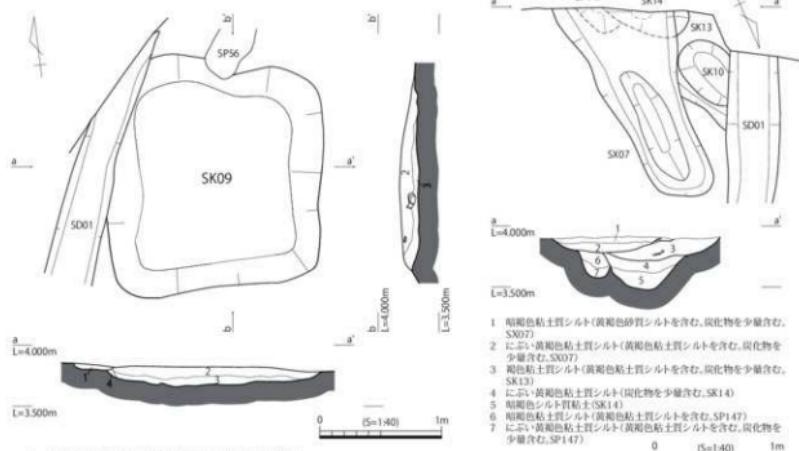


Fig.47 IIb 区 SK09 遺構図

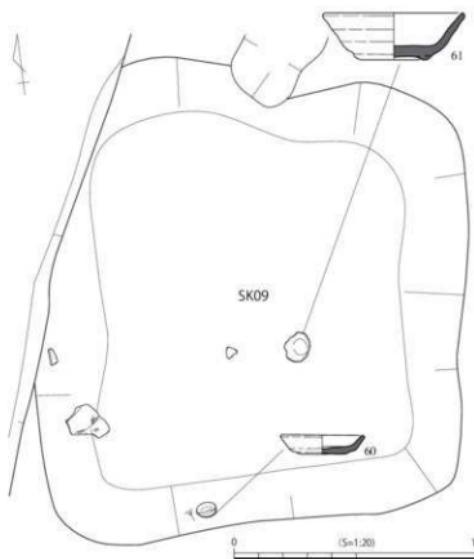


Fig.48 IIb 区 SK09 遺物出土状況図

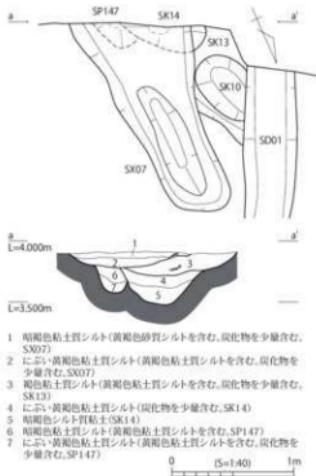


Fig.49 IIc 区北部 遺構図 (1)

損した土器が出土した。中層は2層が明黄褐色中粒砂、3層が褐色シルトと明黄褐色極細粒砂の混合土が堆積し、こぶし大礫を多量に含む。出土遺物は非常に希薄であった。下層は4層の下部にこぶし大礫を充填する層を検出した。この層からも遺物がほとんど遺物が出土しなかった。この礫を除去すると粘土層(5層)が認められたが、調査範囲が狭くなつたため安全を考慮し、遺構底面までの掘削を断念した。この面から下にピンボールで探ると、深さ2.35mの位置で硬化する面に達するため、一応この面を底面として認識した。なお5層から湧水は認められなかった。

遺構からは上層及び最下層から遺物が出土している。上層からは瀬戸美濃産や初山産の天目碗や、瀬戸美濃産の志野丸皿の完形品、最下層からは瀬戸美濃産の輪禿皿や擂鉢、瀬戸美濃産の壺などが出土している。また最下層か

らは碗形溝も認められた。これらの出土遺物から、遺構の埋没は登窓第1段階第2小期 17世紀前半の年代が考えられる。

iii) 土坑

SK09 (Fig. 47・48) II b 区北端部、II a 区との境界付近で検出した方形土坑である。IV層下面から掘り込まれる遺構で、遺構の規模は東西 1.77 m、南北 2.01 m を測り、隅丸方形を呈する。遺構の南側は近代以降に擾乱されている。また遺構の西側は先述の SD01 に、北側は SP56 に切られる。遺構の断面形は皿状を呈し、底面は平坦である。遺構埋土はレンズ状に堆積し、Fig.48 に示すように遺構の底面から遺物が密着して出土している。遺構の立ち上がりも竪穴建物のような立ち上がりを示さず、遺構の底面からは柱穴などの関連する遺構などは認められなかった。このため遺構の性格を明らかにできなかった。出土遺物は山茶碗の碗（61）や小皿（60）、渥美産の甕（62）などが認められたことから、13世紀代の年代が考えられる。

SK13・SK14・SP147・SX07 (Fig. 49) II c 区北部の南壁際で検出した遺構群である。土坑が 2 基と小穴が 1 基、不明遺構が 1 基切り合う。切り合い関係が非常に複雑で、SP147 → SK14 → SK13 → SX07 の順に埋没する。

SP147 は遺構の半分以上が調査区外にあるため、平面形は不明であるが、円形あるいは楕円形を呈するものと考えられる。断面形は U 字形を呈するが、柱痕跡などは認められない。埋土から遺物が少量出土しているが、遺構の詳細な年代は不明である。

SK14 も遺構の半分以上が調査区外にあるため、平面形は不明であるが、SP147 と同様円形あるいは楕円形を呈するものと考えられる。断面形は U 字形を呈する。埋土から遺物が少量出土しているが、遺構の詳細な年代は不明である。

SK13 は SK10 や SD01 にも切られており、遺構の形状は不明である。断面形は皿状を呈する。埋土から須恵器杯 H 身の細片や、墨書の認められる山茶碗小皿（69）や、伊勢型鍋（70）が出土している。このため SK13 は鎌倉時代以降の年代が考えられる。

SX07 は浅い溝状の平面形を呈するが、ほかの遺構と同様調査区外に延びる。遺構の南部で一段低くなるが、これは別遺構の可能性も考えられる。埋土から渥美産甕の破片が出土しているが、遺構の詳細な年代は不明である。

iv) 小穴

SP07・SP08 (Fig.50) SP07 は II a 区の北部で検出した小穴で SP08 を切る遺構である。遺構は 0.33 × 0.34 m の円形小穴で、断面形は U 字形を呈する。柱痕跡は認められなかつたが、遺構の底面付近からこぶし大礫が 2 個認められ、柱の根固めである可能性が考えられる。断面観察からは柱は抜き取られた可能性が考えられる。2 個のこぶし大礫のうち一つは砥石（55）であった。

SP08 は南北 0.23 m をかかる円形小穴で、遺構の東側を SP07 に切られる。このため残りが良くなつたが、遺構底面から碗形溝（56）が出土した。SP07 やほかの遺構でも認められる根石のように、平坦面を上にして配置されていた。

ともに柱穴の可能性が考えられる遺構であり、建物を構成する可能性が想定されるが、調査区内で組み合う遺構は不明である。ほかに年代の判明する遺物が出土しなかつたため、遺構の年代は不明である。

SP10 (Fig. 50) II a 区北部で検出した小穴で、SP08 の南西 1.6 m に位置する。平面形は不整円形を呈し、断面形は U 字形を呈する。遺構から遺物が出土しなかつたため遺構の年代は不明である。

SP13・SP39 (Fig. 50) SP13 は、II a 区の北部で検出した小穴で SP39 を切る。SP07 の南 1.6 m に

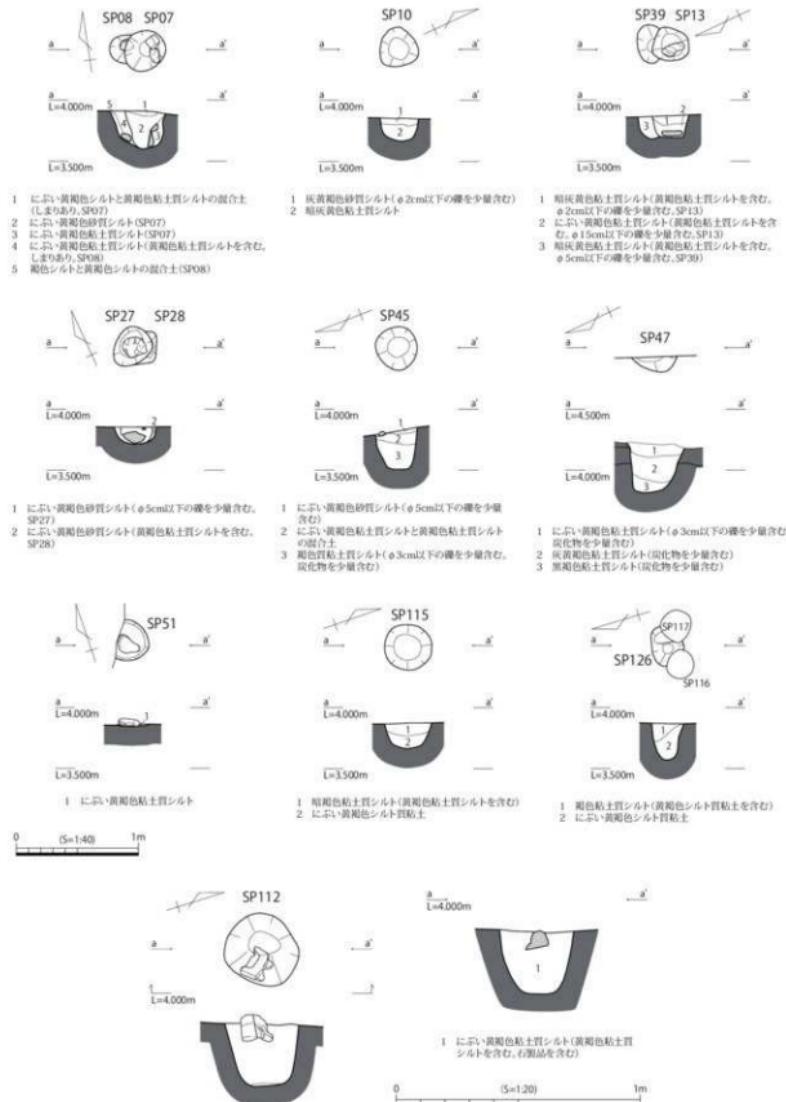


Fig.50 II-a・II-b区 遺構図 (1)

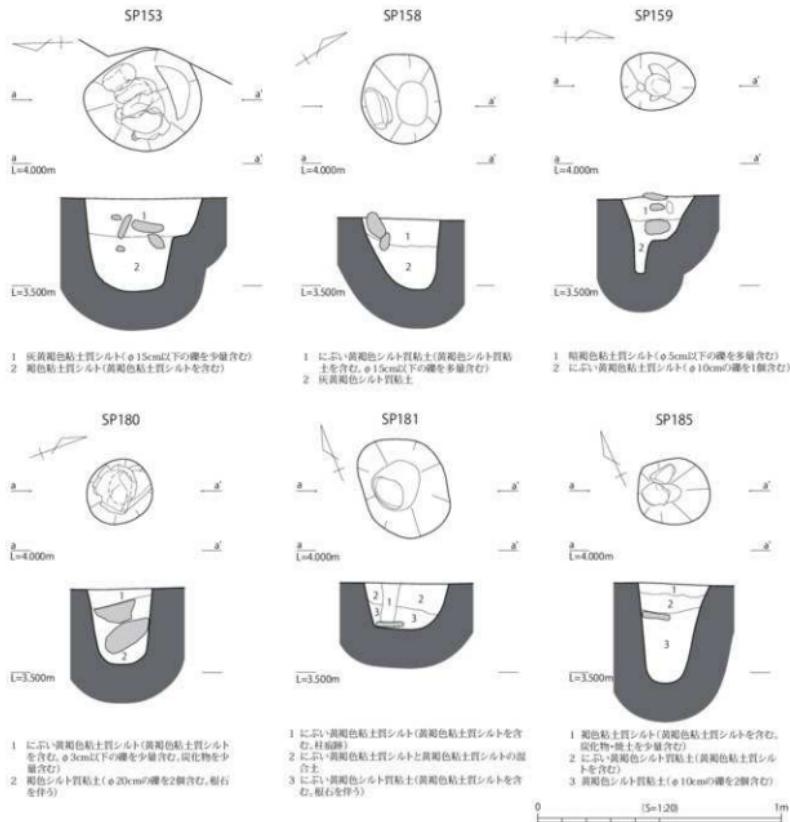


Fig.51 IIc 区南部 遺構図 (2)

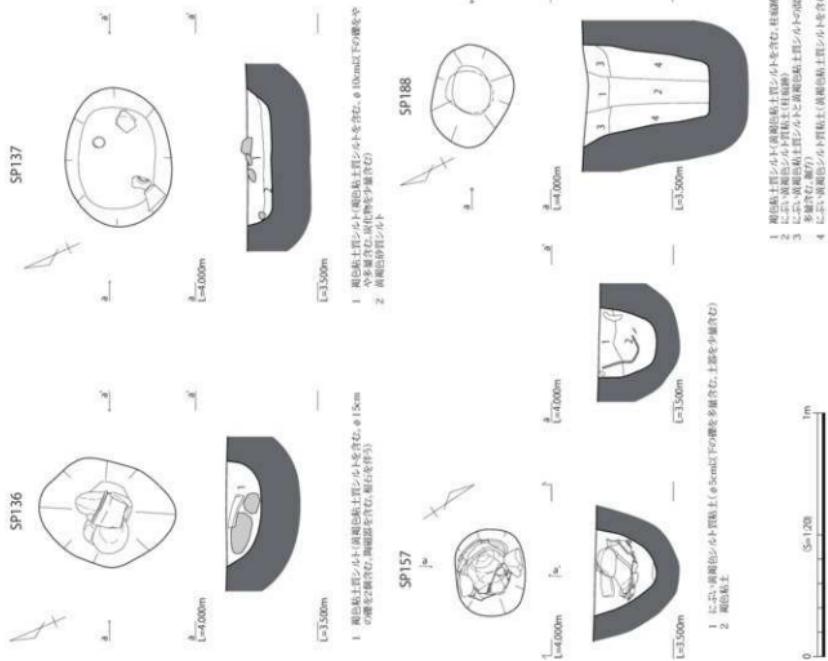
位置する。遺構の平面形は円形を呈し、直径 3.0×2.8 m、深さ 0.18 m を測る。遺構の断面形は U 字形を呈する。埋土から遺物が出土しているが、小片のため遺構の年代は不明である。

SP39 は SP13 に切られる小穴で、平面形は梢円形、断面形は U 字形を呈する。埋土から遺物が出土していないため、遺構の年代は不明である。

SP27・SP28 (Fig. 50) II a 区中央部北西寄りで検出した小穴で、SP27 が SP28 を切る。SP27 は平面形が不整円形を呈し、断面形は U 字形を呈する。遺構の底面は平坦で、根石とみられる礫が認められた。埋土から遺物が出土しているが、小片のため遺構の年代は不明である。

SP45 (Fig. 50) II a 区南部で検出した小穴で、方形土坑 SK09 の北東 2 m に位置する。遺構の平面形は円形を呈し、 0.36×0.34 m を測る。遺構の断面形は U 字形を呈する。埋土から遺物が出土しているが、小片のため遺構の年代は不明である。

SP47 (Fig. 50) II a 区の中央部や北寄りで検出した小穴で、遺構の約半分が調査できた。IV 層



上面から掘り込まれる遺構で、平面形は円形を呈するものと考えられる。規模は南北 0.37 m、東西 0.12 m 以上、深さ 0.41 m を測り、遺構の断面形は U 字形を呈する。遺構から遺物が出土しなかったため遺構の年代は不明であるが、IV 層より掘り込まれており、戦国時代以降に属するものと考えられる。

SP51 (Fig. 50) II a 区の中央部西寄りで検出した小穴で、遺構の底面が平らな礫が認められた。埋土から遺物が出土しているが、小片のため年代は不明である。

SP65 (Fig. 52) II e 区の中央部で検出した小穴で、西側に SP64 と接するが切り合ひ関係は不明である。平面形は円形を呈し、遺構の東側に狭い段を有する。断面形は V 字形を呈する。遺構は土層に類似する層がプロック状に認められたため、IV 層上面から掘り込まれた遺構であると推定される。埋土に

から遺物が出土しているが、小片のため遺構の年代は不明である。

SP67 (Fig. 53) II e 区の南西部で検出した小穴で、全体の約半分が調査区外になる。IV層下面から掘り込まれる小穴で、平面形は楕円形を呈するものとみられ、断面形は V 字形を呈する。埋土は SP65 と同様しまわりがなく、基盤層に起因する黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む。遺構から遺物が出土しなかったため遺構の年代は不明である。

SP112 (Fig. 50) II b 区南西部で検出した小穴で、平面形は円形、断面形は U 字形を呈する。遺構の規模は 0.30×0.28 m、深さ 0.24 m を測る。埋土の上層部から用途不明の石製品（63）が出土した。ほかに年代の判明する遺物が出土していないため、詳細な年代は不明であるが、埋土の特徴は IV 層に類似するため、IV 層上面から掘り込まれたものと推定される。

SP115 (Fig. 50) II b 区南西部で検出した小穴で、東側の SP125 を切る。遺構の平面形は円形、断面形は U 字形を呈し、遺構の規模は 0.38×0.37 m、深さ 0.19 m を測る。埋土の特徴は IV 層に類似するが、基盤層に起因する黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む。埋土から山茶碗が出土したが、小片であり遺構の詳細な年代は不明である。

SP126 (Fig. 50) II b 区南端部で検出した小穴で、遺構の西側を SP116 に、東側を SP117 に切られる。遺構の平面形は円形、断面形は U 字形を呈する。遺構の規模は 0.32×0.26 m、深さ 0.30 m を測る。遺構から遺物が出土しなかったため遺構の年代は不明である。

SP136 (Fig. 52) II c 区南部の北部壁際中央部で検出した小穴である。平面形は楕円形、断面形は U 字形を呈する。小穴の中央部に 10 ~ 20cm 大の礫を置き、その上に常滑産の甕（108）が外面を上にして認められた。削平を受けているため残りが悪く、断面観察から柱痕跡は認められなかつたが、柱の根固めとして土器を転用した可能性が考えられる。出土した常滑産の甕から、12 型式江戸時代前期の年代が考えられる。

SP137 (Fig. 52) II c 区南部の中央部やや北寄り、SD02 のほぼ中央部で検出した小穴で、SD02 を切る。平面形は楕円形、断面形は南側に狭い段をもつ、U 字形を呈する。遺構底面は平坦で、こぶし大礫とともにやや浮いた状態で、陶磁器の破片が出土した。これらの出土状況から廃棄されたものと考えられ、美濃産の鉢（94）や肥前産磁器の碗（95）などから江戸時代中期ごろの年代が考えられる。

SP153 (Fig. 51) II c 区南部の南東部東壁際で検出した小穴で SD04 を切る。遺構の平面形は楕円形、断面形は U 字形を呈し南側に段をもつ。遺構の底面はほぼ平坦で、中央部にやや浮いた状態で 10 ~ 20cm 大の礫を 2 段に重ねて並べる状況が認められた。断面観察からは、礫の上面が遺構の南側の狭い段の上面に一致するため、段の上面まで一旦土を入れ平坦面をつくり、この段に揃えるように礫を配置した可能性が高い。断面観察から柱痕跡は認められなかつたが、礫の上面はおおむね平坦であり、根石の可能性が考えられる。SD04 を切ることから、遺構の年代は鎌倉時代以降と考えられる。輸入陶磁器の青磁碗小片（101）が 1 点出土しているが、ほかに出土遺物がないため詳細な年代は不明である。

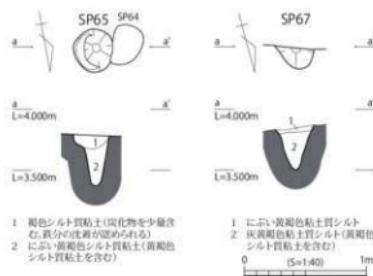


Fig.53 IIe 区 遺構図

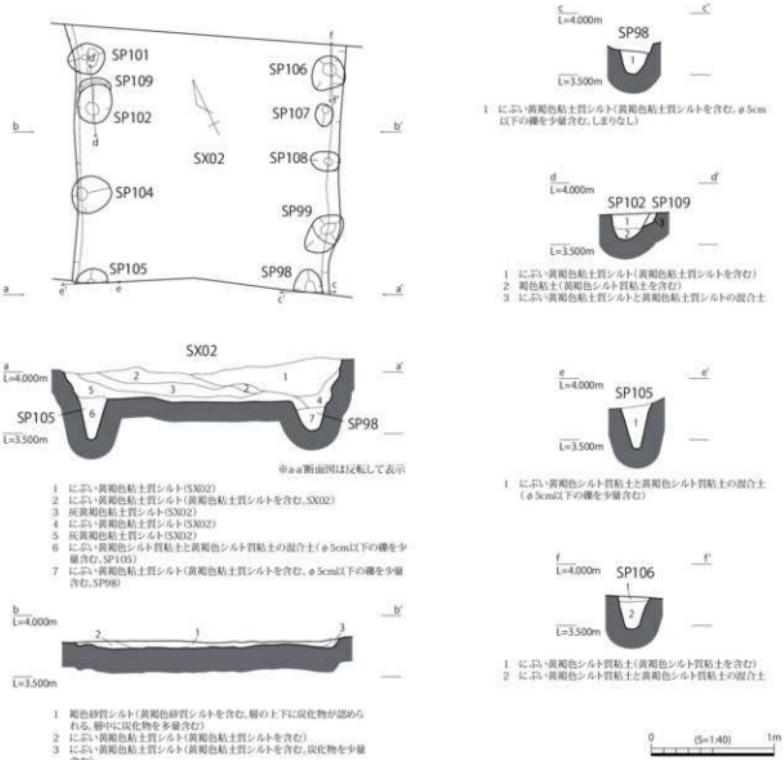


Fig.54 II d 区 SX02 遺構図

SP157 (Fig. 52) II c 区南部の、南西部で検出した小穴で、SD04 の北 0.6 m に位置する。遺構の平面形は楕円形、断面形は U 字形を呈する。遺構からは底面からやや高い位置で Fig.52 (図版 21-4・5) のような状態で遺物が出土した。破損した黄瀬戸の大型鉢 (97) を正位置で据え、その上に体部より上位を欠く常滑産の甕底部 (99) を斜位に置く。鉢の脇には瀬戸美濃産の丸皿 (98) を、常滑産の甕の両脇にこぶし大礫が 2 個認められた。甕の内部からは頗著な遺物などは認められなかった。

出土状況からは単純に遺物を廃棄したような状況を示すものではなく、意図的な配置をしているものと考えられるが、具体的にどのような行為を想定すべきかは不明である。遺構の年代は、出土遺物から登窯第 1 段階第 2 小期に属し、17 世紀前半の年代が考えられる。

SP158 (Fig. 51) SP157 の南 0.1 m に位置する小穴である。遺構の平面形は楕円形、断面形は U 字形を呈する。断面観察で柱痕跡は認められなかったが、遺構の南壁際に、こぶし大礫が 2 個浮いた状態で認められた。根固めのために配置された可能性が考えられる。埋土から遺物が出土しているが、小片のため遺構の年代は不明である。

SP159 (Fig. 51) II c 区南部の中央部やや東で検出した小穴で SD04 を切る。SE02 の東 0.1 m に位置する。平面形は楕円形、断面形は U 字形を呈する。遺構の北側に段を有する。断面観察で柱痕跡は認められなかつたが、段の高さまで土を入れて平坦面をつくり、その上にこぶし大礫を 1 個据えている。礫は上面が平坦であり、根石として使用されたものと考えられる。埋土から遺物が出土しているが、小片のため遺構の年代は不明である。

SP180 (Fig. 51) II c 区南部の北西部で検出した小穴で、SD02 の北 0.5 m に位置する。平面形は円形、断面形は U 字形を呈する。遺構の底面からやや浮いた状態で、10 ~ 20 cm 大の礫が 2 個重なって認められた。断面観察で柱痕跡は認められなかつたが、上有る礫の上面が平坦であり、根石として使用された可能性が考えられる。埋土から遺物が出土しているが、小片のため遺構の年代は不明である。

SP181 (Fig. 51) SP180 の東 0.6 m に位置する小穴で、平面形は楕円形、断面形は U 字形を呈する。断面観察によると柱痕跡が確認でき、その直下に薄い板石が据えられていたため、根石として使用されたものと考えられる。当初、柱痕跡は平面形が長方形を呈するように見えたため板状の柱を想定していたが、断ち割った結果それは誤りで、通常の円形の柱であると考えられる。柱の直径は 8 cm を測る。埋土から遺物が出土しているが、小片のため遺構の年代は不明である。

SP185 (Fig. 51) II c 区南部の北部中央付近で検出した小穴で SD06 を切る。平面形は円形を呈し、断面形は U 字形を呈する。遺構の深さは 0.41 m を測る。遺構の上面からおよそ 12 cm 下で、15 cm ほどの大きさの礫が 2 個認められた。断面観察からは柱痕跡は認められなかつたが、出土状況からこの礫は、柱の根固めに用いられた可能性が考えられる。なおこのうちの 1 個は砥石 (109) であった。遺構からはほかに遺物が出土しなかつたため、遺構の詳細な年代は不明である。

SP188 (Fig. 52) II c 区南部の北西部で検出した小穴で、SP180 の北 0.8 m に位置する。平面形は東西方向に長軸をもつ楕円形、断面形は U 字形を呈する。小穴の中央部に柱痕跡が認められた。柱の直径は 12 cm を測る。この小穴に組み合う遺構は不明である。埋土から遺物が出土しているが、小片のため遺構の年代は不明である。

v) その他の遺構

SX02 (Fig. 54) II d 区中央部で検出した遺構で、IV 層上面から掘り込まれている。調査できた範囲が狭く遺構の全容は不明であるが、調査区の北と南へ連続するようである。南側へは II e 区内でこの遺構の続きとみられるものがみつかなかつたため、II e 区までの範囲に収まるものとみられる。北側についても、II c 区南部でこの遺構の続きとみられるものがみつかなかつたため、II c 区南部までの範囲に収まるものとみられる。調査区内で検出できた規模は東西 2.15 m、南北 2.0 m 以上、検出面から遺構底面までの深さが 0.35 m を測る。遺構の平面形は方形あるいは長方形を呈すると考えられ、断面形は箱形を呈する。遺構の底面は平坦で、遺構の両辺に沿って小穴（西側に SP101・SP102・SP104・SP105、東側に SP98・SP99・SP106・SP107・SP108）が並ぶ。小穴は柱筋が通らないが、SX02 に沿って配置されることから、有機的な関連が存在することは明らかである。それぞれの小穴埋土の特徴としては、にぶい黄褐色シルト質粘土と黄褐色シルト質粘土の混合土が認められること



Fig.55 II d 区 SX03 遺構図

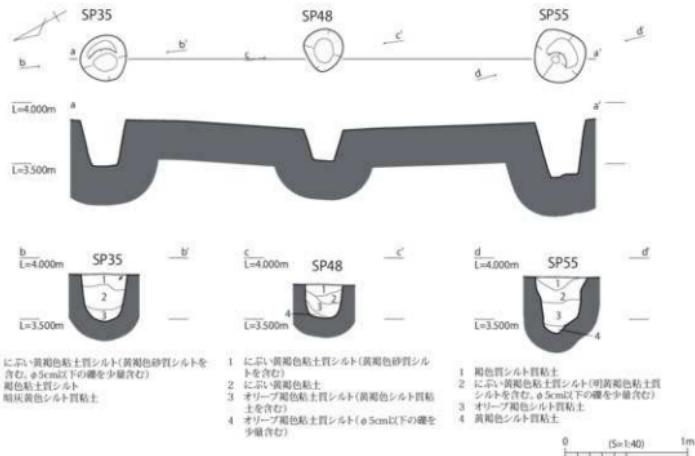


Fig. 56 II a 区 SA01 造構図

から、人為的な埋め戻しを想定できるものである。これに対して SX02 の埋土は、基本的には自然堆積と考えられることから、この造構が機能していた時には小穴は埋まっており、SX02 は埋まっている可能性が高い。調査できた範囲が狭いが、造構の主軸は南北を指向しており、N-25°E で、やや東に偏する。

SX02 及び伴う小穴埋土から遺物が出土しているが、小片のため造構の年代は不明である。造構の性格が不明ながら、近世東海道と方位を捕えることから、これを意識して構築された可能性が高い。

SX03 (Fig. 55) II d 区東壁付近で検出した落ち込みである。造構の大半が調査区外となるため明確ではないが、円形あるいは楕円形を呈する土坑であると考えられる。埋土の特徴から、基盤層の疊層に類似する層を用いて人為的に埋め戻されたものと考えられるが、東壁を観察すると、この造構の埋め戻しと連動して上面にも整地（Ⅲ層）を行っていることが明らかである。すなわちこの造構も一連の整地に伴い、埋め戻されたものと考えられる。造構からは遺物が出土しなかつたため、詳細な年代は不明であるが、IV 層を切っていることに加え、この造構の直上に近世の整地土層であるⅢ層が認められるため、この造構の埋没もⅢ層の形成期に属する可能性が高い。

SA01 (SP35・SP48・SP55) (Fig. 56) II a 区南東部で検出した柱列で、北東—南西方向に 2 間分の小穴が認められた。基盤層上で検出したが、掘り込み面は不明である。埋土の特徴からは、IV 層下面で検出した造構埋土と類似するため、戦国時代以前にまで遡る可能性も考えられる。柱列は主軸を N29°E にとり、柱間寸法は SP35 - SP48 間が 1.80 m、SP48 - SP55 間が 1.85 m を測る。柱列を構成する小穴はいずれも円形を呈し、断面形は U 字形を呈する。小穴底面の高さはそれぞれ SP35 が 3.48 m、SP48 が 3.51 m、SP55 が 3.38 m を測り、SP55 がやや低い。断面観察の結果、それぞれの小穴からは柱痕跡ならびに根石などが認められなかった。SP55 の埋土から土師質の獸脚（54）が出土している。ほかの小穴から遺物は出土していないため、造構の詳細な年代は不明である。

SA02 (SP184・SP183・SP165・SP161・SP155) (Fig. 57) II c 区南部の中央部で検出した柱列で、南北に並ぶ。調査区内で 4 間分確認した。調査区外へさらに延びる可能性が考えられる。柱間寸法

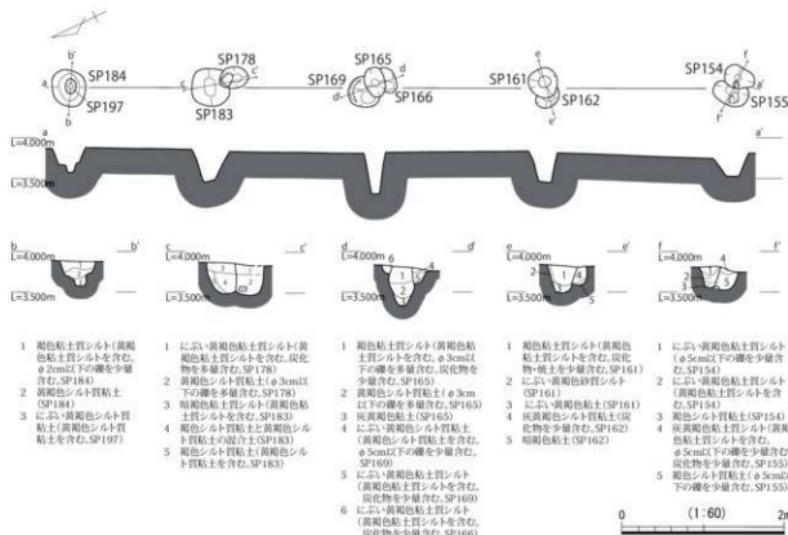


Fig.57 IIc 区南部 SA02 遺構図

は SP155 – SP161 間が 2.3 m、SP161 – SP165 間が 2.1 m、SP165 – SP183 間が 2.05 m、SP183 – SP184 が 1.7 m となり等間隔ではないが、およそ 2 m 前後となる。また、小穴底面の高さは、Fig.57 に示すとおり不揃いである。それぞれの小穴から年代の判明する遺物が出土していないが、南から 2 基目の SP161 が、16 世紀後半から 17 世紀前半にかけての井戸である SE02 を切っており、このことから柱列は、17 世紀前半以降にまで降る可能性が高いものと推定される。柱列は主軸を N-26°E にとり、近世東海道に主軸を描えている可能性が高い。これに伴う遺構については、並行する柱列などが認められなかったため不明である。

(3) 遺 物 (Fig. 58 ~ 64)

51 ~ 56 は II a 区出土遺物である。51・52 は IV 層出土の土師器かわらけ。ロクロ成形で底部は回転糸切による。51 は器壁が厚い。52 は器高がやや深めのかわらけで、底部の回転糸切痕が顕著である。

53 は V 層上面出土の土師器高杯脚部の破片である。摩耗が著しく調整は不明である。短い脚柱部は中実で、脚端部と杯部を欠損する。

54 は SP55 出土の歯脚である。取り付く本体部を欠くため、本来の形状は不明である。脚端部でややくびれて外側へ踏ん張る。土師質で高さ 4.3 cm を測る。

55 は SP07 出土の砥石である。根石として転用されていた。砂岩製で両小口を欠損する。各面とも使用痕が顕著である。幅 9.3 cm を測る。

56 は SP08 出土の碗形鉢である。根石として転用されていた。周辺で何らかの鍛冶がなされていたものと考えられる。

57 ~ 63 は II b 区出土遺物である。57 は III 層出土の瀬戸美濃産陶器の鉄絵折縁皿である。口縁部

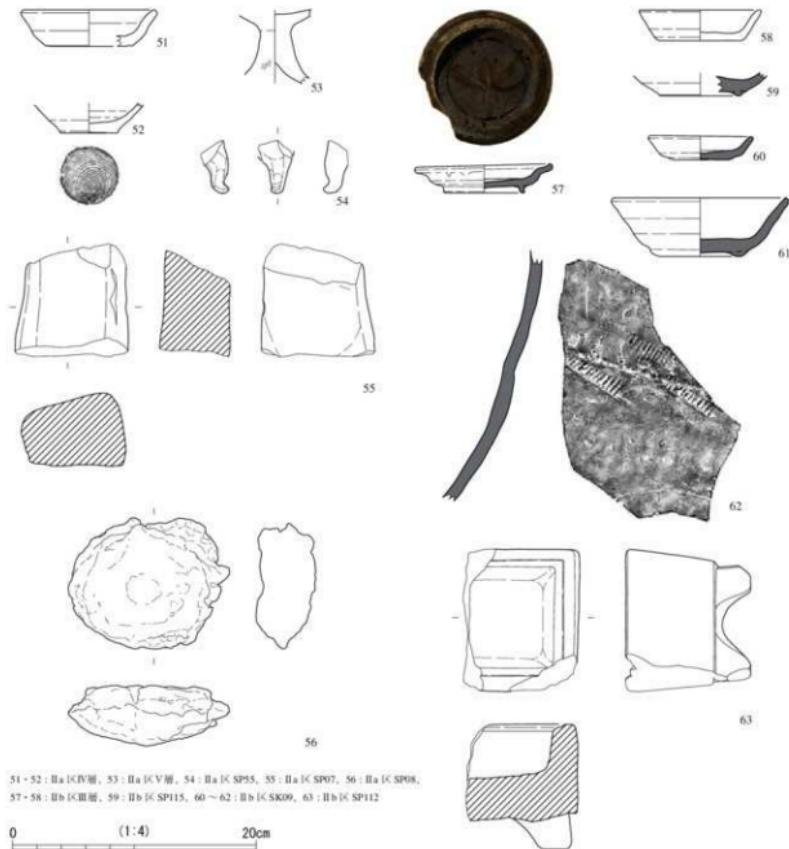
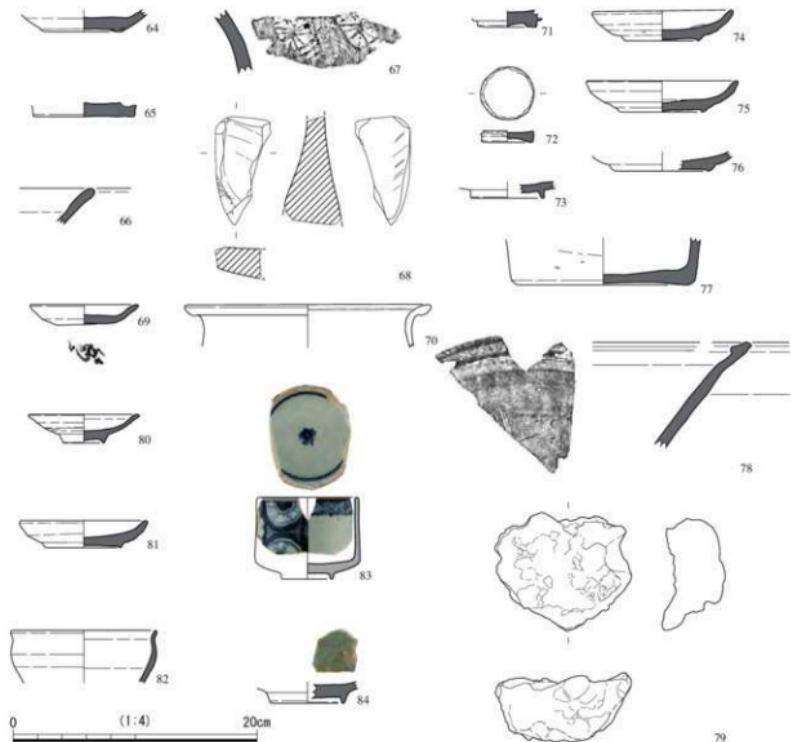


Fig.58 IIa・IIb 区 出土遺物

をやや欠損するものの、残りが良い。灰オリーブ色の釉を内面と口縁部外面にかける。見込部に草花文が認められる。外面と見込部に煤が付着することから、灯明皿として使用された可能性が高い。口径 11.0cm を測る。登窯第 1 段階第 3 小期に属する。58 は III 層出土の土器器かわらけである。ロクロ成形で、底部裏面に回転糸切痕を残す。口径 9.8cm を測る小皿。

59 は SP115 出土の山茶碗の碗である。底部の破片で、厚みのある底部に断面三角形の低い高台を貼り付ける。7 型式 13 世紀中葉に属するものと考えられる。

60 ~ 62 は SK09 出土遺物である。60 は完形の山茶碗小皿。口径 8.4cm を測る。粗雑なつくりで、口縁部に自然釉がかかる。61 は山茶碗の碗である。59 と同様厚みのある底部に断面三角形の低い高台を貼り付ける。口縁部は斜外方に立ち上がり、端部を丸く收める。やや青みがかった色調で、焼



64～68：SE01、69・70：SK13、71～79：SE03、80～83：田畠、84：IV層

Fig.59 IIc 区北部 出土遺物

成も甘い。口径 14.1cm を測る。59・60 とともに 7 型式 13 世紀中葉に属するものと考えられる。

62 は渥美産の甕体部である。器壁が厚い大型の甕体部で、外面に平行タタキが連続して認められる。

63 は SP112 出土の石製容器である。およそ半分を欠損するものとみられる。容器は方形あるいは長方形を呈するものと考えられ、幅が 11.7cm を測る。箱形に内部を削り出し、内部底面はやや傾斜をもつものの平坦につくる。容器の立ち上がりは斜上方へ開き気味になり、上端部には内側に幅 0.4cm の浅い段を設け、印籠造とする。このため蓋を伴う可能性がある。容器の下部には脚部を造り出し、現状で 2 か所残存する。本来 4 足であった可能性が高い。容器の内法は幅 8.3cm、長さ 7.5cm 以上、深さ 4.4cm を測る。なお全体に被熱しており、煤が付着する。

64～68 は IIc 区北部の SE01 出土遺物である。64 は山茶碗の碗底部で、厚みのある底部に断面三角形の低い高台を貼り付ける。7 型式 13 世紀中葉に属するものと考えられる。65 は瀬戸美濃産の瓶子底部の破片である。平底底部のみ残存する。底径 8.2cm を測る。古瀬戸中期 14 世紀代の所産。66 は山茶碗の片口鉢口縁部であると考えられる。小片のため、法量などは不明である。67 は渥美産甕



65～87 : SD04, 88～93 : SE02, 94～96 : SP137, 97～99 : SP157

Fig.60 IIc区南部 出土遺物 (1)

の体部である。外面にタタキが認められる。68は砥石である。破損するが使用痕が顕著である。現存長8.9cmを測る。

69・70はIIc区北部のSK13出土遺物である。69は山茶碗の小皿である。口径8.8cmを測り完形である。底部裏面に墨書きが認められる。漢字のような文字が認められるが判読できない。7型式13世紀中葉に属するものと考えられる。70は伊勢型鍋の破片である。頸部は強く外反し、口縁端部は折り返して肥厚したのちに丸く收める。外面に煤が付着する。小片のため確定できないが、口径20.2cmを測る小型の鍋であると考えられる。

71～79はII c区北部のSE03出土遺物である。71～76は上層、77～79は最下層出土である。71は初山産の天目碗底部である。底径5.5cmを測り、大窯3段階に属する。72は瀬戸美濃産の天目碗底部である。破断面を打ち欠いており、加工円盤に転用したものと考えられる。底径4.4cmを測る。古瀬戸後期IV期古段階に属する。73は瀬戸美濃産の輪禿皿底部。灰白色の釉がかかる。登窯第1段階第2小期に属する。74～76は瀬戸美濃産の志野丸皿。74は完形で口径11.4cmを測る。いずれも登窯第1段階第2小期に属する。77は瀬戸産の壺底部である。平底の底部から体部は垂直気味に立ち上がる。78は瀬戸美濃産の擂鉢口縁部の小片で、大窯3段階後半に属する。79は碗形岸である。

80～83はII c区北部のIII層、84はIV層出土遺物である。80は瀬戸美濃産の小皿。内外面に煤が付着するため、灯明皿として使用されたものと考えられる。江戸中期の所産。81は瀬戸美濃産の志野丸皿である。口縁部の一部と底部に煤が付着するため、灯明皿として使用されたと考えられる。完形品で口径10.3cmを測る。登窯第1段階第2小期に属する。82は瀬戸美濃産の天目碗口縁部の小片である。登窯第1段階第2小期に属する。83は肥前産磁器の半筒碗である。底部が完存し、見込部に手書きの五弁花印判が認められる。18世紀後半と考えられる。84は輸入磁器の青磁碗底部である。底部裏面には釉がかかる。

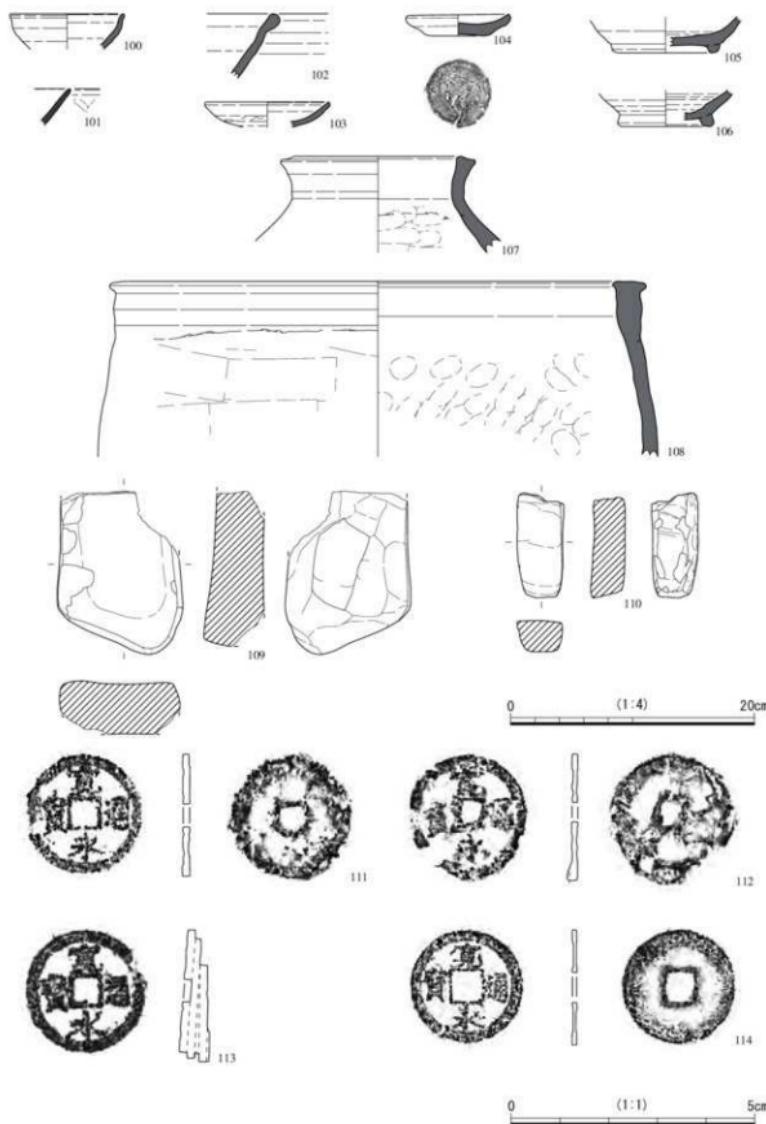
85～87はII c区南部SD04B出土遺物である。85は山茶碗の碗底部である。7型式13世紀中葉に属するものと考えられる。86は渥美産の壺肩部の破片である。肩部外面に連弁文が線刻される。87は產地不明陶器の壺底部であると考えられる。器壁が厚いことから大型の製品である可能性が高い。

88～93はII c区南部SE02出土遺物である。88は瀬戸美濃産の天目碗で大窯3段階前半と考えられる。胎土は浅黄橙色を呈する。89は瀬戸美濃産の茶入。小片のため詳細は不明であるが、江戸時代の所産と考えられる。90は瀬戸美濃産の丸皿あるいは端反皿であると考えられる。底部裏面に付着物が認められる。大窯1～2段階に属するものと考えられる。91は初山産の大皿。内湾する体部から、口縁部は水平方向に外反して端部は丸く收める。胎土は灰色を呈する。大窯3段階と考えられる。92は志戸呂産の鉢と考えられる。胎土は灰白色を呈し、見込部に煤が付着する。93は土師器茶釜である。底部を欠くが残りが良く、口径13.1cmを測る。肩の張る体部に垂直に立ち上がる口縁部を有する。肩部には板状粘土を横位に貼り付け外耳とし、口縁部に直交する位置に円孔を貫通させる。外耳はほぼ垂直に貼り付け、五角形を呈する。体部に羽が付かない羽無釜で、17世紀前半と考えられる。

94～96はII c区南部SP137出土遺物である。94は美濃産の鉢である。幅広の高台を貼り付ける。釉は灰オリーブ色を呈し、高台に釉がかかる。江戸時代中期と考えられる。95は肥前産磁器の碗である。全面に施釉されるが見込部は砂目、高台疊付は釉剥ぎである。96は瀬戸美濃産の天目碗底部である。破断面の打ち欠きが認められるため、加工円盤に転用されたものと考えられる。大窯3段階前半と考えられる。

97～99はII c区南部SP157出土遺物である。97は瀬戸美濃産陶器の黄瀬戸鉢である。全面に施釉され、淡黄色の釉を基調とし濃緑色の釉で文様を描く。見込み部には中央に菊花文が認められ、囲線を7重に巡らす。体部内面には波状文を1段施す。残りが良くて口径29.0cmを測る。登窯第1段階第2小期と考えられる。98は瀬戸美濃産の折縁皿である。全面に施釉され、見込部に菊花文が認められる。口径10.2cmを測る。登窯第1段階第2小期と考えられる。99は常滑産の壺底部で、体部より上部を欠損する。平底の底部から斜上方へ立ち上がる。16世紀の年代が考えられる。

100はII c区南部SP176出土遺物で、初山産の天目碗である。胎土は灰色、光沢のない赤褐色の釉がかかる。大窯3段階と考えられる。101はII c区南部SP153出土遺物で、龍泉窯系青磁碗の口



100 : SP176, 101 : SP153, 102 : SP164, 103 ~ 104 ~ 105 : 盆器, 106 : V 壺上面,
107 ~ 108 : SP136, 109 : SP185, 110 : SP178, 111 ~ 113 : SK25, 114 : II 嵌

Fig.61 IIc 区南部 出土遺物 (2)

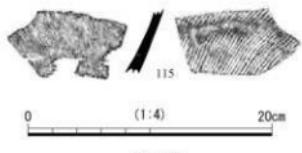


Fig.62 II d区 出土遺物

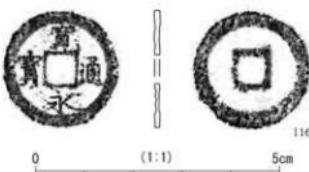


Fig.63 II e区 出土遺物（1）

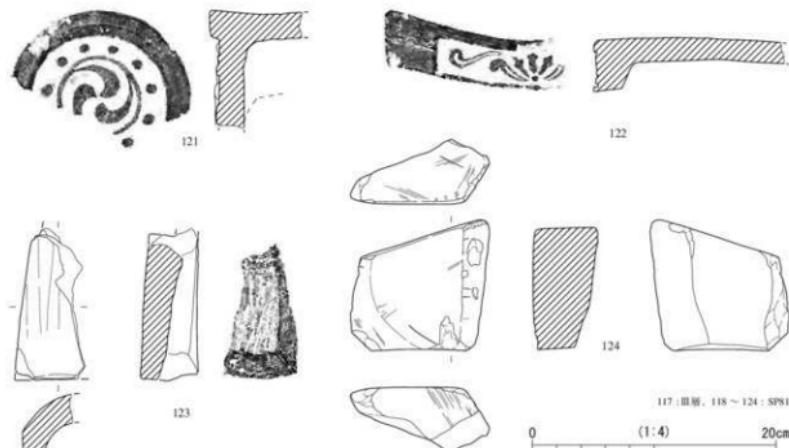
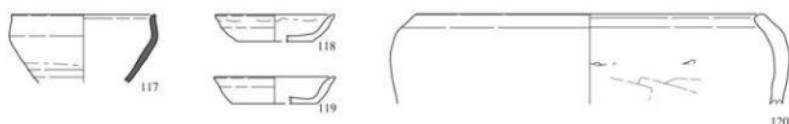


Fig.64 II e区 出土遺物（2）

縁部小片である。体部外面に錦蓮弁文がわずかに認められる。102はII c区南部SP161出土遺物で、山茶碗の片口鉢であると考えられる。103～105はII c区南部III層出土遺物である。103は志戸呂産の灯明皿で、江戸時代後期の所産であると考えられる。104は瀬戸美濃産の皿で内面に灰白色の釉がかかる。外面に煤が付着する。江戸時代後期の所産であると考えられる。105は山茶碗の碗底部である。5型式13世紀初頭の所産と考えられる。106はII c区南部V層上面出土遺物で、灰釉陶器の壺の可能性がある。断面方形の高台を貼り付ける。底径7.4cmを測る。107・108はII c区南部SP136出土遺物で、107が常滑産の壺、108が甕である。ともに口縁部の破片で、107は暗赤褐色の釉がかかる。12型式江戸時代前期に属するものと考えられる。109・110は砥石である。109はII c区南部SP185、110はII c区南部SP178出土である。111～113はII c区南部SK25出土の銭貨である。いずれも寛永通宝で、

111は古寛永、112・113は新寛永である。113は3枚が溶着する。

114はII c区南部II層出土の寛永通宝である。最も鋳上りが良く、銭文も判読が容易である。新寛永であると考えられる。115はII d区II層出土の須恵器甕体部である。外面は縦位から斜位の平行タタキ、内面には同心円文の当て具痕が認められる。古墳時代後期と考えられる。116はII e区II層出土の寛永通宝である。新寛永であると考えられる。

117はII e区II層出土の瀬戸美濃産の天目碗である。登窯第2段階第5小期と考えられる。118～124はII e区SP81出土遺物である。118・119は土師器のかわらけである。ロクロ成形で底部は回転糸切痕を残す。118は口縁部内外に煤が付着するため、灯明皿として使用されたものと考えられる。120は土師質土器の鉢であると考えられる。口径28.2cmを測る大型品である。121は連珠左巻三巴文軒丸瓦である。巴と連珠の間に圓線をめぐらす。瓦当径は15.2cm、連珠数は推定で11個。122は軒平瓦で、中心飾りから2単位の均整唐草紋が表現されている。唐草紋は圓線を表現したもので、同様の模様は浜松城跡10次調査1トレンチから出土している⁽²⁾。123は道具瓦と考えられる。凹面には布目痕が認められる。玉縁が取り付くものと考えられる。124は砥石である。一部を欠損するが、使用痕跡が顕著である。

(4) 小 結

II区は今回の調査範囲においてほぼ中央部に位置する。埋設管などの存在から調査区を細分して設定せざるをえず、必ずしも満足のいく調査ができたとは言い難い。安全対策上、未調査部分を残さざるを得なかつた箇所も存在した。以下、II区の調査結果をまとめることとする。

II a区・II b区は今回の調査区の中で最大面積を調査できた調査区である。遺構密度としては希薄で、II a区では小穴が散見されるのみであった。II b区に近づくにつれ遺構密度が増し、II b区では方形土坑SK09やそれを切るSD01などが検出された。SK09は遺構底面が平坦な土坑で、竪穴建物のような平面形を呈するが、小穴や溝などの遺構がともなわず、調査では遺構の性格を決定できるものは得られなかった。遺構からは山茶碗の碗や小皿、渥美産の甕などが出土したため、13世紀代の遺構であると考えられる。

SD01はこれを切る遺構で、南北方向に直線的に延びる。遺構の北限は、II a区との境界付近で調査区外へ延びている可能性が考えられ、西側へ折れ曲がるものと推定される。一方南側は、II c区北部さらにはII c区南部にまで連続するようである。II c区南部のSD02の手前付近で浅くなり途切れる。上面が削平を受けている可能性もあるが、この付近で収束するのかあるいはSD02に繋がっていた可能性も考えられる。なお、SD02の南側にこの延長とみられる遺構はみつかっていない。本文中でも述べたが、II c区北部で検出した井戸SE01に集水する目的で掘削された可能性も考えられる。

II a区南部で柱列SA01を1条検出した。南北方向に2間分のみであり、調査範囲が狭く、組み合った遺構の存在を明らかにすることはできなかった。第2章2において、II a区中央部付近で地割の境界とみられる堆積が東西壁面において確認することができたと述べたが、これは現在も宅地の境界となっており、近代の地割が現在にまで踏襲されたことを示すものであろう。なお、この境界線付近は基盤層上で遺構がほとんどみつからず空閑地となっており、遺構の在り方からも境界線が存在したことを想起できよう。柱列SA01はこの境界線の南側に位置している。柱列SA01は北側へは延びず、東西方向に展開する建物の一部であった可能性も考えられる。周辺を調査する際には注意を要する。

II c区はII b区の南2mに位置し、未調査区を境に北部と南部に分断される。II c区北部では先述

の南北溝 SD01・SE01 のほかに、井戸 SE03 が認められた。調査範囲が狭く井戸底面までの調査ができなかつたが、井戸下層にこぶし大礫を充填する層を検出した。このこぶし大礫充填層は、今回調査した当該期における井戸の特徴の一つに挙げられる。礫より上層は無遺物層が認められることから、こぶし大礫の充填は井戸としての機能停止を示す行為である可能性が考えられる。なお SE03 の最上層から、登窯第1段階第2小期に属する遺物が小礫とともにまとめて認められた。井戸としての機能を消失した後、廐棄土坑として利用されたものと推定される。

II c 区南部は今回の調査区中、最も遺構密度の高い調査区である。多数の小穴のほかに、13世紀代に埋没したとみられる東西方向の溝（SD02、SD04）を2か所で検出し、それを切る16世紀後半から17世紀前半の井戸 SE02 を検出した。SD02 と SD04 は東西方向に平行しており、同時期に存在していた可能性も考えられる。SD04 は溝が重複しており、同一地点に繰り返し溝を掘削していたものと推定される。なおこの位置も先述の地割の踏襲が認められることから、境界線の溝であった可能性も考えられるが、遺構が13世紀代と古くなり、城下町形成期以前から一定の地割が存在していた可能性を指摘するにとどめておく。近世東海道は現在の国道 257 号が踏襲しているが、この地割の基準となったのが「東海道」である可能性が高い。

このほかに柱痕跡は少ないものの、根石を伴う小穴が多数認められた。遺構の底面に平坦な礫を据えたものや、柱周囲を取り巻く状況を示すものなども認められた。またこの調査区に限ったことではないが、小穴を掘ると浅いにもかかわらず湧水（水脈に当たったか）が認められるものが多かつた。このような小穴は II b 区・II d 区・II e 区においても認められた。豊富な湧水もその要因であろうが、根石の存在は不等沈下を防止する効果を期待していた可能性が高い。調査区中央部で南北方向の柱列 SA02 を検出しておき、先述の SE02 を切ることから江戸時代以降に営まれた柱列である可能性が高い。これに組み合う遺構が認められず建物であった可能性は不明である。

II d・II e 区はともに調査範囲が狭いにもかかわらず、多数の小穴をはじめとする遺構を検出した。これらのうち特筆すべきは II d 区で検出した SX02 である。SX02 は調査できた範囲が狭いため遺構の平面形や規模など不明な点が多いが、東西方向の幅 2.15 m、南北方向は 2.0 m 以上で、調査区の南北に直線的に連続するとみられる。遺構の断面形は箱形を呈し、底面は平坦である。また遺構の両端には小穴が不等間隔ながら遺構に沿って並ぶ。小穴は深さや底面高が一定ではなく、明確に柱痕跡が観察できるものでもない。遺構両端の小穴列の内側は、遺構が認められなかった。出土遺物も少なく、年代を判別できる遺物が出土していないが、IV層を切ることから戦国時代以降の遺構であり、城下町形成期から近世城下町に伴う可能性が高い。遺構の主軸が近世東海道と方位を揃えることもその傍証と言えよう。調査の結果からはどのような性格を有する遺構が明らかにすることができなかつたが、今後周辺を調査する際には注意を要する遺構であることを指摘しておきたい。

5 III区の調査

(1) 概 要

今回の調査区の中央部北寄りに位置する調査区で、東西8m、南北7m、調査面積が56.0 m²を測る。検出した遺構は少なく、小穴・土坑が各1基、計2基に留まる。壁面に確認できた遺構としては小穴が1基、土坑が5基、不明遺構1基である。擾乱が遺構面にまで及ぶこともあり、遺構の残存状況は悪かった。

(2) 遺 構

i) 土坑

SK01 (Fig. 67) 調査区南西部で検出した遺構で、直径3.77×3.60mの梢円形を呈する。同じく削平を受けているため浅く、深さ0.17mの浅い箱形を呈する。埋土に基盤層に起因する疊を多く含む。遺物が出土しなかったため、遺構の年代は不明である。

ii) 小穴

SP01 (Fig. 67) 調査区北西部で検出した遺構で、平面形は円形を呈し、直径0.53mを測る。上部が削平を受けているとみられるため浅く、深さ0.17mの浅いV字形を呈する。遺物が出土しなかつ

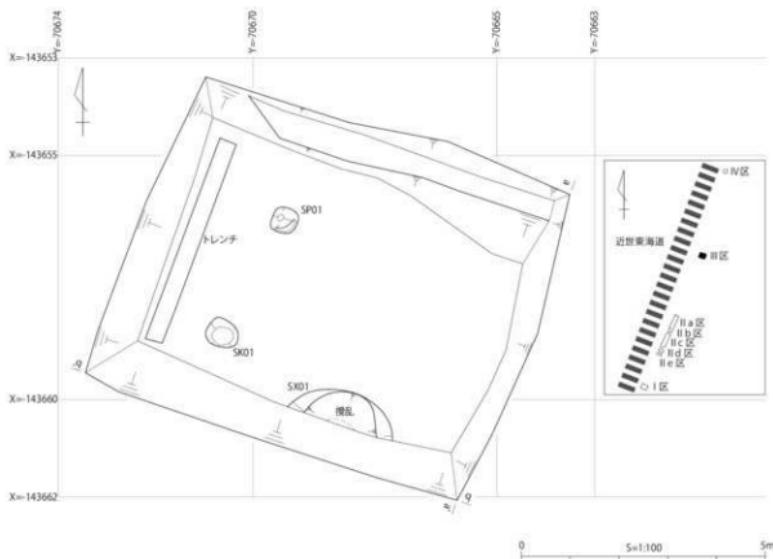


Fig.65 III区 遺構全体図



(3) 遺物 (Fig. 68)

125・128はIII層出土遺物である。125は初山産の擂鉢であると考えられる。焼成不良で胎土は橙

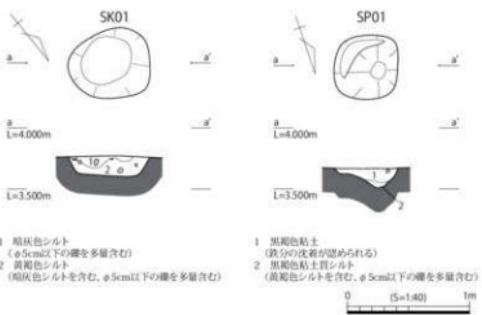


Fig.67 III区 遺構図

た遺構は、土坑1基と小穴1基を検出したに留まるが、東壁面にはIV層より掘り込まれる遺構（SK06・SP02）や、III層より掘り込まれる遺構（SK02・SK03・SK04・SK05・SX01）が認められた。出土した遺物が細片であるため、これらの遺構の詳細な年代は明らかにできないが、基本層序の説明の際にも触れたが、IV層からは戦国時代以前の土器が出土し、近世以降の遺物を含まないことから、IV層は戦国時代以降に形成されたと考えられる。このためIV層を切る遺構は戦国時代に上限が求められる。一方、III層からは近世の遺物が出土しているため、これを切る遺構は近世以降の年代が想定できる。

平面的に検出した2基はどの層から掘り込まれるのか、調査では明らかにすることができなかった。埋土の特徴からはIV層に類する土が認められることを考えると、IV層形成以降なわち戦国時代以降の年代が推定される。このほかに遺構が検出できず、この2基の遺構が組み合うかどうかとも含め不明である。この調査区においては非常に遺構密度が希薄で、出土遺物も少なかった。

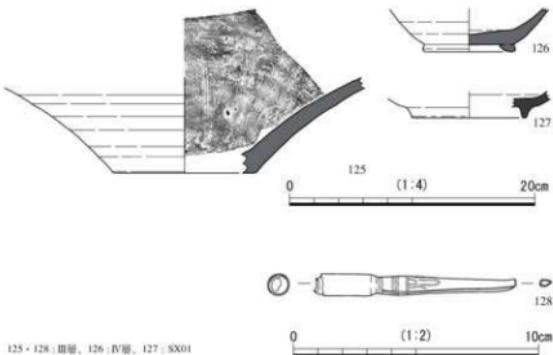


Fig.68 III区 出土遺物

色を呈する。内面は使用のため平滑になる。128は銅製の煙管吸口で、雁首を欠損する。雁首の一部が残存する。吸口に文様が認められる。126はIV層出土の山茶碗の碗である。底部の破片で底径7.4cmを測る。5型式13世紀初頭に属するものと考えられる。127はSX01出土の龍泉窯系青磁碗小片である。全面に灰オリーブの釉がかかる。高台の疊付は釉ハギになる。

(4) 小結

この調査区において平面で検出した

6 IV区の調査

(1) 概要

今回の調査区の最北端に位置する調査区で、東西4.78m、南北4.1m、調査面積が19.6m²を測る。基盤層で平面的に検出した遺構は少なく、土坑が5基、自然流路が1条、溝が1条、小穴が3基に留まる。壁面に確認できた遺構としては小穴が15基である。

調査は通常通り重機による表土掘削を行ったが、現地表面から1.1m掘り下げた層から内耳鍋の破片が層をなすように密集して検出された。この層の上面において遺物の分布範囲と、遺構の有無を確認する必要が生じたため、重機掘削を一旦中止した。この面をIII-4層と認識し、遺物の分布範囲を調査した。またこの遺物が遺構に含まれるかどうかを調査したが、明確に掘り込まれるプランは検出されず、地形のくぼみに遺物が分布する状況であった。この範囲をSX01として調査記録を行い、再び重機を投入し掘削を再開した。

基盤層上で平面的に検出した遺構は自然流路や不整形土坑など、ほかの調査区とは異なる様相を呈することが明らかで、先に調査したIII-4層とは異なり、これらの遺構からはほとんど遺物が出土しなかった。一方で各壁面の堆積状況からは、掘り込み面が様々であるものの、小穴が15基確認できており、遺物も少量ながら出土した。

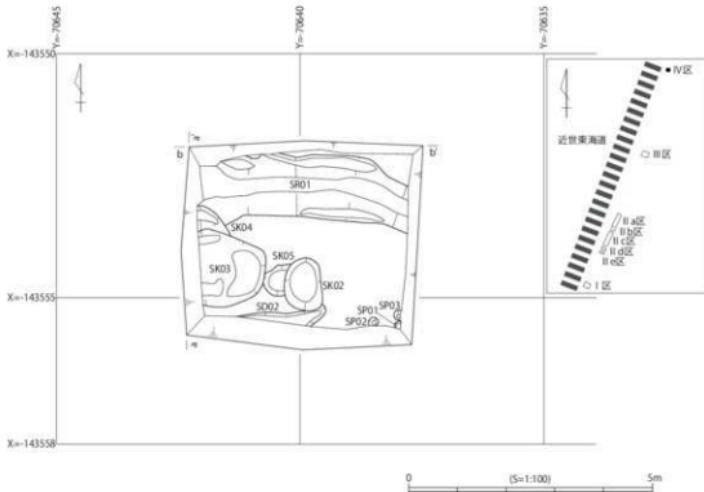


Fig.69 IV区 遺構全体図



Fig.70 IV区 西壁面図



- 1~3 黄褐色～墨色土・複合(Ⅰ層)
4 黄褐色粘土質シルト(灰白色・板状を多量含む,Ⅱ層)
5 にぶい,弱透水性粘土質シルト(灰白色・板状を多量含む,Ⅱ層)
6 硬化物層(Ⅱ層)
7 複合(Ⅲ層)
8 黑土質(Ⅲ層)
9 黄褐色粘土質シルト(20cm以下の礫を少量含む,複合,Ⅲ層)
10 黄褐色砂質粘土質シルト(複合)
11 黄褐色砂質粘土質シルト(黄褐色シルト質粘土の左端堆積,Ⅲ層)
12 黄褐色砂質粘土質シルト(右端)
13 黄褐色砂質粘土質シルト(板状を多量含む,板状)
14 黄褐色砂質粘土質シルト(板状)
15 黄褐色シルト質粘土(灰白色・板状を少量含む,Ⅲ層)
16 にい・黄褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルト・灰白色粘土ブロックを含む,板状を植込む,Ⅲ層)
17 にい・黄褐色粘土質シルト(板状)
18 黄褐色砂質粘土(黑褐色シルト質粘土を含む,灰白色・板状・土器を多量含む,板状,第4層)
19 黄褐色シルト質粘土(灰白色・板状を少量含む,φ10cm以下)の礫を少量含む,板状)
20 黄褐色シルト質粘土(黄褐色粘土質シルト・灰白色粘土ブロックを含む,灰白色・板状を植込む,SP04)
21 黄褐色砂質粘土(灰白色粘土ブロックを含む,灰白色を多量含む,土器をやや多量含む,板状,第4層)
22 黄褐色砂質粘土シルト(黄褐色粘土質シルトを含む,灰白色を少量含む,φ3cm以下)の礫を少量含む,板状(下の礫を少量含む,Ⅲ層)
23 黄褐色シルト質粘土(灰白色を多量含む,板状)
24 黄褐色シルト質粘土(灰白色を少量含む,板状)
25 黄褐色砂質粘土シルト(黄褐色粘土質シルトを含む,灰白色・板状を多量含む,φ5cm以下)の礫を少量含む,板状)
26 黄褐色砂質粘土(5cm以下)の礫をやや多量含む,板状)
27 黄褐色シルト質粘土(灰白色粘土ブロックを含む,φ3cm以下)の礫を少量含む,板状,SP07
28 にい・黄褐色粘土質シルト(灰褐色中軽軟を含む,φ5cm以下)の礫を少量含む,板状,SP05
29 黄褐色シルト質粘土(灰褐色粘土質粘土の混合土(土器を少量含む,SP05)
30 黄褐色シルト質粘土(SP06)
31 黄褐色シルト質粘土(灰褐色粘土ブロックを含む,灰白色を少量含む,φ3cm以下)の礫を少量含む,板状)

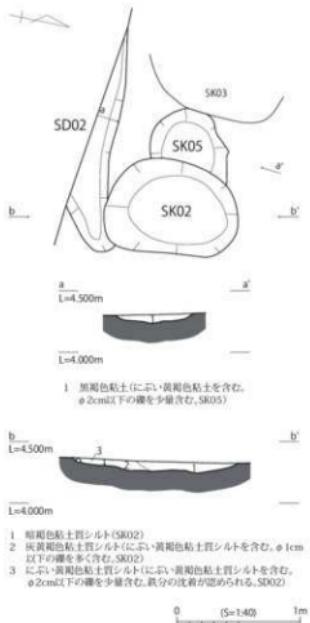


Fig.72 IV区 SD02・SK02・SK05 遺構図

述するIV層下面で検出したSK03にSK05が切られることから、IV層形成以前の遺構である可能性が高いものと考えられる。

SK03 (Fig. 73) 調査区中央部から南西隅部で検出した大型土坑で、調査区外へと延びる。遺構の北側にSK04を切る。遺構の平面形は、調査区外に延びるため詳細な形状は不明であるが、不整円形を呈するものと考えられる。遺構はV字状の断面形を有し、東側で段をもつ。遺構の規模は南北が1.60 m、東西が1.36 m以上、検出面からの深さが0.49 mを測る。埋土に黄褐色シルトのブロック土を多量に含むことから、人為的に埋

(2) 遺構

i) 溝

SD02 (Fig. 72) 調査区南壁際に検出した溝状遺構であるが、遺構の大半が調査区外になるため溝かどうかが明らかではない。しかしながら東西方向に直線的に延びることから溝として認識した。調査区内で東西方向に1.90 mにわたり検出した。幅は東端で0.38 mを測り、遺構の断面形は浅い皿状で、遺構の底面は東から西へゆるやかに下降する。SK02に切られ、遺構の東端は削平のため途切れる。遺構から遺物は出土しなかったが、IV層が形成される以前に埋没するため、詳細な年代は不明ながら、戦国時代以前と推定される。

ii) 土坑

SK02・SK05 (Fig. 72) 調査区中央部南壁寄りで検出した浅い土坑である。SK05がSK02に切られる。SK02は南北に長軸をもつ楕円形を呈する土坑で、浅い皿状を呈する断面形をもつ。SK05はSK02・SK03に切られるため、遺構の形状は不明確ながら円形を呈するものと考えられる。断面形は浅い皿状を呈する。いずれの遺構からも遺物が出土していないため、遺構の詳細な年代は不明である。また遺構の掘り込み面については、IV層上面か下面かの判断が困難な状況であるが、ともに埋土の特徴が類似すること、後

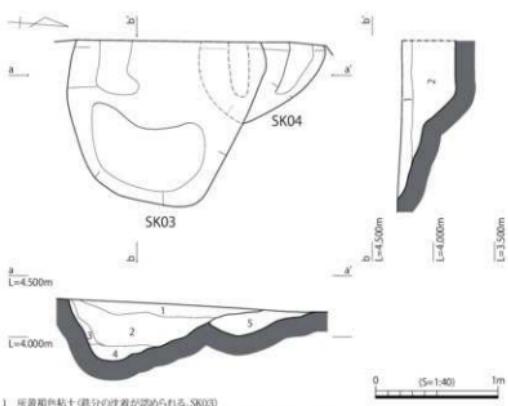


Fig.73 IV区 SK03・SK04 遺構図

め戻された可能性が高い。遺構から年代の判明する遺物が出土しなかったため詳細な年代は不明であるが、IV層が形成される以前に埋没するため、戦国時代以前の遺構であると推定される。

SK04 (Fig. 73) SK03に切られる土坑で、遺構の大半が調査区外に延びる。遺構の北部にある自然流路 SR01を切る。遺構の平面形は円形を呈するものと推定される。断面形はゆるやかなV字形を呈する。埋土はSK03と同様に黄褐色シルトのブロック土を多量に含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。遺構から年代の判明する遺物が出土しなかったため詳細な年代は不明であるが、IV層が形成される以前に埋没するため、戦国時代以前の遺構であると推定される。

iii) 自然流路

SR01 (Fig. 74) 調査区北部で検出した、東西方向に走行をもつ自然流路と考えられる。平面的に検出した当初は、直線的に調査区を貫通すると考えていたため、溝という認識であったが、調査を進めるなかで遺構の形状がやや蛇行することが判明したため、調査範囲が狭いものの自然流路という認識に変更するに至った。調査区内で4.2 mに

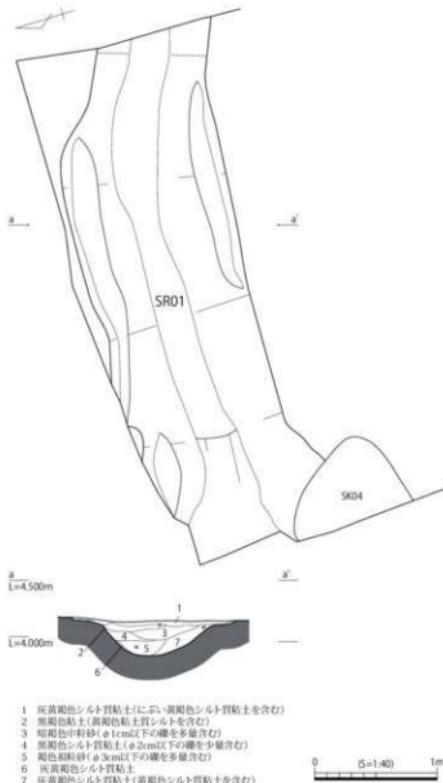
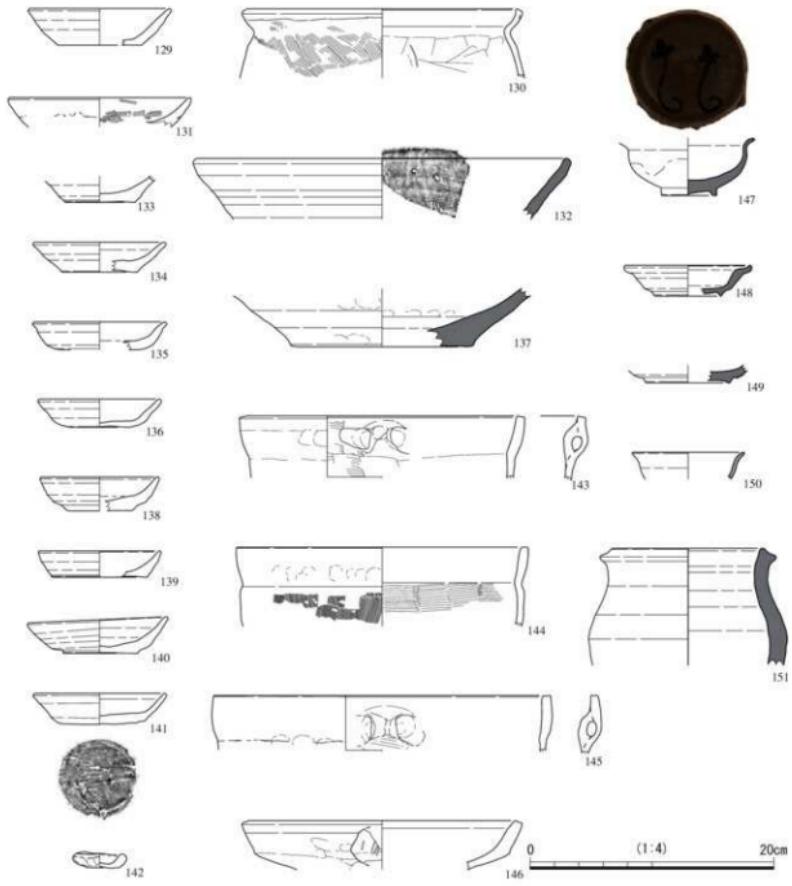


Fig. 74 IV区 SR01 遺構図

わたり調査した。遺構の幅は端の狭いところで0.90 m、中央部で1.32 m、断面形はV字～U字形を呈し、検出面からの深さ0.25～0.64 mを測る。遺構の西側をSK04に切られる。遺構の底面は東から西へ傾斜をもち、西壁から東へ0.5 mの位置で急激に落ち込み、段を有する。埋土からは自然に埋没したものと考えられ、こぶし大礫が多量に認められるため、流速の速さが推定される。遺構からほとんど遺物が出土しなかったが、先述のSK04に切られること、IV層下面で検出できることが明らかであるため、IV層形成以前の遺構であると考えられる。わずかに出土した内耳鍋やかわらけなどから、戦国時代から江戸時代にかけて埋没した可能性が考えられる。

(3) 遺物 (Fig. 75)

129はSR01出土のかわらけである。ロクロ成形で底部は回転糸切痕を残す。口径11.5cmを測る中皿である。130は東壁で検出したSP12出土の土器師内耳鍋A類である。なで肩の体部から口縁部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は上方へつまみ上げる。外面は斜め方向のハケメ調整。



129 : SP01, 130 : SP12, 131・132 : SP05, 133～136・149・150 : III層, 137～148・151 : III-4層

Fig.75 IV区 出土遺物

131・132は北壁で検出したSP05出土遺物である。131は土師器かわらけで口径14.8cmとやや大型の皿。132は瀬戸美濃産の描鉢の小片である。灰褐色の光沢のない釉がかかかる。古瀬戸後IV期新段階と考えられる。

133～136・149・150はIII層出土遺物で、133～136は土師器かわらけである。ロクロ成形で底部は回転糸切痕を残す。149は瀬戸美濃産の志野丸皿である。底部の破片で登窯第1段階第2小期と考えられる。150は産地不明の磁器碗である。明緑灰色の釉がかかかる。

137～148・151はIII-4層出土遺物である。137は渥美産の鉢底部である。残りが悪く全形は不明であるが、大型の鉢になると考えられる。138～141は土師器かわらけである。ロクロ成形で底部は

回転深切痕を残す。口径 9.6 ~ 11.7cm を測る小皿である。142 は手づくりのかわらけで、口径 3.8cm を測る完形品である。ニビオサエが顕著である。143 ~ 145 は土師器の内耳鍋である。口縁部のみ残存する内彎形内耳鍋 B2 類で、16 世紀後半に属する。146 は土師器炮烙と考えられる。口縁部外面に剥離痕が認められ、刻み目が観察される。147 は唐津産陶器の碗である。口縁端部を欠くものの残りが良く、内溝する体部から口縁部は外反する。底部は削り出しにより断面方形の高台が付く。内面と体部外面中位まで灰褐色の土灰釉がかかる。見込部に草木文が認められる。また口縁部内面にも施文が認められるが、詳細は不明である。底径 4.5cm を測る。III期 17 世紀後半と考えられる。148 は瀬戸美濃産の折縁皿である。大黒 3 段階と考えられる。151 は常滑産の壺で、口縁部から体部までの破片である。12 型式江戸時代前期と考えられる。

(4) 小 結

今回の調査範囲の最北端部に位置するIV区では、自然流路や不整形を呈する土坑などが検出されたが、他の調査区で普遍的にみられた建物や井戸などの、居住空間にみられる遺構がほとんど検出されなかった。基盤層の直上にはIV層、さらにその上位には幾重にもわたる整地土とみられる堆積があり、その中に内耳鍋を中心とする遺物が多量に出土したものの、基盤層で検出した遺構からはほとんど遺物が出土しなかった。わずかながら出土した遺物からは、ほかの調査区でみられる戦国時代末から江戸時代初頭の遺物が認められたため、城下町形成期の遺構と考えられる。つまりIV区の遺構群も I ~ III区の遺構群と同時期の遺構群であると認識している。遺構の少なかつたIII区（旅籠町）、遺構の多数認められた I・II区（塩町）、IV区の町名は「伝馬町」で、町名が変わると遺構の様相も大きく異なることは当時の町割りを考える上で興味深い。

IV区は基盤層から現地表面までの深さが 2.0 m をはかり、他の調査区とくらべ堆積が厚いことが明らかで、盛土（I層）、近代の造成土であるII層に加え、先にも触れたが整地土とみられる層（III層）が幾重にも認められた。III層の形成時期は近世と考えており、近世城下町の整備に伴う整地土の可能性が指摘できる。概要で触れたが、III層中において内耳鍋の破片が密集して出土する層（III-4層・写真図版 PL.29-1）を検出しており、この層を検討したが明確な遺構としては認識できず、遺物の分布範囲を SX01 として捉えた。この面で遺構検出を行ったが、ほかに遺構は認められなかった。III-4層から出土した土器は、多量にもかかわらず（コンテナ 4 箱分にも及ぶ）ほとんど接合しないことから、破損した土器をまとめて廃棄したものと推定される。近世城下町の生活面について明らかにすることは困難ではあるが、このような大量廃棄の存在は近在に生活域の存在を示唆するものと思われる。

Tab.3 I 区 遺構一覧表(1)

遺構番号	調査区	グリッド名	主動作方位	長軸(m)	短軸(m)	偏風時期	平面形	断面形	検出幅(高さ)(m)	底部幅(高さ)(m)	深さ(m)	出土遺物	切り合い	備考
SD_01	I	5Cm4 + m4 + m5	W18°N	4.24	0.28	13世紀	直線	皿	3.61	3.55	0.06		SP08・SE01に切られる	
SD_02	I	5Cm4	W16°N	2.05	0.26	13世紀	直線	U字	3.60	3.42	0.18		SP14・SP27に切られる	西側と東側で遺構底面高が異なる。中央部で段が付く
SE_01	I	5Cm4 + m5	—	(1.12)	(0.66)	江戸後期	円か	U字	3.97	(2.34)	(1.63)	廻戸、夷濃火跡、染付	SD01・SX02を切る	
SE_02	I	5Cm4 + m5	—	(1.03)	0.91	大室3・4	楕円	U字	3.58	1.96	1.62	廻戸夷濃火跡、初山、赤戸、扇、かづらけ、内耳鏡	—	西側壁面が浸食を受けオーバーハングする
SK_01	I	5Cm5	W23°N	0.89	0.27	—	椭円	皿	3.72	3.47	0.25		—	
SK_02	I	5Cm4	W11°N	(0.90)	0.56	13世紀	椭円	皿	3.67	3.52	0.15	山茶碗など	SP34に切られる	
SK_03	I	5Cm4	W38°N	0.52	0.30	—	椭円	皿	3.65	3.56	0.09		—	
SP_01	I	5Cm4	—	(0.39)	(0.14)	—	円か	U字	3.90	3.55	0.35		—	
SP_02	I	5Cm4	—	(0.48)	(0.23)	—	椭円	U字	3.62	3.51	0.11		—	
SP_03	I	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番	
SP_04	I	5Cm4	—	0.25	0.19	—	椭円	U字	3.62	3.49	0.13		—	
SP_05	I	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番、SP06柱痕跡	
SP_06	I	5Cm4	—	0.36	0.33	—	円	箱	3.65	3.29	0.36		—	柱痕跡が認められる
SP_07	I	5Cm4	—	0.27	0.26	—	円	U字	3.63	3.33	0.30		—	柱痕跡が認められる。SA01柱穴
SP_08	I	5Cm4	—	0.16	0.06	—	円か	U字	3.66	3.58	0.08		—	
SP_09	I	5Cm4	—	0.31	0.28	—	円	U字	3.65	3.40	0.25		—	柱痕跡が認められる
SP_10	I	5Cm4	—	0.24	0.21	—	円	U字	3.65	3.38	0.27		—	
SP_11	I	5Cm4	—	0.18	0.13	—	椭円	皿	3.68	3.64	0.04		—	
SP_12	I	5Cm4	—	0.28	0.27	—	円	U字	3.61	3.30	0.31		—	柱痕跡が認められる
SP_13	I	5Cm4	—	0.29	0.27	—	円	U字	3.65	3.38	0.27		—	柱痕跡が認められる。SA01柱穴
SP_14	I	5Cm4	—	0.27	0.22	—	円	U字	3.68	3.49	0.19		SD02を切る	
SP_15	I	5Cm4	—	0.36	0.29	—	円	U字	3.70	3.29	0.41		SP16・SP37を切る	柱痕跡が認められる。根石を伴う
SP_16	I	5Cm4	—	(0.20)	(0.13)	—	円か	U字	3.68	3.51	0.17		SP15・SP37に切られる	
SP_17	I	5Cm4 + m4	—	0.24	0.23	—	円	U字	3.68	3.50	0.18		—	
SP_18	I	5Cm4	—	0.21	0.21	—	円	U字	3.61	3.29	0.32		—	柱痕跡が認められる
SP_19	I	5Cm4	—	0.27	0.20	—	円	U字	3.57	3.39	0.18		—	
SP_20	I	5Cm4	—	0.39	0.37	—	円	U字	3.54	3.27	0.27		—	柱痕跡が認められる。根石を伴う
SP_21	I	5Cm4	—	0.20	0.17	—	椭円	U字	3.54	3.44	0.10		—	
SP_22	I	5Cm4	—	0.31	0.28	—	椭円	U字	3.61	3.47	0.14		SP23を切る	根石を伴う
SP_23	I	5Cm4	—	0.30	(0.15)	—	不整円	U字	3.57	3.40	0.17		SP23に切られる	
SP_24	I	5Cm4	—	0.21	0.18	—	円	U字	3.63	3.45	0.18		—	
SP_25	I	5Cm4	—	(0.21)	(0.08)	—	円か	U字	3.80	3.62	0.18		SP36に切られる	
SP_26	I	5Cm4	—	(0.15)	(0.04)	—	円か	U字	3.78	3.63	0.15		—	
SP_27	I	5Cm4	—	0.20	0.19	—	円	U字	3.60	3.42	0.18		SD02を切る	柱痕跡が認められる。根石を伴う
SP_28	I	5Cm4	—	0.26	0.20	—	椭円	U字	3.57	3.44	0.13		SX01に切られる	

Tab.4 I区 遺構一覧表(2)

編別番号	調査区	グリッド名	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	爆風時期	平面形	断面形	検出標高(m)	底部標高(m)	深さ(m)	出土遺物	切り合い	備考
SP_29	I	5ICm4	—	(0.35)	(0.03)	—	椭円か	皿	3.73	3.68	0.05	—	—	柱直路が認められる。SA01
SP_30	I	5IC4	—	0.20	0.18	—	円	U字	3.59	3.44	0.15	—	—	こぶし大以下の樅を充填する
SP_31	I	5IC4	—	0.36	0.30	—	円	U字	3.59	(3.38)	0.23	山茶碗	—	—
SP_32	I	5IC4	—	0.29	0.28	—	円	U字	3.60	3.47	0.13	—	—	—
SP_33	I	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
SP_34	I	5IC4	—	0.56	0.45	—	円	U字	3.66	3.24	0.42	SK03を切る	柱直路が認められる	—
SP_35	I	5IC4	—	(0.19)	(0.57)	—	円か	U字	3.80	3.62	0.18	—	—	—
SP_36	I	5IC4	—	(0.45)	(0.23)	—	円か	U字	3.86	3.51	0.35	SP25を切る	柱直路が認められる	—
SP_37	I	5ICm4	—	(3.65)	(3.42)	—	円	U字	3.66	3.46	0.20	SP15に切られる。SP16を切る	—	—
SP_38	I	5IC4	—	(0.24)	(0.20)	—	円	U字	3.61	3.42	0.19	SK02に切られる	—	—
SP_39	I	5ICm4	—	(0.20)	(0.12)	—	円	U字	3.60	3.46	0.14	SX03に切られる	—	—
SP_40	I	5ICm4	—	0.32	0.28	—	不規円	U字	3.69	3.45	0.24	SP41を切る	—	—
SP_41	I	5ICm4	—	0.23	(0.10)	—	椭円	U字	3.69	3.56	0.13	SP40に切られる	—	—
SP_42	I	5IC4	—	0.25	0.20	—	椭円	V字	3.65	3.56	0.09	—	—	—
SP_43	I	5IC4	—	(0.29)	—	—	—	V字	3.80	3.66	0.14	—	—	—
SP_44	I	5IC4	—	(0.32)	—	—	—	U字	3.85	3.70	0.15	—	—	—
SX_01	I	5IC4・m4	W21°N	4.28	0.27	—	—	—	3.63~ 3.57	3.60~ 3.43	—	—	—	SP07・SP13・SP30
SX_01	I	5IC4	W27°N	2.19	0.21	—	弧状	U字	3.60	3.51	0.09	SP28を切る	—	—
SX_02	I	5ICm5	W38°N	(0.42)	—	—	直線	U字	3.78	3.61	0.17	SX01に切られる	調査区外へ延びる	—
SX_03	I	5ICm4	W26°N	(2.28)	(0.12)	—	不明	U字	3.57	3.45	0.12	SP39を切る	調査区外へ延びる	—

Tab.5 III区 遺構一覧表

編別番号	調査区	グリッド名	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	爆風時期	平面形	断面形	検出標高(m)	底部標高(m)	深さ(m)	出土遺物	切り合い	備考
SK_01	III	5GDg12	—	0.68	0.58	—	椭円形	皿	3.77	3.60	0.17	—	—	—
SK_02	III	5GDh13	—	(0.95)	—	—	不明	第	4.56	4.12	0.44	—	—	—
SK_03	III	5GDh12	—	(0.30)	—	—	不明	U字	4.32	4.10	0.22	—	—	—
SK_04	III	5GDg12	—	(0.49)	—	—	不明	U字	4.37	4.11	0.26	—	—	—
SK_05	III	5GDh12	—	(0.83)	—	—	不明	U字	4.71	4.31	0.40	—	—	—
SK_06	III	5GDh13	—	(0.68)	—	—	不明	U字	4.12	3.78	0.34	—	—	—
SP_01	III	5GDg12	—	0.53	0.53	—	円	U字	3.67	3.50	0.17	—	—	—
SP_02	III	5GDh12	—	(0.22)	—	—	不明	U字	4.18	4.05	0.13	—	—	—
SX_01	III	5GDg13	—	(2.30)	(0.75)	—	不明	U字	4.08	3.22	0.86	青磁碗	—	—

Tab.6 II区 遺構一覧表(1)

種別番号	開発区	グリッド名	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	爆風時期	平面形	断面形	検出標 高(m)	底部標 高(m)	深さ (m)	出土遺物	切り合い	備考
SD 01	IIc北	SHCq9 + s10	N24°E	(18.89)	(0.40)	—	直線	且	3.87	3.82	0.05	SP113・SP114に 切られる。SK09		
SD 02	IIc南	SHCp14 + p15 + q14 + q15	W15°N	(4.91)	1.38 ~ 1.67	—	直線	且	3.80	3.70	0.10	SP137・SP164 + SP167・SP169 + SP170・SP171 + SP172・SP173 + SP176に切られ る。SP201を切 る。		
SD 03	IIc北	SHCq13	N9°W	(0.60)	(0.28)	—	直線	且	3.86	3.83	0.03	SE03に切られる。縦を充填		
SD 04A	IIc南	SHCp15 + q15	W15°N	(4.90)	0.28 ~ 0.32	—	直線	V字	3.75	3.59	0.16	SE02・SP153 + SP159・SP160 + SP161・SP162に SD04Aが SD04Bに先 切られる。行 SP202・SP203を 切る		
SD 04B	IIc南	SHCp15 + q15	W15°N	(4.90)	1.70 ~ 2.28	—	直線	且	3.87	3.67	0.20	西美甕 SE02・SP153 + SP159・SP160 + SP161・SP162に 切られる。 SP202・SP203を 切る		
SD 05	IIc南	SHCp14	N8°E	(0.85)	(0.38)	—	直線	且	3.88	3.84	0.04	SP191・SP192に 切られる		
SD 06	IIc南	SHCq14	N33°E	(1.28)	(0.43)	—	直線	且	3.86	3.79	0.07	SP199を切る		
SD 07	IIc南	SHCp15 + q15	W10°N	2.13	0.29	—	直線	箱	3.79	3.73	0.06	SD04に切られ る		
SD 08	IIc南	SHCp15	W14°N	(1.19)	(0.37)	—	直線	U字	3.80	3.65	0.15	SE02・SP163に 切られる		
SE 01	IIc北	SHCq12	—	1.73	1.70	13世紀	円	箱	3.86	3.03	0.83	SD01を切る		
SE 02	IIc南	SHCp15	—	1.48	1.26	大室3前	横円	箱	3.83	1.61	2.22	SP161・SP162に 切られる。 SD04を切る		
SE 03	IIc北	SHCq13	—	0.86	0.81	笠置2	円	箱	3.88	(1.50)	(2.38)	南戸美濃志 野・天目 SD03を切る	下層にこぶし大甕を 充填	
SK 01	IIa	SHDq6	—	(0.60)	0.44	—	梢円	且	3.86	3.80	0.06	SP03に切られる		
SK 02	IIa	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番	
SK 03	IIa	SHCs8	—	1.52	0.70	—	不規則円	且	3.85	3.75	0.10	—		
SK 04	IIa	SHC6	—	(0.74)	—	—	—	U字	4.13	3.66	0.47	—		
SK 05	IIa	SHC6	—	(0.84)	—	—	—	U字	4.35	3.93	0.42	—		
SK 06	IIa	SHC6	—	(0.61)	—	—	—	且	4.39	4.22	0.17	—		
SK 07	IIa	SHC7	—	(0.51)	—	—	—	且	4.12	3.99	0.13	—		
SK 08	IIa	SHCs + SHDq6	—	(1.11)	—	—	—	U字	4.20	3.95	0.25	SP03・SK01 + SK01を切る		
SK 09	IIb	SHCq9	N7°E	(2.03)	(1.79)	13世紀	横丸方削	箱	3.72	3.64	0.08	山基編、深 美 SP56・SP118 + SD01に切られ る。SP129 + SP133を切る		
SK 10	IIc北	SHCq13	N19°W	(0.61)	(0.40)	—	梢円	且	3.75	3.70	0.05	SK13・SD01に 切られる		
SK 11	IIc北	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SE03に変更したた め 欠番	
SK 12	IIc北	SHCq12	—	(0.44)	(0.30)	—	円か	且	3.90	3.86	0.04	—	調査区外に延びる	

Tab.7 II区 遺構一覧表(2)

種別番号	開発区	グリッド名	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	発現時期	平面形	断面形	検出幅 (高さ) (m)	底部幅 (高さ) (m)	深さ (m)	出土遺物	切り合ひ	備考
SK 13	IIc北	SHCq13	—	(0.54)	(0.52)	—	不規円か 圓	圓	3.90	3.76	0.14	山茶編・ 伊勢型鏡	SD01・SK07に 切られる	
SK 14	IIc北	SHCq13	—	(0.75)	(0.14)	—	椭円か U字	U字	3.74	3.46	0.28		SK07・SK13に 切られる	
SK 15	IIc南	SHCq14	W35°N	(0.77)	(0.48)	—	椭円	圓	3.80	3.69	0.11		SD02・SP17・ SP179に切られ る	
SK 16	IIc南	SHCq14	N36°E	(0.54)	(0.37)	—	椭円	圓	3.82	3.71	0.11		SD01・SP177・ SP181に切られ る	
SK 17	IIc南	SHCp14	—	(0.69)	—	—	—	U字	4.16	3.97	0.19		—	
SK 18	IIc南	SHCq14	—	(0.80)	—	—	—	U字	4.39	4.17	0.22		—	
SK 19	IIc南	SHCq15	—	(1.05)	—	—	—	圓	4.39	4.11	0.28	合口器	SK20を切る	
SK 20	IIc南	SHCq15	—	(0.75)	—	—	—	U字	4.33	4.08	0.25		SK19に切られる	
SK 21	IIc南	SHCp15	—	(0.82)	—	—	—	U字	4.13	3.88	0.25		—	
SK 22	IIc南	SHCp15	—	(0.83)	—	—	—	圓	4.03	3.94	0.09		—	
SK 23	IIc南	SHCp15	—	(0.52)	—	—	—	U字	4.34	4.09	0.25		—	
SK 24	IIc南	SHCp14	—	(0.51)	—	—	—	V字	4.40	4.06	0.34		—	
SK 25	IIc南	SHCp14	—	(0.84)	—	—	—	U字	4.46	4.07	0.39	鉢首	—	寛永通宝8枚、土坑墓 か
SK 26	IIc南	SHCq14	—	(0.77)	—	—	—	U字	4.11	3.86	0.25		—	
SP 01	IIa	SHC6	—	(0.31)	0.27	—	椭円	圓	3.93	3.88	0.05		SP02に切られる	柱痕跡有
SP 02	IIa	SHC6	—	0.43	0.35	—	椭円	U字	3.89	3.74	0.15		SP01を切る	
SP 03	IIa	SHDn6	—	0.27	(0.18)	—	円	U字	3.89	3.80	0.09		SK01を切る	
SP 04	IIa	SHDn6	—	0.31	(0.30)	—	椭円	U字	3.86	0.80	0.06		SP39・SK01に 切られる	
SP 05	IIa	SHDn6	—	0.33	0.27	—	不整円	U字	3.89	3.70	0.19		SP30を切る	
SP 06	IIa	SHC6・ SHDn6	—	0.21	0.20	—	円	圓	3.88	3.82	0.06		SP26を切る	
SP 07	IIa	SHC6	—	0.34	0.33	—	円	U字	3.91	3.60	0.31	砾石	SP08を切る	砾石
SP 08	IIa	SHC6	—	0.23	(0.23)	—	円	U字	3.91	3.62	0.29	偏形澤	SP07に切られる	
SP 09	IIa	SHC6	—	0.30	0.29	—	円	U字	3.87	3.72	0.15		SX01・SP83を 切る	
SP 10	IIa	SHC6・7	—	0.32	0.32	—	不整円	U字	3.85	3.67	0.18		—	
SP 11	IIa	SHC7	—	0.40	(0.30)	—	椭円	圓	3.87	3.77	0.10		SP11に切られる	
SP 12	IIa	SHC7	—	0.38	0.29	—	椭円	圓	3.88	3.80	0.08		SP12を切る	
SP 13	IIa	SHC7	—	0.30	0.28	—	椭円	U字	3.88	3.70	0.18		SP39を切る	
SP 14	IIa	SHC7	—	0.37	0.35	—	円	U字	3.85	3.55	0.30		—	
SP 15	IIa	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番	
SP 16	IIa	SHC7	—	0.23	(0.20)	—	円か	U字	4.29	3.78	0.51		—	
SP 17	IIa	SHC7	—	0.24	(0.21)	—	円か	U字	4.30	3.74	0.54		—	
SP 18	IIa	SHC7	—	0.27	0.26	—	円	圓	3.90	3.82	0.18		—	
SP 19	IIa	SHC7	—	0.21	0.20	—	円	圓	3.88	3.85	0.03		—	
SP 20	IIa	SHC7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番	
SP 21	IIa	SHC7	—	0.30	0.29	—	円	U字	3.88	3.80	0.08		—	
SP 22	IIa	SHC7	—	0.24	0.23	—	円	U字	3.89	3.80	0.09		—	

Tab.8 II区 遺構一覧表(3)

種別番号	調査区	グリッド名	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	発現時期	平面形	断面形	検出幅 高(m)	底部幅 高(m)	深さ (m)	出土遺物	切り合い	備考
SP 23	IIa	SHC07	—	0.33	0.24	—	楕円	直	3.87	3.80	0.07	SP24を切る	—	
SP 24	IIa	SHC07	—	0.31	(0.25)	—	楕円	直	3.88	3.81	0.07	SP23に切られる	—	
SP 25	IIa	SHC07	—	0.22	0.20	—	円	直	3.88	3.82	0.06	—	—	
SP 26	IIa	SHDn6	—	0.42	0.40	—	円	直	3.89	3.85	0.04	SP06に切られる	—	
SP 27	IIa	SHC07	—	0.32	(0.32)	—	楕円	U字	3.86	3.71	0.15	SP28を切る	—	
SP 28	IIa	SHC07	—	0.26	(0.18)	—	楕円	U字	3.86	3.74	0.12	SP27に切られる	—	
SP 29	IIa	SHC08	—	0.32	0.27	—	楕円	直	3.87	3.84	0.03	—	—	
SP 30	IIa	SHDn6	—	0.36	(0.31)	—	円	U字	3.87	3.69	0.18	SP06に切られる	—	
SP 31	IIa	SHC08・18	—	0.27	0.26	—	楕円	U字	3.85	3.62	0.23	—	—	
SP 32	IIa	SHC08	—	0.15	0.12	—	円	U字	3.87	3.79	0.08	SP33を切る	—	
SP 33	IIa	SHC08	—	0.37	(0.28)	—	楕円	直	3.86	3.80	0.06	SP32に切られる	—	
SP 34	IIa	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番	
SP 35	IIa	SHC08	—	0.38	0.38	—	円	U字	3.87	3.48	0.39	—	SA01柱穴	
SP 36	IIa	SHC08	—	(0.18)	(0.06)	—	円か	直	3.92	3.87	0.05	—	—	
SP 37	IIa	SHC09	—	0.24	0.20	—	楕円	U字	3.84	3.72	0.12	SP38を切る	—	
SP 38	IIa	SHC09	—	(0.20)	0.11	—	楕円	直か	3.85	3.79	0.06	SP37に切られる	—	
SP 39	IIa	SHC07	—	0.32	(0.19)	—	楕円	U字	3.86	3.63	0.23	SP13に切られる	—	
SP 40	IIa	SHC08・18	—	0.28	0.28	—	円	直	3.86	3.78	0.08	SP41を切る	—	
SP 41	IIa	SHC08	—	(0.21)	(0.15)	—	円か	直	3.86	3.82	0.04	SP40に切られる	—	
SP 42	IIa	SHC08	—	0.22	(0.21)	—	円	直	3.87	3.73	0.14	SP43に切られる	—	
SP 43	IIa	SHC08	—	0.35	0.28	—	楕円	U字	3.85	3.65	0.20	SP42を切る	—	
SP 44	IIa	SHC09	—	(0.22)	(0.11)	—	円か	直	3.83	3.76	0.07	—	—	
SP 45	IIa	SHC09・19	—	0.36	0.34	—	円	箱	3.85	3.51	0.34	—	—	
SP 46	IIa	SHC09	—	0.26	0.25	—	円	直	3.87	3.81	0.06	—	—	
SP 47	IIa	SHC07・18	—	(0.37)	(0.12)	—	円か	箱	4.22	3.81	0.41	—	—	
SP 48	IIa	SHC09・19	—	0.34	0.32	—	円	箱	3.78	3.51	0.27	—	SA01柱穴	
SP 49	IIa	SHC08	—	0.28	0.25	—	楕円	箱	3.85	3.67	0.18	—	—	
SP 50	IIa	SHC08	—	0.33	0.33	—	円	U字	3.85	3.58	0.27	—	—	
SP 51	IIa	SHC08	—	0.34	(0.27)	—	円か	直	3.91	3.85	0.06	—	根石	
SP 52	IIa	SHC09	—	0.20	0.17	—	楕円	直	3.86	3.80	0.06	—	—	
SP 53	IIa	SHC09	—	(0.32)	(0.13)	—	円か	箱	3.91	3.80	0.11	—	—	
SP 54	IIa	SHC09	—	(0.34)	(0.16)	—	円か	U字	3.93	3.81	0.12	—	—	
SP 55	IIa	SHC09	—	0.45	0.43	—	円	U字	3.84	3.38	0.46	駆開	—	SA01柱穴
SP 56	IIa	SHC09	—	0.55	0.31	—	楕円	V字	3.82	3.57	0.25	—	—	2基重複の可能性
SP 57	IIa	SHC09	—	(0.29)	0.22	—	楕円	U字	3.86	3.74	0.12	—	—	
SP 58	IIa	SHC09	—	(0.17)	(0.07)	—	円か	U字	3.93	3.82	0.11	—	—	
SP 59	IIa	SHC09	—	(0.25)	(0.13)	—	円か	U字	3.92	3.74	0.18	—	—	
SP 60	IIa	SHC09	—	0.26	(0.19)	—	円か	U字	3.91	3.78	0.13	—	—	
SP 61	IIa	SHC09	—	(0.31)	0.31	—	楕円	直	3.84	3.79	0.05	—	—	
SP 62	IIa	SHC09	—	(0.27)	(0.13)	—	円か	U字	3.83	3.74	0.09	—	—	
SP 63	IIe	SHC07	—	(0.21)	(0.21)	—	円	U字	3.85	3.80	0.05	—	—	

Tab.9 II区 遺構一覧表(4)

種別番号	調査区	グリッド名	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	発見時期	平面形	断面形	検出幅 (高さ) (m)	底部幅 (高さ) (m)	深さ (m)	出土遺物	切り合い	備考
SP 64	IIe	SHCo17	—	0.32	0.25	—	楕円	V字	3.77	3.32	0.45	SP65を切る	—	
SP 65	IIe	SHCo17	—	0.35	0.29	—	円	V字	3.69	3.37	0.32	SP64に切られる	—	
SP 66	IIe	SHCo17	—	(0.30)	(0.20)	—	円か	U字	3.91	3.80	0.11	SP79を切る	—	
SP 67	IIe	SHCo17	—	(0.33)	(0.17)	—	楕円	V字	3.86	3.50	0.36	—	—	
SP 68	IIe	SHCo17	—	(0.34)	(0.13)	—	円	V字	3.91	3.54	0.37	—	—	
SP 69	IIe	SHCo17	—	0.31	0.26	—	楕円	皿	3.80	3.72	0.08	—	—	
SP 70	IIe	SHCo17	—	(0.32)	(0.10)	—	円	U字	3.81	3.58	0.23	—	—	
SP 71	IIe	SHCo17	—	(0.25)	(0.12)	—	円か	U字	3.82	3.70	0.12	SP72を切る	—	
SP 72	IIe	SHCo17	—	(0.20)	(0.06)	—	円か	U字	3.81	3.68	0.13	SP71に切られる	—	
SP 73	IIe	SHCo17	—	(0.20)	(0.17)	—	楕円	V字	3.85	3.67	0.18	—	—	
SP 74	IIe	SHCo17	—	(0.36)	(0.16)	—	円	V字	3.86	3.28	0.58	—	—	
SP 75	IIe	SHCo17	—	(0.23)	(0.06)	—	円か	U字	3.87	3.78	0.09	—	—	
SP 76	IIe	SHCo17	—	0.21	0.18	—	円	U字	3.78	3.64	0.12	SP77を切る	—	
SP 77	IIe	SHCo17	—	0.22	0.18	—	円	U字	3.76	3.60	0.16	SP76に切られる	—	
SP 78	IIe	SHCo17	—	(0.18)	0.11	—	楕円	U字	3.76	3.70	0.06	—	—	
SP 79	IIe	SHCo17	—	(0.34)	0.32	—	円	U字	3.86	3.75	0.11	SP66に切られる	—	
SP 80	IIe	SHCo17	—	(0.47)	(0.08)	—	円か	V字	4.21	3.78	0.43	—	—	
SP 81	IIe	SHCo17	—	(0.68)	—	江戸時代	円か	U字	4.49	4.28	0.21	軒丸瓦、 軒平瓦	—	
SP 82	IIa	SHCo6	—	(0.19)	(0.13)	—	楕円	U字	3.85	3.70	0.15	SX01を切る	—	
SP 83	IIa	SHCo6	—	0.45	0.28	—	不整円	U字	3.82	3.73	0.09	SP09・SX01を 切る	—	
SP 84	IIa	SHCo8	—	(0.31)	—	—	—	U字	4.14	3.98	0.16	—	—	
SP 85	IIa	SHCo7	—	(0.26)	—	—	—	U字	4.14	4.04	0.10	—	—	
SP 86	IIa	SHCo7	—	(0.18)	—	—	—	U字	3.92	3.75	0.17	—	—	
SP 87	IIa	SHCo8	—	(0.47)	—	—	—	U字	4.32	4.07	0.25	—	—	
SP 88	IIa	SHCo8	—	(0.55)	—	—	—	V字	4.32	4.03	0.29	—	—	
SP 89	IIa	SHCo8	—	(0.50)	—	—	—	V字	4.20	3.88	0.32	—	—	
SP 90	IIa	SHCo8	—	(0.36)	—	—	—	V字	3.91	3.82	0.09	—	—	
SP 91	IIa	SHCo6	—	(0.55)	—	—	—	皿	4.20	3.99	0.21	SP92を切る	—	
SP 92	IIa	SHCo6	—	(0.29)	—	—	—	U字	4.19	3.87	0.32	SP91に切られる	—	
SP 93	IId	SHCo16	—	(0.36)	(0.28)	—	楕円	皿	3.83	3.77	0.06	SP110・SP111を 切る	—	
SP 94	IId	SHCo16	—	0.30	0.28	—	楕円	U字	3.81	3.50	0.31	—	—	
SP 95	IId	SHCo16	—	0.33	0.29	—	円	U字	3.81	3.71	0.10	—	—	
SP 96	IId	SHCo16	—	0.38	0.27	—	楕円	U字	3.77	3.36	0.41	—	—	
SP 97	IId	SHCo16	—	(0.26)	(0.20)	—	円	皿	3.78	3.72	0.06	SP103に切られる	—	
SP 98	IId	SHCo17	—	(0.23)	(0.18)	—	楕円	U字	3.74	3.51	0.23	—	—	
SP 99	IId	SHCo17	—	0.38	0.24	—	楕円	U字	3.74	3.57	0.17	—	—	
SP 100	IId	SHCo17	—	0.27	0.26	—	円	U字	3.71	3.35	0.36	—	—	
SP 101	IId	SHCo16	—	0.31	0.25	—	楕円	U字	3.74	3.51	0.23	—	—	
SP 102	IId	SHCo16	—	0.32	0.27	—	楕円	U字	3.74	3.55	0.19	SP109を切る	—	
SP 103	IId	SHCo16	—	0.20	0.12	—	楕円	U字	3.76	3.58	0.18	SP97に切られる	—	

Tab.10 II区 遺構一覧表（5）

種別番号	開発区	グリッド名	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	発見時期	平面形	断面形	検出幅 (高さ) (m)	底部幅 (高さ) (m)	深さ (m)	出土遺物	切り合い	備考
SP 104	II d	SHCo16	-	0.32	0.29	-	円	U字	3.75	3.41	0.34	-	-	
SP 105	II d	SHCo16	-	(0.25)	(0.11)	-	梢円	V字	3.76	3.45	0.31	-	-	
SP 106	II d	SHCp16	-	0.30	0.28	-	円	U字	3.74	3.47	0.27	-	-	
SP 107	II d	SHCp16	-	0.17	0.14	-	梢円	U字	3.71	3.42	0.29	-	-	
SP 108	II d	SHCp16	-	0.24	0.18	-	梢円	U字	3.73	3.57	0.16	-	-	
SP 109	II d	SHCo16	-	(0.26)	(0.05)	-	円	U字	3.75	3.64	0.11	SP102に切られる	-	
SP 110	II d	SHCo16	-	0.19	0.14	-	梢円	U字	3.77	3.59	0.18	SP93に切られる	-	
SP 111	II d	SHCo16	-	0.10	0.09	-	円	U字	3.81	3.68	0.13	SP93に切られる	-	
SP 112	II b	SHCs9	-	0.30	0.28	-	円	U字	3.87	3.63	0.24	石製品	-	
SP 113	II b	SHCs10	-	0.28	0.24	-	円	U字	3.88	3.73	0.15	SD01を切る	-	
SP 114	II b	SHCs10	-	0.26	0.26	-	円	U字	3.88	3.58	0.30	SD01を切る	-	
SP 115	II b	SHCs10	-	0.38	0.37	-	円	U字	3.87	3.68	0.19	山茶碗	SP125を切る	
SP 116	II b	SHCs10	-	0.23	0.21	-	円	V字	3.87	3.74	0.13	SP126を切る	-	
SP 117	II b	SHCs10	-	0.24	0.24	-	円	U字	3.87	3.70	0.17	SP126を切る	-	
SP 118	II b	SHCs9	-	0.40	0.28	-	円	箱	3.84	3.66	0.18	SX09を切る	-	
SP 119	II b	SHCs10	-	0.25	0.22	-	円	U字	3.88	3.73	0.15	SP130を切る	-	
SP 120	II b	SHCs10	-	0.26	0.23	-	円	V字	3.82	3.63	0.19	SP121を切る	-	
SP 121	II b	SHCs10	-	(0.25)	(0.06)	-	円	U字	3.81	3.72	0.09	SP120に切られる	-	
SP 122	II b	SHCs10	-	0.37	0.33	-	梢円	U字	3.83	3.50	0.33	-	-	
SP 123	II b	SHCs10	-	0.20	0.16	-	円	U字	3.85	3.72	0.13	-	-	
SP 124	II b	SHCs10	-	0.43	0.43	-	円	V字	3.85	3.49	0.36	-	-	
SP 125	II b	SHCs10	-	(0.38)	(0.37)	-	梢円	V字	3.80	3.62	0.18	SP115に切られる	-	
SP 126	II b	SHCs10	-	(0.32)	(0.26)	-	円	U字	3.87	3.57	0.30	SP116・SP1117に切られる	-	
SP 127	II d	SHCp14	-	(0.30)	-	-	-	U字	4.20	4.03	0.17	-	-	
SP 128	II b	SHCs10	-	(0.28)	(0.11)	-	円	U字	3.81	3.71	0.10	-	-	
SP 129	II b	SHCs9	-	0.70	0.70	-	円	U字	3.79	3.64	0.15	-	-	
SP 130	II b	SHCs10	-	(0.22)	(0.17)	-	円	U字	3.86	3.62	0.24	SP119に切られる	-	
SP 131	II b	SHCs9	-	0.22	0.18	-	円	U字	3.74	3.66	0.08	-	-	
SP 132	II b	SHCs9	-	0.26	0.21	-	円	U字	3.77	3.69	0.08	SX05を切る	-	
SP 133	II b	SHCs9	-	0.28	0.25	-	円	U字	3.66	3.55	0.11	SK09に切られる	-	
SP 134	II b	SHCs9	-	(0.23)	(0.20)	-	円	U字	3.74	3.66	0.08	SX05に切られる	-	
SP 135	II b	SHCs9	-	(0.30)	(0.04)	-	円か	V字	3.83	3.77	0.06	-	-	
SP 136	II c南	SHCq14	-	0.50	0.41	江戸時代	円	U字	3.89	3.73	0.16	常滑	SD01を切る	
SP 137	II c南	SHCp14・p15・q14・q15	-	0.56	0.42	江戸時代	梢円	箱	3.78	3.70	0.08	美濃鉢・天日晒・肥前 磁器	-	
SP 138	II b	SHCs10	-	(0.23)	-	-	不明	且	3.90	3.84	0.06	-	-	
SP 139	II c北	SHCq13	-	0.17	0.14	-	円	U字	3.88	3.79	0.09	-	-	
SP 140	II c北	SHCq13	-	(0.23)	-	-	円か	U字	4.18	3.84	0.34	-	-	
SP 141	II c北	SHCq13	-	0.24	0.22	-	円	U字	3.87	3.71	0.16	-	根石(煤が付着)	
SP 142	II c北	SHCq12	-	0.34	0.29	-	円	箱	3.85	3.61	0.24	SE01を切る	-	

Tab.11 II区 遺構一覧表(6)

種別番号	調査区	グリッド名	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	発見時期	平面形	断面形	検出幅 (高さ)(m)	底部標 高(m)	深さ (m)	出土遺物	切り合い	備考
SP 143	IIc北	SHCq12	-	0.30	0.25	-	円	箱	3.85	3.71	0.14	SE01を切る		
SP 144	IIc北	SHCq13	-	(0.33)	(0.16)	-	円か	U字	3.87	3.78	0.09	SD01に切られる		
SP 145	IIc北	SHCq13	-	(0.28)	(0.09)	-	円か	U字	3.85	3.80	0.05	SD01に切られる		
SP 146	IIc北	SHCq13	-	(0.20)	(0.08)	-	円か	U字	3.87	3.70	0.17	SX06に切られる		
SP 147	IIc北	SHCq13	-	(0.43)	(0.21)	-	円か	U字	3.80	3.56	0.24	SK14に切られる		
SP 148	IIc南	SHCp15	-	0.30	0.29	-	円	皿	3.82	3.77	0.05	-		
SP 149	IIc南	SHCp15	-	(0.19)	(0.18)	-	円	U字	3.92	3.75	0.17	SP150を切る		
SP 150	IIc南	SHCp15	-	(0.15)	(0.13)	-	円か	U字	3.95	3.78	0.17	SP149に切られる		
SP 151	IIc南	SHCp15	-	0.30	0.27	-	円	U字	3.85	3.44	0.41	-		
SP 152	IIc南	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	欠番		
SP 153	IIc南	SHCq15	-	(0.47)	(0.39)	-	椭円	U字	3.85	3.49	0.36	青磁碗	-	根石を伴う。南に段をもつ
SP 154	IIc南	SHCp15	-	0.38	0.26	-	椭円	U字	3.80	3.55	0.25	SP155を切る		
SP 155	IIc南	SHCp15	-	(0.44)	(0.22)	-	椭円	U字	3.74	3.53	0.21	SP154に切られる		
SP 156	IIc南	SHCp15	-	0.28	0.26	-	円	U字	3.80	3.66	0.14	-		
SP 157	IIc南	SHCp15	-	0.35	0.28	登面2	円	U字	3.78	3.57	0.21	黄瀬戸鉢・ 折線皿・常滑窯 青磁碗	-	黄瀬戸鉢・ 折線皿を置き、その上に常滑窯 青磁碗が置かれている
SP 158	IIc南	SHCp15	-	0.37	0.31	-	円	U字	3.75	3.49	0.26	-	根石を伴う	
SP 159	IIc南	SHCp15	-	0.30	0.23	-	不整円	U字	3.86	3.68	0.18	-	根石を伴う。東に段をもつ	
SP 160	IIc南	SHCp15	-	0.33	0.30	-	椭円	U字	3.83	3.66	0.17	-		
SP 161	IIc南	SHCp15	-	0.37	0.35	-	椭円	U字	3.84	3.47	0.37	山茶碗鉢	SP162を切る	
SP 162	IIc南	SHCp15	-	(0.30)	(0.19)	-	椭円	U字	3.81	3.61	0.20	SP161に切られる		
SP 163	IIc南	SHCp15	-	0.37	0.29	-	円	U字	3.81	3.73	0.08	-		
SP 164	IIc南	SHCp15	-	0.48	0.47	-	円	U字	3.84	3.37	0.47	SD02を切る		
SP 165	IIc南	SHCp15	-	0.37	0.24	-	円	U字	3.81	3.30	0.51	SP166・SP169を切る		
SP 166	IIc南	SHCp15	-	(0.33)	(0.13)	-	円	U字	3.82	3.71	0.11	SP165に切られる		
SP 167	IIc南	SHCp14	-	0.26	0.23	-	円	皿	3.81	3.78	0.03	SD02・SP168を切る		
SP 168	IIc南	SHCp14	-	0.27	0.25	-	円	皿	3.85	3.77	0.08	SP167に切られる		
SP 169	IIc南	SHCp15	-	(0.40)	(0.21)	-	円	U字	3.81	3.61	0.20	古瀬戸中間の鉢皿	SP165に切られる。 SD02を切る	
SP 170	IIc南	SHCp14	-	0.38	0.36	-	円	U字	3.81	3.49	0.32	SD02を切る		
SP 171	IIc南	SHCq15	-	0.21	0.18	-	椭円	U字	3.76	3.69	0.07	SD02を切る		
SP 172	IIc南	SHCp14	-	0.48	0.30	-	円	U字	3.84	3.54	0.30	SD02・SP176を切る		
SP 173	IIc南	SHCp14	-	0.38	0.36	-	円	U字	3.82	3.67	0.15	SD02を切る		
SP 174	IIc南	SHCp15	-	0.34	0.26	-	椭円	U字	3.85	3.66	0.19	SP175を切る		
SP 175	IIc南	SHCp15	-	(0.32)	(0.27)	-	椭円	U字	3.84	3.54	0.30	SP174に切られる		
SP 176	IIc南	SHCp14	-	(0.47)	(0.35)	-	円か	U字	3.80	3.49	0.31	初山天目碗	SP172に切られる。 SD02を切る	
SP 177	IIc南	SHCq14	-	0.29	0.24	-	円	U字	3.86	3.57	0.29	SD01を切る		
SP 178	IIc南	SHCq14	-	0.35	0.26	-	椭円	U字	3.82	3.47	0.35	砥石	SP179を切る 空洞	
SP 179	IIc南	SHCq14	-	(0.36)	(0.27)	-	椭円	箱	3.84	3.64	0.20	SP178に切られる		

Tab.12 II区 遺構一覧表(7)

種別番号	面積区分	グリッド名	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	偏風時期	平面形	断面形	検出幅 (高さ) 高さ(m)	底部幅 高さ(m)	深さ (m)	出土遺物	切り合ひ	備考
SP 180	IIc南	SHCp14	-	0.27	0.26	-	円	U字	3.83	3.55	0.28	-	-	楕石を伴う
SP 181	IIc南	SHCp14	-	0.44	0.36	-	円	U字	3.85	3.66	0.19	SD01を切る	-	柱直跡、楕石を伴う
SP 182	IIc南	SHCq14	-	0.30	0.21	-	椭円	U字	3.89	3.62	0.27	SD01を切る	-	
SP 183	IIc南	SHCq14	-	(0.46)	(0.46)	-	方形	U字	3.86	3.46	0.40	SP178に切られる、SD01を切る	-	空洞
SP 184	IIc南	SHCq14	-	0.48	0.42	-	椭円	U字	3.87	3.68	0.19	-	-	2段になる
SP 185	IIc南	SHCq14	-	0.30	0.27	-	椭円	U字	3.85	3.44	0.41	砾石	-	
SP 186	IIc南	SHCp14	-	0.21	0.12	-	円	U字	3.86	3.67	0.19	SP187を切る	-	
SP 187	IIc南	SHCp14	-	(0.47)	(0.34)	-	椭円	Ⅲ	3.88	3.81	0.07	SP186に切られる	-	
SP 188	IIc南	SHCp14	-	0.40	0.31	-	椭円	U字	3.83	3.35	0.48	-	-	柱直跡
SP 189	IIc南	SHCq14	-	0.21	0.19	-	円	U字	3.87	3.69	0.18	-	-	石
SP 190	IIc南	SHCp14	-	(0.18)	(0.08)	-	円か	Ⅲ	3.92	3.85	0.07	-	-	東壁
SP 191	IIc南	SHCp14	-	0.34	0.30	-	円	Ⅲ	3.87	3.78	0.09	SD05を切る	-	
SP 192	IIc南	SHCp14	-	0.31	0.26	-	椭円	U字	3.85	3.47	0.38	SD05を切る	-	
SP 193	IIc南	SHCq14	-	0.16	0.16	-	円	U字	3.83	3.41	0.42	-	-	
SP 194	IIc南	SHCp15	-	0.60	0.48	-	椭円	Ⅲ	3.86	3.84	0.02	SP196を切る	-	
SP 195	IIc南	SHCp15	-	(0.31)	(0.09)	-	円か	U字	3.85	-	-	SP174・SP175に切られる	-	
SP 196	IIc南	SHCp15	-	(0.25)	(0.19)	-	円	U字	3.85	3.74	0.11	SP194に切られる	-	
SP 197	IIc南	SHCq14	-	0.19	0.13	-	円	U字	3.68	3.58	0.10	SP184の下に検出	-	
SP 198	IIc南	SHCq14	-	(0.38)	(0.37)	-	円	Ⅲ	3.87	3.74	0.13	-	-	
SP 199	IIc南	SHCq14	-	(0.20)	(0.16)	-	円か	Ⅲ	3.84	3.78	0.06	SD06・SP184に切られる	-	
SP 200	IIc南	SHCp14	-	0.28	0.24	-	椭円	U字	3.80	3.76	0.04	SD06に切られる	-	
SP 201	IIc南	SHCq15	-	(0.17)	(0.06)	-	円か	U字	3.73	3.67	0.06	SD02に切られる	-	
SP 202	IIc南	SHCp15	-	(0.33)	(0.28)	-	椭円	U字	3.76	3.37	0.39	SD04に切られる	-	
SP 203	IIc南	SHCp15	-	0.49	0.23	-	椭円	U字	3.79	3.61	0.18	SD04に切られる	-	
SP 204	IIc南	SHCp15	-	(0.40)	-	-	U字	4.23	3.84	0.39	-	-		
SA 01	IIa	SHC8+ q9+q9	N29°E	4.12	0.34	-	-	-	3.85～ 3.86	3.48～ 3.39	-	-	-	SP35・SP48・SP55
SA 02	IIc南	SHC12+ q12+ q13+q13	N26°E	8.57	(0.22)	-	-	-	3.74～ 3.87	3.53～ 3.68	-	-	-	SP155・SP161・ SP165・SP183・ SP184
SX 01	IIa	SHC6	N42°E	(1.13)	-	-	不規 長方形	Ⅲ	3.99	3.92	0.07	SP91・SK08に切られる	-	
SX 02	IId	SHCq6+ p17+ p16+p17	N25°E	(2.39)	(2.15)	-	方形か	箱	3.81	3.72	0.09	-	-	両端にピット (SP98・99・101・ 102・104～109)を伴う
SX 03	IId	SHCp17	-	(1.13)	(0.42)	-	円か	V字	3.76	3.32	0.44	-	-	
SX 04	IId	SHCp15	-	(1.35)	-	-	-	V字	4.40	3.86	0.54	-	-	
SX 05	IIb	SHCq9	W15°S	(0.68)	(0.22)	-	直線	U字	3.77	3.72	0.05	SP132に切られる る。SP134を切る	-	
SX 06	IIc北	SHCr11+ q13	-	(0.51)	-	-	直線	Ⅲ	3.92	3.82	0.10	SP146を切る	-	
SX 07	IIc北	SHCq11	N3°E	(1.67)	(0.49)	-	椭円	Ⅲ	3.91	3.78	0.13	SK13を切る	-	

Tab.13 IV区 遺構一覧表

施設番号	調査区	グリッド名	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	発見時期	平面形	断面形	検出幅 高(m)	底部幅 高(m)	深さ (m)	出土遺物	切り合い	備考
SD 01	IV	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	自然流路SR01と変更したため欠番
SD 02	IV	SFDH12・ ml2	W16°S	(1.82)	(0.37)	—	直線	且	4.36	4.31	0.05	—	—	SK02に切られる
SK 01	IV	SFDH11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SD01埋土の一部と理解したため欠番
SK 02	IV	SFDH11・ H2	N2°E	1.09	0.75	—	橢円	且	4.31	4.23	0.08	—	—	SK05を切る
SK 03	IV	SFDH11・ H2・ ml1・ml2	—	(1.63)	(1.31)	—	不整円	V字	4.29	3.79	0.50	—	—	SK05を切る
SK 04	IV	SFDH11	—	(0.88)	(0.66)	—	不整円	V字	4.22	4.02	0.20	—	—	SK03に切られる。SD01を切る
SK 05	IV	SFDH11	—	(0.64)	(0.42)	—	椭円	且	4.28	4.24	0.04	—	—	SK02に切られる
SP 01	IV	SFDml2	—	(0.15)	(0.12)	—	円	U字	4.44	4.37	0.07	—	—	—
SP 02	IV	SFDml2	—	0.19	(0.17)	—	円	且	4.38	4.35	0.03	—	—	—
SP 03	IV	SFDml2	—	0.20	(0.15)	—	円	U字	4.40	4.30	0.10	—	—	—
SP 04	IV	SFDH11	—	(0.32)	—	—	—	U字	5.25	4.88	0.37	—	—	—
SP 05	IV	SFDH11・ ml1	—	(0.39)	—	—	—	U字	4.94	4.72	0.22	かわらけ・ 漁港跡	—	SP06を切る
SP 06	IV	SFDml1	—	(0.14)	—	—	—	U字	4.93	4.79	0.14	—	—	SP05に切られる
SP 07	IV	SFDH11	—	(0.34)	—	—	—	U字	4.95	4.66	0.29	—	—	—
SP 08	IV	SFDml1	—	(0.13)	—	—	—	U字	4.83	4.40	0.43	—	—	—
SP 09	IV	SFDml1	—	(0.25)	—	—	—	U字	4.58	4.35	0.23	—	—	—
SP 10	IV	SFDH11	—	(0.32)	—	—	—	U字	4.68	4.27	0.41	—	—	—
SP 11	IV	SFDml1	—	(0.30)	—	—	—	V字	5.18	5.07	0.11	—	—	—
SP 12	IV	SFDml1	—	(0.54)	—	—	—	U字	4.70	4.39	0.31	土師器底	—	—
SP 13	IV	SFDH11	—	(0.24)	—	—	—	U字	5.37	5.07	0.30	—	—	SP15を切る
SP 14	IV	SFDH11	—	(0.32)	—	—	—	U字	5.20	4.97	0.23	—	—	—
SP 15	IV	SFDH11	—	(0.49)	—	—	—	U字	5.20	4.71	0.49	—	—	SP13に切られる。SP19を切る
SP 16	IV	SFDH11	—	(0.48)	—	—	—	U字	4.98	4.61	0.37	—	—	SP17に切られる
SP 17	IV	SFDH11	—	(0.62)	—	—	—	U字	4.92	4.29	0.63	—	—	SP18・SP20を切る
SP 18	IV	SFDH11	—	(0.34)	—	—	—	U字	4.96	4.61	0.35	—	—	SP17に切られる
SP 19	IV	SFDH11	—	(0.54)	—	—	—	U字	4.87	4.56	0.31	—	—	SP15に切られる
SP 20	IV	SFDH11	—	(0.16)	—	—	—	U字	4.39	4.21	0.18	—	—	SP17に切られる。 SK03・ SK06を切る
SK 01	IV	SFDH11・ ml1	W6°N	(4.29)	(1.20)	—	蛇行	V字	4.14	3.89	0.25	かわらけ	—	SK04に切られる
SX 01	IV	SFDH11	W51°N	(0.81)	—	江戸時代	不明	且	5.19	5.15	0.04	内耳鏡・ かむらけ	—	III-4層下面

Tab.14 遺物観察表（1）

Fig	報告書番号	調査区	遺物・部位	器種	产地	器形	反転復元	法蓋(cm)			生存率	色調	備考1	
								口径・幅	高さ	長さ	底径・厚さ	高台径		
27	1	I	SE01 上層	陶器	瀬戸美濃	火鉢		(26.0)	(3.0)	—	—	15%	灰白 にぶい黄(袖)	江戸後期
27	2	I	SE01 上層	陶器	瀬戸美濃	搖籃		—	(7.5)	—	—	10%	灰白 灰褐色(袖)	大窯2or3段階
27	3	I	SD01	陶器	瀬美	甕		—	(6.8)	—	—	小片	にぶい黄橙	肩部に線刻有
27	4	I	SD02	陶器	瀬美	甕		—	(10.5)	—	—	小片	灰白	
27	5	I	SP31	山茶碗		碗	反	—	(2.0)	(8.8)	(6.7)	底部 30%	灰白	
27	6	I	SP31	山茶碗		碗	反	—	(1.5)	(7.7)	(7.0)	底部 15%	灰白	
27	7	I	SK02	山茶碗		碗	反	(15.8)	(4.8)	—	—	10%	にぶい黄椎	
27	8	I	SK02	山茶碗		碗	反	—	(2.2)	(8.2)	(6.8)	20%	灰白	
27	9	I	SK02	山茶碗		碗		—	(1.6)	6.4	6.1	底部 65%	灰白	
27	10	I	SK02	山茶碗		碗		—	(3.2)	7.6	6.6	30%	灰白	底部に線刻有。高台が剥離する
27	11	I	SK02	山茶碗		小皿		8.0	1.9	4.0	—	完形	灰白	
27	12	I	SK02	須恵器		壺G		—	(8.9)	4.4	—	底部 完存	灰白	
27	13	I	SK02	陶器	瀬美	甕		—	(9.9)	—	—	小片	褐	
27	14	I	SK02	陶器	常滑	壺	反	(27.0)	(5.9)	—	—	口縁 5%	にぶい黄橙	常滑4型式 (袖)
27	15	I	SK02	石製品		砥石		10.1	12.0	4.2	—	—	灰黄	一部を欠損。重さ 659.5g
27	16	I	II層	陶器	瀬戸美濃	皿	反	—	(2.0)	(6.8)	(6.2)	底部 45%	灰白 黄須(袖)	見込部に文様。圓線。江戸後期
27	17	I	II層	磁器	肥前	染付 庄東綱		—	(3.3)	5.9	4.8	底部 完存	灰白 透明	見込部に文様。圓線。体部外面に草花文
27	18	I	II層	磁器	肥前	染付皿	反	(13.8)	3.8	(9.2)	(7.8)	45%	灰白 透明	灰須 (袖)
27	19	I	II層	陶器	瀬戸美濃	志野 丸皿		11.2	2.3	7.0	6.6	完形	浅黄 灰白(袖)	内外面に繩が付着。灯明皿か。大窯2段階後半
27	20	I	II層	陶器	不明	小瓶		—	(8.1)	5.4	5.0	底部 ～頸部 完存	灰白 灰オリーブ (袖)	江戸後期
27	21	I	II層	陶器	美濃	小瓶		2.0	10.9	4.5	4.4	完形	灰白 灰白(袖)	底部裏面に墨書き。江戸後期
28	22	I	SE02 上層	陶器	初山	内壳皿	反	(10.6)	2.4	(6.6)	(6.6)	25%	褐灰 暗褐色(袖) 灰褐色(蓋)	大窯3段階
28	23	I	SE02 上層	陶器	瀬戸美濃	折縁皿	反	—	(2.4)	(7.7)	(6.8)	15%	浅黄 にぶい黄(袖)	大窯4段階前半
28	24	I	SE02 上層	山茶碗		碗	反	—	(2.0)	(7.5)	(7.0)	40%	にぶい黄橙	
28	25	I	SE02 上層	陶器	瀬戸美濃	折縁皿	反	—	(1.1)	(7.0)	(6.0)	45%	浅黄橙 にぶい黄橙 (袖)	線刻「福」。大窯 4段階前半
28	26	I	SE02 上層	陶器	常滑	甕	反	(44.6)	(5.7)	—	—	5%	黄灰 にぶい黄(袖)	常滑5型式
28	27	I	SE02 上層	土師器		内耳鍋	反	(26.8)	(8.0)	—	—	10%	浅黄橙	
28	28	I	SE02 上層	陶器	初山	搖籃	反	—	(5.6)	(10.4)	—	20%	灰 黑褐色(袖)	大窯3段階

Tab.15 遺物観察表（2）

Fig	報告書 番号	測定区 遺物・層位	器種	產地	器形	反転 復元	法量(cm)			残存率	色調	備考1		
							口径・幅	高さ	底径・厚さ					
28	29	I	SE02 上層	瓦	丸瓦		(5.1)	(8.0)	(2.4)	—	不明	灰	布目瓦	
28	30	I	SE02 中層	陶器	初山	搖鉢	反	(26.2)	(3.1)	—	—	口縁 10%	にぶい褐色 にぶい赤褐色 (輪)	大窓3段階
28	31	I	SE02 中層	陶器	瀬戸美濃	搖鉢	反	(31.6)	(6.3)	—	—	20%	灰黃 褐色(輪)	大窓4段階後半
28	32	I	SE02 中層	陶器	瀬戸美濃	搖鉢		29.5	12.0	9.9	—	60%	暗赤灰 赤褐色(輪)	大窓2段階
28	33	I	SE02 中層	陶器	初山 志戸呂	壺		10.8	(9.5)	—	—	70%	灰 暗赤灰(輪)	江戸前期か
28	34	I	SE02 中層	陶器	志戸呂	大壺	反	—	(4.8)	(11.0)	—	20%	灰褐色 黒褐色(輪)	大窓4段階
28	35	I	SE02 中層	山茶碗	西湖混美	碗		—	(2.0)	7.6	7.0	底部 100%	灰白	
29	36	I	SE02 下層	土師器	かわらけ	反	(9.6)	2.3	(5.8)	—	25%	浅黄橙		
29	37	I	SE02 下層	土師器	かわらけ	反	(10.8)	2.4	(6.2)	—	15%	浅黄橙		
29	38	I	SE02 下層	土師器	かわらけ	反	(10.8)	2.3	(5.4)	—	30%	浅黄橙		
29	39	I	SE02 下層	土師器	かわらけ	反	(13.4)	3.4	(4.6)	—	25%	にぶい黄橙		
29	40	I	SE02 下層	陶器	瀬戸美濃	黄瀬戸碗		—	(2.5)	—	—	小片	淡黄 にぶい黄(輪)	大窓4段階
29	41	I	SE02 下層	陶器	瀬戸美濃	小天日碗		—	(2.9)	—	—	小片	にぶい黄(輪) 暗褐色(輪)	大窓2段階
29	42	I	SE02 下層	陶器	初山	壺		—	(0.9)	(6.2)	(6.0)	底部 20%	暗灰 黒褐色(輪)	大窓3段階
29	43	I	SE02 下層	陶器	瀬戸美濃	搖鉢		—	(4.9)	—	—	小片	明黄 黒褐色(輪)	大窓3段階
29	44	I	SE02 下層	陶器	瀬戸美濃	施利	反	—	(4.1)	(8.0)	(8.0)	底部 30%	灰白 暗褐色(輪)	江戸前期
29	45	I	SE02 下層	土師器	内耳鍋	反	25.6	11.5	(19.6)	—	50%	にぶい黄(輪)	足3ヶ所貼り付け 。その内2ヶ所 残存。B類	
29	46	I	SE02 下層	土師器	内耳鍋	反	(23.4)	(7.6)	—	—	口縁 35%	浅黄橙	B類	
29	47	I	SE02 下層	土師器	内耳鍋	反	(25.0)	(11.8)	—	—	口縁 30%	にぶい黄(輪)	B類	
29	48	I	SE02 下層	土師器	内耳鍋		23.3	(11.8)	—	—	口縁 100%	にぶい黄(輪)	B類	
29	49	I	SE02 下層	土師器	内耳鍋	反	(24.8)	(10.0)	—	—	35%	にぶい黄(輪)	B類	
29	50	I	SE02 下層	土師器	茶釜	反	(13.8)	(7.2)	—	—	20%	にぶい黄(輪)		
58	51	IIa	IV層	土師器	かわらけ	反	(10.7)	(3.0)	(7.2)	—	20%	浅黄橙	南壁	
58	52	IIa	IV層	土師器	かわらけ		—	(2.5)	4.7	—	底部 80%	にぶい黄(輪)	東壁	
58	53	IIa	V層上面	土師器	高杯		—	(6.0)	—	—	脚部 80%	根		
58	54	IIa	SP55	土師器	瓶		2.8	(4.3)	2.3	—	小片	浅黄橙		
58	55	IIa	SP07	石製品	砥石		9.3	(9.3)	6.1	—	灰白	重さ796.0g。 小口を欠損		
58	56	IIa	SP08	鐵滓	碗形滓		13.2	10.8	4.0	—	完形	明褐	重さ805.0g	

Tab.16 遺物観察表（3）

Fig 報告書 番号	調査区 地名・層位	器種	産地	器形 反転 復元	法量(cm)					残存率	色調	備考1	
					口径・幅 高さ・長さ 厚さ	高台径	底径	高さ	底径				
58 57	II b	III層	陶器	瀬戸美濃 鉄绘 折颈皿	11.0	2.4	6.8	6.5	85%	灰白 灰オリーブ (釉)	外面と見込部に煤 が付着。灯明皿か。亞窯第1段階 第3小期。南窓		
58 58	II b	III層	土師器	かわらけ 反	(9.8)	2.5	(6.7)	—	30%	橙			
58 59	II b	SP115	山茶碗	碗 反	—	(1.9)	(7.7)	(6.4)	底部 20%	灰白			
58 60	II b	SK09	山茶碗	小皿	8.4	2.0	4.5	—	完形	灰白			
58 61	II b	SK09	山茶碗	碗	(14.1)	4.8	8.1	6.6	底部 完存	灰白			
58 62	II b	SK09	陶器	深美 甕	—	(20.6)	—	—	体部 灰白 小片 黒灰(釉)				
58 63	II b	SP112	石製品	容器	11.7	(9.6)	10.3	—	50%	灰白	重さ1152.5g。脚 部に2個残存。内 外面に煤が付着。 印籠道。		
59 64	II c北	SE01 上層	山茶碗	碗	—	(1.8)	7.2	6.3	底部 完存	灰白			
59 65	II c北	SE01 下層	陶器	瀬戸美濃 瓶子	反	—	(1.1)	(8.2)	—	底部 35%	灰	古瀬戸中期	
59 66	II c北	SE01 最下層	山茶碗	片口鉢	—	(3.4)	—	—	—	5%	灰白		
59 67	II c北	SE01 上層	陶器	深美 甕	—	(5.1)	—	—	—	小片	灰黄褐		
59 68	II c北	SE01 上層	石製品	砥石	(4.5)	(8.9)	4.7	—	不明	褐灰	重さ133.1g		
59 69	II c北	SK13	山茶碗	小皿	8.8	1.7	4.6	—	完形	灰白	墨書き器。南窓		
59 70	II c北	SK13	土師器	伊勢型 鍋	反	(20.2)	(3.3)	—	—	10%	浅黄褐	外面に煤が付着	
59 71	II c北	SE03 上層	陶器	初山 天日碗	反	—	(1.4)	5.5	4.6	底部 にぶい褐 80% 浅黄(釉)		大窯3段階	
59 72	II c北	SE03 上層	陶器	瀬戸美濃 天日碗	反	—	(0.9)	4.4	4.1	底部 完存		加工円盤に転用。 古瀬戸後期IV期古	
59 73	II c北	SE03 最下層	陶器	瀬戸美濃 輪禪皿	反	—	(1.3)	(6.4)	(5.8)	底部 25% 灰白(釉)		登窯第1段階第2小 期	
59 74	II c北	SE03 上層	陶器	瀬戸美濃 志野丸皿	—	11.4	2.5	7.25	6.0	完形	灰白 淡黄(釉)	見込部に胎土目 5ヶ所認められる。 亞窯第1段階 第2小期	
59 75	II c北	SE03 上層	陶器	瀬戸美濃 志野丸皿	反	(12.4)	(2.6)	(7.7)	(7.1)	30%	灰白 灰白(釉)	底部裏面に胎土目 1ヶ所認められる。 亞窯第1段階 第2小期	
59 76	II c北	SE03 上層	陶器	瀬戸美濃 志野丸皿	反	—	(1.6)	(9.2)	(7.5)	底部 15% 灰白(釉)		底部裏面に胎土目 1ヶ所認められる	
59 77	II c北	SE03 最下層	陶器	瀬戸	甕	反	—	(3.9)	(14.2)	—	底部 20% 黄褐(釉)	大窯か	
59 78	II c北	SE03 最下層	陶器	瀬戸美濃 搖籃	—	(8.1)	—	—	—	口縁 10% 淡黄 暗灰(釉)	II類。大窯3段階 後半		
59 79	II c北	SE03 最下層	鉄滓	碗形萍	—	11.2	9.7	5.4	—	完形	明褐	重さ600.5g	
59 80	II c北	Ⅲ層 (後 土層)	陶器	瀬戸美濃	小皿	反	(8.8)	2.4	4.2	3.3	40%	灰黄褐 黄褐(釉)	内外面に煤が付 着。灯明皿か。底 部完存。江戸中 期。西壁

Tab.17 遺物観察表（4）

Fig 番号	報告書 番号	調査区	遺跡・層位	器種	産地	器形	反転 復元	法量(cm)				残存率	色調	備考1
								口径・幅	高さ・底径	厚さ	高台径			
59	81	IIc北	Ⅲ層	陶器	瀬戸美濃	志野丸皿		10.3	2.2	7.1	6.1	完形	不明 淡黄褐色(釉)	口縁部の一部と底部に煤が付着、灯明皿か。見込部と底部裏面に船土目が3ヶ所認められる。登窯第1段階第2小期。西壁
59	82	IIc北	Ⅲ層	陶器	瀬戸美濃	天目碗	反	(11.8)	(4.3)	—	—	10%	淡黄褐色(釉)	登窯第1段階第2小期。西壁
59	83	IIc北	Ⅲ層	磁器	肥前	染付碗		(8.0)	6.7	4.6	4.1	60%	灰白 青須・透明	底部完全。西壁
59	84	IIc北	IV層	磁器		青磁碗	反	—	(1.8)	(6.8)	(6.0)	底部 25%	白 明オリーブ灰 (釉)	見込部に陰刻。中世。北壁
60	85	IIc南	SD04B	山茶碗		碗	反	—	(1.4)	(7.6)	(7.4)	底部 25%	灰白	
60	86	IIc南	SD04B	陶器	瀬戸美濃	壺		—	(3.6)	—	—	小片	灰白	文様
60	87	IIc南	SD04B	陶器	不明	甕	反	—	(3.4)	(13.9)	—	底部 20%	灰白	
60	88	IIc南	SE02 下層	陶器	瀬戸美濃	天目碗	反	(11.7)	(5.0)	—	—	口縁 15%	淡黄褐色 (釉)	大窯3段階前半
60	89	IIc南	SE02 下層	陶器	瀬戸美濃	茶入		—	(3.4)	—	—	小片	灰白 白(釉)	近世
60	90	IIc南	SE02 中層	陶器	瀬戸美濃	端反皿 or 丸皿	反	—	(1.1)	(6.9)	(6.0)	底部 15%	灰白 明オリーブ灰 (釉)	底部裏面に付着物あり。大窯1段階 or 2段階
60	91	IIc南	SE02 下層	陶器	初山	大皿	反	(27.6)	(4.0)	—	—	口縁 15%	灰 淡黄(釉)	大窯3段階
60	92	IIc南	SE02 下層	陶器	志戸呂か	鉢か	反	—	(2.9)	(12.6)	—	底部 30%	灰白 黒(釉)	見込部に煤が付着
60	93	IIc南	SE02 下層	土師器		茶釜		13.1	15.6	18.8	—	80%	淡黄褐色	口縁部完全。外耳 1個欠損。脚3足中 2足残存。外面全 体に煤が付着
60	94	IIc南	SP137	陶器	美濃	鉢	反	—	(3.1)	(14.1)	(13.7)	底部 30%	淡黄 灰オリーブ (釉)	見込部に船土目。 江戸中期
60	95	IIc南	SP137	磁器	肥前	染付碗	反	—	(3.6)	(4.6)	(4.2)	底部 50%	灰白 透明・真銀 (釉)	見込部と底部裏面 に3ヶ所ずつ船土 目が認められる。
60	96	IIc南	SP137	陶器	瀬戸美濃	天目碗		—	(1.1)	4.7	4.2	底部 完全	淡黄褐色 (釉)	加工円盤に転用。 大窯3段階前半
60	97	IIc南	SP157	陶器	瀬戸美濃	黄瀬戸鉢		29.0	8.8	15.8	14.2	70%	淡黄 淡黄・濃綠 (釉)	見込部と底部裏面 に3ヶ所ずつ船土 目が認められる。 菊花文。登窯第1 段階第2小期
60	98	IIc南	SP157	陶器	瀬戸美濃	折線皿		10.2	2.3	7.2	6.3	75%	淡黄 淡黄(釉)	見込部と底部裏面 に3ヶ所ずつ船土 目が認められる。 菊花文。登窯第1 段階第2小期
60	99	IIc南	SP157	陶器	常滑	壺		—	(11.5)	12.6	—	底部 完全	にぶい赤褐色	16世紀
61	100	IIc南	SP176	陶器	初山	小天目碗	反	(9.2)	(2.9)	—	—	口縁 15%	灰 暗赤褐色(釉)	大窯3段階
61	101	IIc南	SP153	磁器	龍泉窯系	青磁碗		—	(3.0)	—	—	口縁 5%	灰白 明オリーブ灰 (釉)	外側に錦蓮弁文

Tab.18 遺物観察表（5）

Fig	報告書 番号	調査区	遺物・層位	器種	産地	器形	反転 復元	法量(cm)			残存率	色調	備考	
								口径・幅	高さ	長さ				
61	102	IIe南	SP161	山茶碗		片口鉢か	—	(5.3)	—	—	小片	灰白 オリーブ灰 (袖)		
61	103	IIe南	III層	陶器	志戸呂	灯明皿	反	(10.0)	(2.1)	—	口縁 20%	灰白 黒褐色(袖)	江戸後期、南壁	
61	104	IIe南	IV層	陶器	瀬戸美濃	皿		8.2	1.8	4.9	—	75%	灰 灰白(袖)	被熱する。江戸後期
61	105	IIe南	IV層	山茶碗		碗	反	—	(3.0)	(9.0)	(8.0)	底部 35%	灰白	
61	106	IIe南	V層上面	灰釉陶器 か		蓋か	反	—	(3.0)	(7.4)	(7.2)	底部 25%	灰白	
61	107	IIe南	SP136	陶器	常滑	蓋	反	(13.8)	(8.0)	—	—	口縁 25%	褐灰 暗赤褐色(袖)	12型式
61	108	IIe南	SP136	陶器	常滑	甕	反	(42.1)	(14.4)	—	—	口縁 20%	明赤褐色	12型式
61	109	IIe南	SP185	石製品		砥石		10.3	13.4	5.0	—	—	灰白	一部を欠損
61	110	IIe南	SP178	石製品		砥石		3.8	8.6	2.8	—	—	灰白	両小口を欠損。重さ137.6g
61	111	IIe南	SK25	金属製品		鉄貨		2.5	2.5	0.2	—	—	—	重さ4g。西壁
61	112	IIe南	SK25	金属製品		鉄貨		2.5	2.6	0.2	—	—	—	重さ3g。西壁
61	113	IIe南	SK25	金属製品		鉄貨		3.4	2.7	0.6	—	—	—	重さ10g。西壁
61	114	IIe南	II層	金属製品		鉄貨		2.4	2.4	0.1	—	—	—	重さ2g。西壁
62	115	IId	II層	須恵器		甕	—	(5.2)	—	—	小片	灰		
63	116	IIe	II層	金属製品		鉄貨		2.5	2.5	0.1	—	—	—	重さ3g。古窓水。南壁
64	117	IIe	III層	陶器	瀬戸美濃	天目碗	反	(11.6)	(5.6)	—	—	口縁 25%	灰白 黒褐色(袖)	登場第2段階第5小期。北壁
64	118	IIe	SP81	土師器		かわらけ	反	(9.7)	2.2	(6.2)	—	30%	橙	灯明灰。南壁
64	119	IIe	SP81	土師器		かわらけ	反	(9.9)	2.2	(6.8)	—	20%	にぶい黄橙	底部外面にヘラ状圧痕が認められる。南壁
64	120	IIe	SP81	土師器		鉢	反	(28.2)	(7.4)	—	—	口縁 15%	橙	南壁
64	121	IIe	SP81	瓦		軒丸瓦		(15.2)	(7.6)	—	—	瓦当 60%	暗灰	三巴文。殊文II個(推定)。南壁
64	122	IIe	SP81	瓦		軒平瓦		(15.2)	(16.2)	4.2	—	瓦当 60%	暗灰	南壁
64	123	IIe	SP81	瓦		道具瓦		(5.7)	(12.4)	(2.3)	—	40%	灰	玉縁部が認められる。南壁
64	124	IIe	SP81	石製品		砥石		(11.4)	10.7	5.3	—	—	灰オリーブ	重さ660g。一部を欠損。南壁
68	125	III	III層	陶器	初山か	擂鉢	反	—	(9.2)	(11.9)	—	10%	橙 橙(袖)	内面が平滑
68	126	III	IV層	山茶碗		碗	反	—	(3.5)	(7.4)	(7.0)	底部 50%	灰白	
68	127	III	SN01	磁器	龍泉	青磁碗	反	—	(2.2)	(10.3)	(9.2)	底部 10%	灰白 オリーブ灰 (袖)	
68	128	III	III層	金属製品		通管吸口	反	0.9	(8.2)	0.9	—	—	—	重さ5g。吸口に文様有り。雁首を欠損する。羅子の一部が残存
75	129	IV	SR01 上層	土師器		かわらけ	反	(11.5)	(3.0)	(7.0)	—	10%	にぶい黄橙	調査時はSD01
75	130	IV	SP12	土師器		内耳鍋	反	(22.0)	(5.7)	—	—	20%	にぶい黄橙	A類

Tab.19 遺物観察表（6）

Fig	報告書番号	調査区	遺物・層位	器種	産地	器形	反転復元	法量(cm)			残存率	色調	備考	
								口径・幅	高さ	底径・厚さ				
75	131	IV	SPO5	土師器		かわらけ	反	(14.8)	(2.4)	—	—	10%	橙	
75	132	IV	SP05	陶器	瀬戸美濃	描鉢	反	(30.4)	(5.0)	—	—	10%	灰黄 灰褐(袖)	古瀬戸後期IV段階新
75	133	IV	III層	土師器		かわらけ		—	(2.2)	5.7	—	底部 80%	橙	
75	134	IV	III層	土師器		かわらけ	反	(10.6)	2.5	(6.2)	—	35%	浅黄橙	
75	135	IV	III層	土師器		かわらけ	反	(10.6)	(2.3)	(6.4)	—	10%	橙	
75	136	IV	III層	土師器		かわらけ	反	(9.8)	2.3	(5.0)	—	30%	橙	
75	137	IV	III層	陶器	薩美	鉢	反	—	(4.9)	(14.0)	—	底部 20%	にぶい黄橙	
75	138	IV	III-4層	土師器		かわらけ	反	(9.6)	2.8	(5.0)	—	25%	浅黄橙	
75	139	IV	III-4層	土師器		かわらけ	反	(10.0)	(2.2)	(7.8)	—	20%	浅黄橙	
75	140	IV	III-4層	土師器		かわらけ		11.7	3.0	6.1	—	50%	浅黄橙	
75	141	IV	III-4層	土師器		かわらけ		10.6	2.5	6.9	—	60%	にぶい黄橙	底部充存
75	142	IV	III-4層	土師器		てづくね皿		3.8	1.3	—	—	完形	浅黄橙	
75	143	IV	III-4層	土師器		内耳鍋	反	(22.3)	(5.1)	—	—	10%	灰黄褐	B類
75	144	IV	III-4層	土師器		内耳鍋	反	(23.6)	(6.5)	—	—	口縁 20%	黄灰～浅黄	B類
75	145	IV	III-4層	土師器		内耳鍋		(27.6)	(4.5)	—	—	10%	灰	変形or片口。B類
75	146	IV	III-4層	土師器		泡塔	反	(21.8)	(4.0)	—	—	口縁 10%	灰白	口縁部外側に剥離 痕。そこに刻み目 が認められる
75	147	IV	III-4層	陶器	唐津	碗		—	(4.7)	4.6	4.5	80%	にぶい褐 灰褐(袖)	底部充存。見込部 に草木文、口縁部 に文様が認められる。 土灰。西型
75	148	IV	III-4層	陶器	瀬戸美濃	折縁皿	反	(10.2)	2.6	(6.2)	(5.4)	20%	淡黄 淡黄(袖)	大窯3段階
75	149	IV	III層	陶器	瀬戸美濃	志野丸皿	反	—	(1.5)	(8.0)	(6.8)	底部 20%	灰白	登窯第1段階第2小 周期
75	150	IV	III層	磁器		碗	反	(9.0)	(2.2)	—	—	口縁 25%	白	明神灰(袖)
75	151	IV	III-4層	陶器	常滑	壺	反	(12.2)	(9.6)	—	—	口縁 20%	灰	暗赤褐(袖)

第3章 総括

1 発掘調査の成果

今回の調査は、浜松城城下町の南部にあたる近世東海道沿いの塩町・旅籠町・伝馬町を対象として行った。本章では、主な調査成果について時代ごとに触れながら、今後の課題や展望を示すことで総括とする。

古代 確認調査（10次調査）も含め、少量ではあるが7～8世紀代の須恵器・土師器が確認された。注目すべき遺物としては、I区SK02から出土した壺G（12）が挙げられる。

今回調査地の南西約1kmには、古代敷智郡家に比定される伊場遺跡群が存在しており、古代東海道も今回調査地の1kmほど南を東西方向に通っていたと推定されている。当該期に明確に比定される遺構は確認されていないが、小規模ながらも郡家周辺において集落が営まれていた可能性がうかがえる。

中世前期 各調査区において、13世紀代を中心とする遺構が確認された。これらの遺構は、V層（基盤層）上面から掘り込まれており、無遺物でも切り合い関係や埋土の特徴などから推定されるものも含めると、比較的多くの遺構が当該時期に比定される。主な出土遺物は、山茶碗や渥美産・常滑産の陶器であるが、中には貿易陶磁器である青磁碗（11次調査－101・127）など注目すべき遺物も含まれる。なお、山皿（11次調査－69）の底部には不鮮明で判読できない墨書きが認められる。

この時期には、浜松城の北東側にあたる現在の野口町や八幡町周辺に、浜松城下町の原形ともいえる引馬宿が形成され、東海道は本遺跡南側で北上して引馬宿方面へと向かう近世東海道に近いルートを取っていたと推定されている。今回の調査における13世紀代の比較的豊富な遺構・遺物の存在は、後の城下町の下地となるような一定規模を有する集落が形成されていたことを示している。

中世末～近世初頭 今回調査地の南部分にあたるI区とII区を中心に、16世紀後半～17世紀初頭の遺構・遺物が確認された。遺構は基本的にV層（基盤層）上面から掘り込まれており、I区SE02およびII区SE02は、いずれも底面までの完掘には至らなかったが、主体となる出土遺物の年代から、いずれも16世紀後半頃に位置付けられる。

出土遺物は、瀬戸美濃窯をはじめ初山窯、志戸呂窯の大窯段階の陶器や、かわらけ・内耳鍋・茶釜等の土師質土器が主体となる。Tab.20には、今回の調査（確認調査含む）で出土した大窯段階の陶器の時期別組成を示した。サンプル数が限られてはいるものの、大窯第3～4段階の製品が多く認められ、特に第3段階後半には、当地の窯である初山窯の製品が急激に増加する。過去の調査でも指摘されているように、城下町の形成期が大窯第3段階後半（16世紀後葉）頃にあり、当地における陶器需要の拡大があったことがうかがえる（和田ほか2017）。この時期は、元亀元（1570）年に徳川家康が浜松へ入り、天正18（1590）年に豊臣秀吉によって関東へ転封されるまでの期間と符合しており、徳川支配による城下町の整備と陶器生産・流通への関与をうかがうことができる。

また、かわらけ、内耳鍋、茶釜等の土師質土器についても、当地域における当該期の資料は少ないことから、今後の編年や地域性の検討において重要なものと位置づけられる。

Tab.20 大塗段階における陶器の時期別組成

時期（段階）	1～2	2	2前半	2後半	2～3	3	3前半	3後半	3～4	4	4前半	4後半	4末
瀬戸美濃窯	2	2		1	1	2	2	3	1	1	3	1	
初山窯								11	1				
志戸呂窯									3				

近世 近世段階の遺構は全調査区で確認されており、その多くがIV層上面、またはIII層中から掘り込まれている。今回の調査においては、原則的にV層上面で遺構検出を行っているため、調査区壁面土層にて確認した遺構も多いが、I区 SE01、II区 SE03、SP157など深い遺構を中心に平面的に確認できた遺構もあった。また、遺物から年代を確定できないものの、II区のSX02やSA02などのように近世東海道と方向を同一にする遺構も確認された。

IV区のIII-4層では、細片化した内彎形内耳鍋やかわらけを主体とした遺物が多量に出土した。層位的には近世段階に位置付けられ、17世紀後半頃とみられる唐津焼の碗(147)も出土しているが、内彎形内耳鍋やかわらけの年代は、概ね16世紀後葉～17世紀前半頃に位置付けられる。2次的な廃棄による遺物の年代幅も考慮すべきであるが、IV区は他のI～III区と約100～200m離れていることから、層位の解釈について今後のIV区周辺の調査を踏まえて再検討する必要がある。

なお、確認調査の調査溝8～10(国道257号線と松尾小路との交差点付近)では河川跡とみられる堆積が確認された。近世の城下町の絵図に描かれている川の位置と一致しており、近代の市街地整備に伴う造成によって埋め立てられた状況が明らかとなった。

遺物については、江戸時代を通じて瀬戸美濃窯陶器が出土しており、中期以降の肥前窯磁器も確認されている。一方で焙烙など中期以降の土師質土器は比較的の出土量が少ない。I・IIe区からは、丸瓦・平瓦・道具瓦(29・121～123)が出土しており、周辺に本瓦葺の建物が存在していたと考えられる。また、II区では碗形の鉄滓(56・79)が出土しており、小鍛冶が行われていたことがうかがえる。

この時期の浜松城は、近世城郭として三の丸の拡張と城下町の再整備が行われた。城下町を通る東海道も17世紀前半頃には現在の国道257号と同じ道筋となり、絵図などからは、調査地周辺の東海道沿いは町人地として商業的に栄え、本陣や番所が置かれていたことがうかがえる。今回の調査においては、調査範囲が狭小であることから明確な建物跡は確認されていないが、井戸や土坑・小穴などの遺構は、近世城下町の隆盛を示すものとして注目される。

近代 今回の調査の層位ではII層に該当する。細かな堆積状況から頻繁に整地が行われていたことがうかがえる。また、焼土や炭化物を多く含む層が複数確認されており、火災や太平洋戦争時の空襲によるものとみられる。

なお、II区においては、現代の地割を境にII層の堆積状況が異なる箇所が複数確認されており、近代の地割が現代まで踏襲されていることが確認された。

2 今後の課題と展望

今回の調査は、浜松城城下町の南部にあたる近世東海道沿いを対象として行い、城下町形成前である13世紀代、城下町形成段階である16世紀後半～17世紀初頭、城下町成立段階である17世紀前半～19世紀代において、それぞれ遺構・遺物を確認することができた。

今後の課題としては、近世以降の層位が人為的な整地・造成によるものであるため、調査箇所に

よってその様相が異なり、層位の把握が難しい点が挙げられる。市街地における調査であることから調査区を小規模に区切らざるを得ない事情もあり、全体像の把握には丁寧で精緻な調査の積み重ねが求められる。

また、一定の出土量を得ることができた16世紀後半以降の陶磁器や土師質土器については、当遺跡におけるこれまでの調査成果も踏まえながら、陶磁器については当地の初山窯の動向を踏まえた流通状況の検討、土師質土器については当地域における編年や地域性に関する検討が必要となる。

当遺跡では、従来市街地では遺構がほとんど残存していないと考えられてきたが、近年の調査の蓄積によって、ある程度遺構が残存していることが明らかとなった。今後は、城下町の構造解明に向けて考古学的調査の蓄積も進めながら、文献史学や歴史地理学など多面的なアプローチを交えた調査研究を進めていくことが必要となるであろう。

註)

- 1) 土師器茶釜の編年については、遠江での良好な出土事例が乏しく、既存の編年綱に照らすと17世紀以降に降る。しかしながら本遺構の共伴関係を重視し、大室第3段階～4段階16世紀後半まで遡る可能性があることを指摘しておく。
- 2) 浜松城跡の10次調査1トレンチⅢ層から同様のものが出土している。鈴木一有ほか2015『浜松城跡10』浜松市教育委員会

参考文献

- 愛知県2007『愛知県史』別編 黑葉2 中世・近世 濱戸系
愛知県2012『愛知県史』別編 黒葉3 中世・近世 常滑系
井口智博2018『浜松城下町遺跡1・2・4次調査報告』『平成28年度浜松市文化財調査報告』浜松市教育委員会
井口智博ほか2016『浜松城跡11』浜松市教育委員会
太田好裕1996『浜松城跡－考古学的調査の記録－』浜松市教育委員会
大橋康二1989『肥前陶磁』(『考古学ライブラリー-55』) ニューサイエンス社
加藤理文2014『浜松城をめぐる諸問題』『地域と考古学』向坂嗣二先生還暦記念論文集
菊川シンポジウム実行委員会 2005『陶磁器からみる静岡県の中世社会』発表要旨・論考編
向坂嗣二1976『浜松市動物園内作左山横穴墳』『森町考古』10
静岡県1930『静岡県史』
鈴木一有ほか2015『浜松城跡10』浜松市教育委員会
東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会1996『鍋と甕 そのデザイン』(『第4回 東海考古学フォーラム 1996』)
水原慶二1995『常滑焼と中世社会』小学館
名古屋市博物館 2019『尾張の城と城下町 三英傑の城づくり・町づくり』(特別展『発掘された日本列島2019』地域展示ガイドブック)
山藤信二2008『近世瓦の研究』同成社
和田達也2016『浜松における中世城郭の調査－浜松城跡11次(引馬城)・伝松下屋敷2次－』浜松市教育委員会
和田達也ほか2017『浜松城下町遺跡』浜松市教育委員会

図 版

PLATE



1 II a 区 完掘全景（南西から）



1 I 区 完掘全景（東から）



2 I 区 完掘全景（南から）



1 I区 西壁断面（東から）



2 I区 北壁断面（南から）



3 I区 SEO1 断面（東から）



1 1区 SE02 断面（北から）



2 1区 SE02 中層遺物出土状況（北から）



1 I 区 SE02 完掘状況（北から）



2 I 区 SD01 完掘状況（西から）



1 I 区 SK02 遺物出土状況（北から）



2 I 区 SP15 根石出土状況（南から）



3 I 区 SP09 断面（南から）



4 I 区 SP20 断面（南から）



5 I 区 SP07 断面（南から）



1 II a 区 完掘全景（南から）



2 II a 区 完掘全景（北から）



1 II a 区 完掘全景（北東から）



2 II a 区 柱列 SA01（南から）



1 II a 区 西壁断面（北東から）



2 II a 区 東壁断面（北西から）



1 II a 区 V層上面高杯出土状況（東から）



2 II a 区 SP08 鉄滓出土状況（南から）



3 II a 区 SP39 根石出土状況（西から）



4 II a 区 SP47 断面（西から）



5 II a 区 SP13・SP39 断面（東から）



6 II a 区 SP48 断面（西から）



7 II a 区 SP55 断面（西から）



8 II a 区 SP45 断面（西から）



1 II b 区 完掘全景（北東から）



2 II b 区 南壁断面（北から）



1 II b 区 SK09 検出状況（東から）



2 II b 区 SK09 遺物出土状況（東から）



1 II b 区 SK09 断面（南東から）



2 II b 区 SK09 遺物出土状況（南西から）



3 II b 区 SP112 遺物出土状況（東から）



4 II b 区 SD01 断面（北から）



5 II b 区 SP126 断面（西から）



1 IIc区北部 完掘全景（南から）



2 IIc区北部 東壁断面（西から）



3 IIc区北部 西壁断面（東から）



1 II c 区北部 SE03 2 層上面遺物出土状況 (西から)



2 II c 区北部 SE03 5 層上面縄層検出状況 (北から)



1 II c 区北部 SE01 完掘状況（南から）



2 II c 区北部 SE01 断面（南から）



3 II c 区北部 SE01 底面遺物出土状況（西から）



4 II c 区北部 SE03 上層断面（北から）



5 II c 区北部 SE03 下層断面（北から）



1 II c 区南部 完掘全景（北から）



2 II c 区南部 完掘全景（北西から）



1 II c 区南部 完掘全景（南から）



2 II c 区南部 南壁断面（北から）



3 II c 区（南） 西壁断面（北東から）



1 II c 区南部 SD04・SD07・SD08 完掘状況（西から）



2 II c 区南部 SD02 完掘状況（西から）



1 II c 区南部 SD04A・SD04B・SD07 断面（西から）



2 II c 区南部 SD02 断面（西から）



3 II c 区南部 SE02 完掘状況（北から）



1 II c 区南部 SE02 上層断面（南から）



2 II c 区南部 SE02 下層断面（北から）



3 II c 区南部 SE02 底面遺物出土状況（北から）



4 II c 区南部 SP157 遺物出土状況（東から）



5 II c 区南部 SP157 遺物出土状況（北東から）



1 II c 区南部 SP137 遺物出土状況（南から）



2 II c 区南部 SP136 遺物出土状況（南から）



3 II c 区南部 SP153 根石出土状況（北西から）



4 II c 区南部 SP180 根石出土状況（東から）



5 II c 区南部 SP158 根石出土状況（北から）



6 II c 区南部 SP159 断面（東から）



7 II c 区南部 SP188 断面（南から）



8 II c 区南部 SP181 断面（南から）



1 II d 区 完掘全景（東から）



2 II d 区 南壁断面（北西から）



1 II d 区 SX02 断面（南から）



2 II d 区 SX02 完掘状況（北から）



1 II d 区 SX03 断面（西から）



2 II d 区 SP98 断面（北から）



3 II d 区 SP105 断面（北から）



4 II d 区 SP106 断面（西から）



5 II d 区 SP102 + SP109 断面（東から）



1 IIe区 完掘全景（東から）



2 IIe区 南壁断面（北東から）



1 III区 完掘全景（東から）



2 III区 東壁断面（西から）



3 III区 南壁断面（北から）



1 IV区 完掘全景（西から）



2 IV区 西壁断面（東から）



1 IV区 III・4層遺物出土状況（東から）



2 IV区 SK03・SK04 完掘状況（東から）



3 IV区 SK03・SK04 断面（東から）



4 IV区 SR01 完掘状況（東から）



5 IV区 SR01 断面（西から）



1 城下町形成期の出土遺物



2 近世城下町の出土遺物



I 区 出土遗物 (1)

SE02 上・中層



SE02 下層



I 区 出土遺物 (3)

IV層



V層上面



SP07



SP08



1 II a 区 出土遺物

III層



SP115

SK09



SP112



2 II b 区 出土遺物

SE01



64



65



66



67

SK13



68



69



70

SE03



71



72



73



76



74



75



77



77

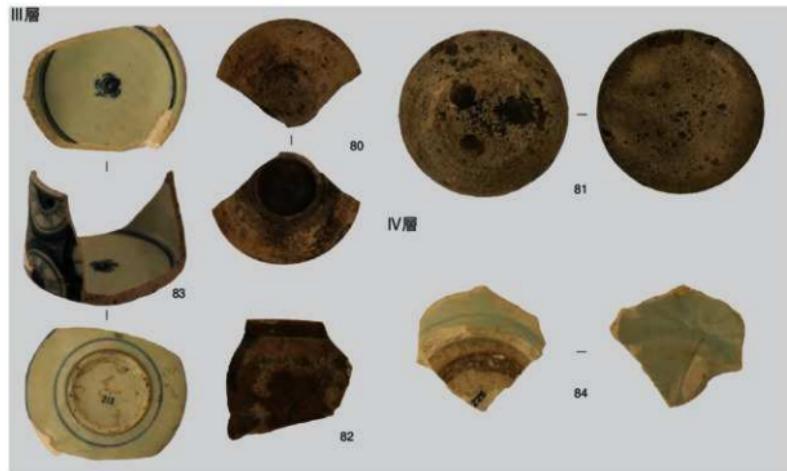


78



79





1 II c 区北部 出土遺物 (2)



2 II c 区南部 出土遺物 (1)



II c 区南部 出土遗物 (2)



II層

SP81



117



120



118



119



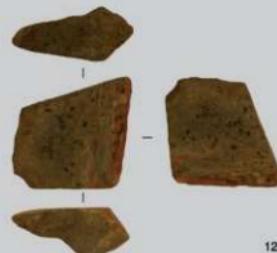
121



122



123



124

II層



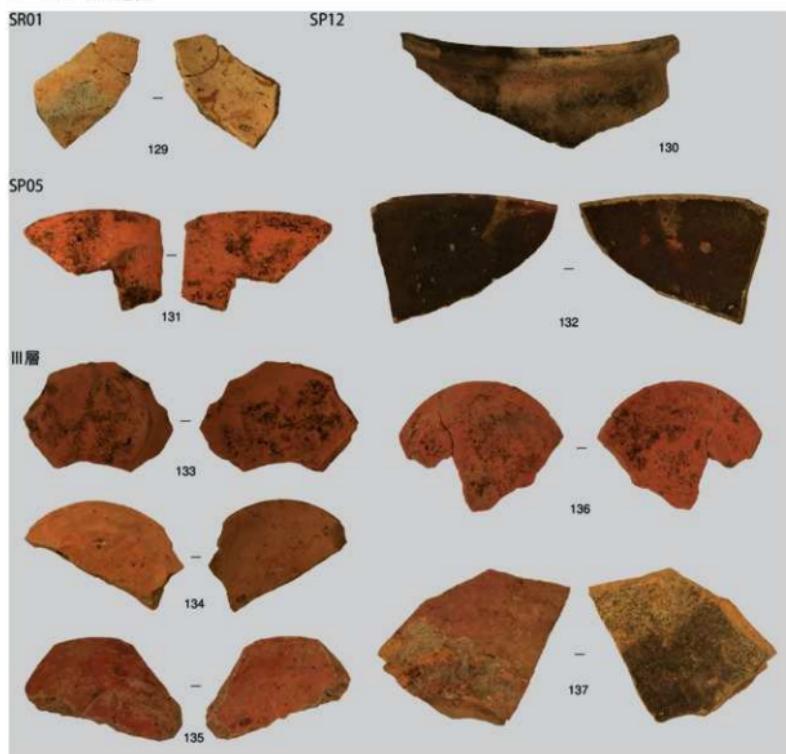
116



II c 区 出土遺物



1 III区 出土遗物



2 IV区 出土遗物 (1)

III -4 層



IV区 出土遺物 (2)

報 告 書 抄 錄

書名（ふりがな）	浜松城下町遺跡 2（はままつじょうかまちいせき 2）						
編著者名	鈴木京太郎、和田達也、西村匡広（編）						
編集機関	浜松市教育委員会 〒430-0929 浜松市中区中央 1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-8652 浜松市中区元城町 103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (050) 3730-1391						
発行年月日	2020 年 3 月 10 日						
遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
浜松城下町遺跡	静岡県 浜松市中区 塩町・旅籠町・ 伝馬町	01- 04- 18 22131	34 度 42 分 07 秒	137 度 43 分 41 秒	2019 年 7 月 2 日 2019 年 11 月 7 日	380.7 m ²	国道 257 号 改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
浜松城下町遺跡	城下町	鎌倉時代 戦国時代 江戸時代	溝 井戸 土坑 小穴 自然流路	陶器 磁器 土師器			

浜松城下町遺跡 2

2020 年 3 月 10 日

編集機関 浜松市教育委員会

(浜松市市民部文化財課が補助執行)

〒430-8652 浜松市中区元城町 103-2

発行機関 浜松市教育委員会

印 刷 株式会社明新社

Hamamatsu Castle Town Site

The 11th excavation Report

A Report of Archaeological Investigation on 16th-19th
Century Castele Town in Western Shizuoka,Japan



March,2020

Hamamatsu Municipal Board of Education